
転生して異世界廻り～D.C.?編～

黎白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生して異世界廻り〜D・C・？編〜

【Nコード】

N0262Y

【作者名】

黎白

【あらすじ】

目が覚めたら、知らない空間にいた。

ろだって!?

ま

神様を名乗る人に聞くと、死んだから転生し

あ、生きてる時転生したかったし、転生するならいろいろ世界巡りますか。

ってことで、テンプレで転生物でいくつか

のアニメ、小説、ゲームの世界を廻ります。

素人なんで、文章

とかおかしいと思います。

それでもいい人は是非読んでく

ださい。

ちなみに、ハ

ーレム、原作崩壊、チート、最強要素あります。チート、最強は多
分ですけど。後は他の作品のキャラがでるかもしれ
ません。

更新は不定期になると思います。

感想どんどんお願いします。

俺が転生!?!?……どうせならいろいろ廻ってやる!! (前書き)

一話目投稿。

文章おかしいかもしれないけど、許してください。

俺が転生!?!?……どうせならいろいろ廻ってやる!!

青い天井、青い壁、青い床、人、青い光。

「……。」

普通こういうのは真っ白とかじゃないのか？

「なんで全部青いんだよ……。」

あれか？二次創作とかでよくある転生か？まあ、色はおかしいような気がするけど。いままで読んだやつは、白とかだったしな。

「おい。」

まあ、転生じゃないとしてもこんな不思議体験はなかなかできないぞ。

「おい!!」

「うわっ!?!」

声が聞こえたかと思ったら、目の前に女性がいた。顔は中性的だが、胸があるし女性だろう。

「ようやく気がついたか。」

どうやら考え込んでいたようだ。

「えっと、誰だ？」

まあ、テンプレなら神様ってとこなんだろうけど。というよりも口調は男っぽいな。

「考えてる通り神様だ。後、男っぽくて悪かったな。」

心を読まれてた様だ。口調は別に気にしないでよくね？

「神様って事はやっぱり死んだんですか？」

「ああ。しかし、やけに冷静だな。普通は取り乱したりすると思うんだが。」

「別に未練は無いしな。それより、俺はどうなるんだ？」

「分かってるみたいだから、率直に言うが転生だ。ちなみに特典は三つな。」

三つか……。そいえば、いろいろ読んでる時何個か考えてたから……。

「一つ目が技能作成《スキルメイク》ってのがほしいんだけど」技能作成《スキルメイク》ってのは、小説読んでたら思いついたので、魔法、武術を初めとしてありとあらゆる技を作るって物だ。これ使えたら、漫画の技とか使い放題だし。

「チートだな。まあ、いい。ただし転生時には制限かけるから、転生後に力使って外しておけ。」

また、心読まれたよ。説明の手間省けたしいけどさ。

「？なんでわざわざ制限をかけるんだ？」

「転生時に体に負担書けないためだよ。お前は、一般人として生活してたから、転生時にあんなチートもってたら壊れる可能性があるんだよ。」

転生もいろいろ面倒くさいだな。

「わかった。2つ目と三つ目は、転生先で死んだ後他の世界にいきたいのと、転生先で最終的に恋人だった人が心から望んだら、一緒に連れて行きたい。」

出来るか分からないが、愛した人とは一緒に生きたいし、いろいろな世界にも行ってみたいからな。

「そんな事願ったのお前が初めてだぞ。」

「へえー。結構いると思ったけどな。出来るのか？」

「ああ。そうだ、オマケとしてネギまで出てくるダイオラマ魔法球をつけてやる。ちなみに、この中にお前が居ない限り時間は進まないから。逆に中に入ると、いくら過ぎしても外は時間が進まないから。」

と言っても若干は時間が流れるんだけどな。」

ダイオラマ魔法球って、確か一時間か1日になるやつか。

「ありがたいけど、何でだ？」

「三つ目の願い叶えるのに楽だからだよ。それにいくつもの世界渡ったら恋人も増えるかもしれないし、記憶保ったまま転生は余り多くの人間に出来ないから、裏技みたいなもんだ。」

「神様の世界で裏技あるんだ。まあ、いいや。ありがとう。」

そいえば、俺はどこに転生するんだ？」

「えっと、D・C・？って世界みたいだな。」

D・C・？って確かPSPでやったな。でも攻略したの偏ってるしな。

「なあ、特典の死んだ後再転生で行く世界は決まってるのか？」

「いや、2つ目からは自由でいい。」

「なるほど。」

なら、次の世界は気にしないとして。

D・C・？か……。

さくらは救ってあげたいな。確か、一人で何もかも抱え込んで苦しんでたし。

桜のバグは技能作成でなんとかなるからな。

「ありがとうな。」

「気にするな。ああ、そうだ。お前が死んだ理由はどうする？ 知りたいなら教えるが。」

「そいえば、俺が死んだ時の記憶が全くないな。」

「知れるなら教えて貰っておくか。」

「気になるしな。」

「ああ、教えてくれ。」

「まあ、簡単に言えば救いすぎだ。」

「救いすぎ？」

「人を救うなんて、俺以外にもいるし、俺より救っている人だっている。」

「俺が救った人なんてほとんどいないはずだ。」

「人にはそれぞれ寿命が決まってるんだ。それぞれの寿命が無くなったら、その人間は死ぬ。それが普通だし、覆す事もできないはずなんだ。」

「だが、お前はそれを覆す事が出来た。」

「ちょっと待ってくれ。俺は人の命救うなんてしてないぞ。」

何度か病氣の人を見つけたから、救急車をよんだくらいだ。」

俺は人が車に跳ねられそうなのを救ったみたいな事はしてない。

「それだよ。普通その人達は、誰にも気付かれずに死ぬはずだった。

けど、お前は無意識の内に自分の寿命を削り助けてたんだ。

削った寿命を与えてな。その結果自分の寿命が無くなり死んだんだ。」

「二ついいか？それなら俺は転生なんてしないんじゃないのか？他の人と同じ様になると思うんだけど。」

「普通はね。ただそれを見た神様達がコイツのした事は、誉められるべきだし。転生させたら、理不尽な結末とかを変えるんじゃないか。って事になって、転生させる事になったんだ。」

「運が良かったのか？」

「そういう事だ。」

俺がした事が、人の命を救ったのか。役に立てたなら嬉しいな。まあ、自分の寿命削るなんて馬鹿みたいだな。

「教えてくれて、ありがとうな。」

「ああ、そろそろ転生してもらおうぞ。」

「わかった。最後に聞きたいんだけど、神様の名前は？」

「俺か？夕紀だが。なんでそんな事を？」

「せっかく会ったんだから名前は知りたいし、能力使えばまた話せるしな。」

俺がそう言ったら夕紀は少しの間黙ってたんだか急に笑い出した。

「くくく……。そんな事言われたのは初めてだ。お前面白いな。名前は？」

「いまさらかよ。てか、神様なら名前わかるんじゃないのかよ。」

今まで何度も心読まれてたし、それくらいわかるだろ。

「良いじゃねえか。本人から聞きたいんだよ。」

「波柳 蒼影だよ。」

「じゃ蒼影、次の人生楽しめよ。」

「ああ。」

と返事をしたら、足元に穴が……。

「おい、まさか！？

次の瞬間には俺は落ちていて、聞こえたのは夕紀の笑い声だけだった。

夕紀side

くくく、面白いやつだったなあ。

「久しぶりに楽しませてもらったし、更にオマケつけるか。」

いろいろ世界渡りたいみたいだし、

「フラグ体質にハーレム体質をつけるか。これで蒼影が心から愛し、愛された場合、相手はハーレムを認めるっと。」

まあ、精神的疲労は多いだろうが、一人選んで悲しませるよりいいだろ。」

蒼影とはまた縁が有りそうだな。

次会う時が楽しみだ。

俺が転生!?!?……どうせならいろいろ廻ってやる!! (後書き)

書いてわかったけど、文章書くの時間かかる。

他の小説の作者さん尊敬します。

二話目は近い内に投稿します。

桜の中での出会い（前書き）

二話目投稿！

楽しんでくれたら嬉しいです。

桜の中での出会い

深々と。

桜が舞っていた。

驚くほどゆったりと。

音もなく。

見渡す限りに舞い散る桜の花びら。

それは一面を色づけるように、

白で塗りつぶされた世界を彩るように。

ただゆっくりと舞い踊っていた。

それはとても綺麗で、

呆れるくらいとても綺麗で、

一人ぼっちで、

ただ震えることしかできなくて、

寂しくて、

どうしようもなく途方にくれていたボクでさえ、

見惚れてしまうくらい、

綺麗な景色だった。

だから――――。

だからこれはきつと夢なんだと思った。

真っ白な夢。

夢のような夢。

いつか覚めてしまうことがわかっているのに、

それでも夢みることを夢見てしまう。

新しい予感に胸を膨らませるような、

日溜まりの中でふと涙をこぼしてしまいうような、

冬の最中に春の訪れを待ち望むような、

夢。

差し出された手をぎゅっと掴む。

暖かな手、

凍える世界で、

雪の中で、

ぬくもりを確かめるように、

ぎゅっと。

そんなーーーーー。

始まりを告げる夢の始まりーーーーー。

蒼影 side

桜と雪が一緒にあるってのも、やっぱり面白いな。普通じゃあり得ないしな。

やっぱりと言うか姿は子供の姿か。D・C・？に転生なら義之と同じ年だろうし、義之の誕生イベントか？

「しかし、綺麗な桜だな。魔法のおかげで一年中咲いてるから見飽きるか？

まあ、バグを取り除いてかなければ、始まらないな。」

どちらにしても杏やななが能力を貰うまでは、少し手を加えてるだけにしておくか。

「にゃ！？どうして子どもが！？」

そんな事を考えていると、後ろから声が聞こえたから振り向いてみた。そこには、黒いマントを着た金髪でツインテールの少女がいた。それは、ゲームで何度も見たキャラで俺の好きなキャラ、

芳野 さくら

だった。

「はじめまして、ボクは芳野 さくらって言うんだ。君の名前は？」

さくら side

いけない事だったのはわかっていた。

だけど、桜のバグを取り除けないかと調べてる間に、周りの人は結婚したりして幸せになっていた……。

ボクは寂しくなった……。

このままずっと独りなんじゃないかって……。

そんな考えばかり浮かんでいた……。

悲しかった……。

だから…、ボクは桜の力を使ってしまった。

ここ、初音島に戻って来て願った。

————ボクにも家族が欲しいです……。

————もしかしたら有ったかもしれない現実を見せてください……。

そして……、願いが叶い一人の男の子がいた。

嬉しかった。ボクにも家族が出来たら事が。

でも、同時に怖くなった。もしこの桜に何かあったらと思うと。

だけど、ボクはこの子に名前を付けた。

「桜内 義之。」

「……？」

義之君は何かわからなかったのか、首をかしげた。

「君の名前だよ♪」

その言葉で理解したのか、義之君は笑顔で答えてくれた。

「うん！」

そして、義之君と一緒に家に帰ろうとしたら、

「しかし、綺麗な桜だな。魔法のおかげで一年中咲いてるから見飽きるか？」

まあ、バグを取り除いてかなければ、始まらないな。」

声が聞こえた。そして、確かに魔法、バグと聞こえた。

ボクは気になって、義之君に待ってもらい声がした場所に向かっていった。

そこには、黒髪の男の子がいた。子どもが居るとは思わなくてつい

「にゃ！？どうして子どもが！？」

って言うってしまった。その男の子は、ボクに気がついたみたいでこっちを見てきた。

このまま何も話さないわけにはいかないから、ボクは名前を聞いてみよう

「はじめまして、ボクは芳野 さくらって言うんだ。君の名前は？」
って聞いてみた。

「僕は、波柳 蒼影だよ。」

その子、蒼影君は答えてくれたけど、その話し方に違和感を感じた。けど、まずはさっきの事が先だと思い、また質問をした。

「さっき、魔法とかバグとか聞こえたけど、君が言ったのかな？」

蒼影 side

「僕は、波柳 蒼影だよ。」

似合わねー。とっさに答えたけど、僕とか似合わすぎる。というよりも、さっきの聞かれてたのかよ。

これは、誤魔化しきれないかな？

はあー、魔法ってか力の事をバラすのは、バグを取り除く時に言うつもりだったんだがな。

まあ、さくらが独りで抱え込まないようにするには、丁度いいかもしれないから、別に良いんだけどさ。

しかし、何を話すかな……。

転生者って事と技能作成《スキルメイク》くらいで、残りは話さなくて大丈夫か。

「ああ、確かに俺だけだ。」

口調を急に変えたからか、さくらは少し驚いていたけど、すぐに反応してた。

「口調が変わったけど、それが本当の口調なのかな？」

「ああ。」

「ふーん。で、どうして魔法の事を知ってるの？それにその話し方も見た目とは違って大人っぽいのも知りたいかな。」

別に教えるつもりだったから、転生した事、特典として力を貰った事を話した。

「そういう訳で俺はここにいるんだ。」

ちなみに、さっき聞いてたかもしれないが、力を使えばこの桜のバグだって取り除ける。」

さくらは、話の途中からずっと俯いていた。

「そんなの無理だよ……。」

ボクだってずっと研究してきた……。

でも、バグを取り除く方法なんて見つからなかった!!」

さくらは今まで溜めていた物を吐き出すように、叫んだ。

「なら!! お前は誰かを頼ったのか？人間なんて一人で出来る事なんてほとんど無いんだよ!!」

なのにお前は独りで抱え込んで、誰かを頼らなかった。

そして、諦めるのか？一人じゃできなかったからって！！

お前は人の願いを叶えかったから桜のバグを取り除こうとしたいたのに、諦めるのか！？」

自分でも何を言っているのか、わからなくなっていた。

今まではゲームの中だからと思っていたけど、実際に会話をしていると考えた事が消えて、感情のままに喋っていた。

「……ひっく。だって……。」

さくらは、泣いていた。俺の言葉が原因だったのかもしれない。

今まで心に隠してた感情を、あんな言葉が表に出したのかもしれない。

だから……、さっきまで決めていたように、さくらの支えになりた

い。

「なんなら俺に頼ったらいい。

こんなんだけど、元々は高校生だったんだ。

寂しくて、辛かったんだろ？ずっと独りでいたんだろ？

俺が支えてやるから、俺を頼れ。」

俺の目の前で泣いているさくらを抱きしめる。

少しでもさくらが楽になればいいと思って。

「辛い時や悲しい時は一緒にいてやるから。」

「……本当に?……本当に頼ってもいいの?」

「ああ。だから、思いっきり泣いとけ。そして、また頑張ればいい。」

「ううう………。うわああああああああん!!」

さくらは泣き続けていた。今までの悲しみを吐き出すかのように。

さくら side

「落ち着いたか?」

ボクの前でそう言ってくれるのは蒼影君だ。

会ったばかりだったけど、ボクが誰かに言って欲しかった言葉を言ってくれた男の子。

蒼影君は転生者だって言っていた。普通は信じれないけど、蒼影君の場合は何故か信じる事が出来た。

「うん……。ありがとう。」

「気にすんな。言ったら支えてやるってな。」

蒼影君はそう言って笑いかけてくれた。
顔が熱くなるのがわかった。

お兄ちゃんの時以上かもしれない。

お兄ちゃんの時はダメだったけど、今度こそは……。

だから、蒼影君に感謝を込めて笑顔でお礼を言う。

「ありがとう♪」

蒼影 side

「ありがとう♪」

そういったさくらの笑顔はとっても綺麗だった。

この笑顔が見ただけでも良かった。

正直何言ってるかわからない所もあったし、恥ずかしがったけどな。

「ねえ、本当にバグを取り除けるの？」

「ああ。でも、今直ぐには無理だ。」

これは半分は本当の事だ。

転生したばかりだから、技能作成を完璧に扱えないの思うからな。

「どうして？」

「これだけのバグだからな。慎重にしないと、異常があったら困るし、まだ力を使いこなせないからな。」

多分7〜8年くらいはかかると思う。」

「そっか。でも取り除けるんだよね。」

「ああ。」

「ねえ？」

「なんだ？」

まだ何かあったか？特に無いような気がするが……。

「蒼影君は転生したんだよね？」

「そうだけど？」

今思うとさくらはよく信じたな。

「住む所ってあるのかな？」

……。

ヤバイ……。まさか、このまま野宿するしかないのか!?

力使えば何とか……。って、まだ使いこなせないじゃん。

「もし、行く所ないならボクと一緒に来ない?」

「いやいやいや、ありがたいけど俺男だぞ?」

そりゃ原作介入には丁度いいけど、俺は男だし!!

男は基本狼だぞ!!

普通に考えて、さっき会ったばかりの男を招くか!?

……普通は会ったばかりなのに自分を頼れと言わないか。

っと、いけねえ若干テンションがおかしくなった。

冷静に、冷静に。

「だって行く所ないんだったら、ボクの家に来た方がいいと思うんだけど。」

……ダメ……かな? (うるうる)」

……涙目に上目づかい。

前世でそんな事された事無いのにどいしろと……？

「わかったよ。じゃた世話になるよ。」

「そっか♪じゃあ義之君の所に行つて、暖かいお家にいこっか♪」

義之か……。

一応知らない振りしないとな。

「義之君？誰なんだそれ？」

「えーと、拾い子かな？」

さすがにそれは言えるわけないか。

まあ、行くとしますか。

「なら、早くいこうぜ。ずっと一人にするのは可哀想だからな。」

「そうだね♪」

さくらに連れられたら場所には、D・C・？の原作主人公である桜内 義之がいた。

義之はさくらに気がついたらしく、こっちにやってきた。

「待たせてゴメンね、義之君。」

「うん……。その子は♪」

「波柳 蒼影君だよ♪これから仲良くしてね。」

「うん！」

義之は顔をコッチに向けてきた。自己紹介しとくか。

「俺は波柳 蒼影だ。よろしくな。」

「ぼくは、さくらい よしゆきです。よろしく……。」

俺と違って礼儀正しいな。

「自己紹介も終わったし、そろそろ行こっか♪」

「どこにですか？」

「いいところだよ。暖かくて、にぎやかで、ご飯がいっぱい食べられるところなんだよ。」

『ぐうう……。』

お腹が鳴る音がしたから、なんとなく隣をしてみる。

さくらの言ったご飯にした義之のお腹が鳴ったんだろうな。

「うう……。／＼／」

義之の顔が赤くなってるし。俺も同じ立場だったら恥ずかしいしな。

「あはは♪じゃあ行こっか。」

さくらはそう言って歩き出したから、ついでにこうしたら急にこっちを振り向いてきた。

なにかあるのか？

「そうだ♪ちゃんと手を繋がないと。」

さくらは義之の下にいつて手をとった。また顔赤くなってるし。

そんな事を考えてたら、さくらがこっちに手を出してきた。

「なんだ？金ならぬぞ。」

違うとは思うがわざと言ってみる。

「にゃ！？そんなんじゃないよ。」

蒼影君も手を繋がないと。」

「嫌だ。」

即答する。

当たり前だ。見た目は子どもだけど中身は高校なんだ。そんな事恥ずかしくて出来るかってんだ。

「ダメ……？（うるうる）」

セコい。そんな事されたら断れねえじゃんかよ。

「わかったよ。」

さくらの手を取る。周りには人はいないし、居ても見た目は5歳くらいだからいいけど、恥ずかしいものは恥ずかしい。

「えへへ〜♪」さくらが笑顔一杯になった。

原作みたいに家族が出来たから嬉しいんだろう。

さくらと義之と共に桜の舞う道を歩いていく。

さくらはとても綺麗な笑顔を浮かべながら歩いている。

ちなみに、並び方は俺、さくら、義之の順番だ。

「ねえねえ蒼影君、義之君。」

ボクってまだ義之君に名前呼ばれてないよね。」

確かに義之は名前呼んでなかったな。

「確かに呼んでないな。」

「だよな。ねえ、ボク義之君に名前呼んで欲しいな。」

「えっ!?!」

困ってる困ってる。義之はこっちを見て助けを求めてくる。無視するけどな。

理由？面白いからに決まってんじゃない。

「えっと……。」「

さくらの視線を浴びて焦りながらも、

「さ、さくらさん……。」「

「えへへ♪やっと呼んでくれたねっ。」「

そんな会話をしながら歩くと、

「あ、着いたよ！」「

朝倉と書かれた家があった。

着いた場所、新たな出会い（前書き）

実は、書き始めてすぐにやめたくなった。

理由は、書き終えた三話を操作ミスで消してしまった。

でも、感想やお気に入り登録があったから何とか頑張りました。

って事で、楽しんでもらえれば嬉しいです。

着いた場所、新たな出会い

「着いたよ、蒼影君、義之君。」

俺の前には、朝倉と書かれた表札のある家があった。

なんつーか、普通の家だな。

「あれがお兄ちゃんの家だよ。みんないい人だから、安心していいよ。」

「うん…。」

心配しているのは義之だけなんだがな。俺はこんな身体だけど、精神的には高校だしな。

ピンポーン

やべ、いろいろ考えたたらどんどん進んでる。多分音姉や由夢と会うんだし、悪い印象は与えたくないな。

「はい。」

ぱたぱた

声と共に誰かが走る音がするな。多分由夢かな？

「じー。」

ドアの隙間から、小さな女の子……由夢がこちらを物珍しそうに見てくる。

「じーーーー。」

しかも、わざと擬音を言いながら見てくる。

ヤバいって、ハンパなく可愛いぞ。やっぱり無邪気だからなのか、可愛いすぎる。

「じーーーー。」

「え、えっと。」

義之困ってるな。俺は大丈夫だけど、こんなに見られたら困るわな。しかし、よくこんなに見れるな。俺が小さい時はじっと見るのとか苦手な子どもだったな。

「じーーーー。」

「あ、え、あの…。」

義之が俺を見てくる。多分助けが欲しいんだろうけど、今は無視する。

理由？

そっちの方が面白いと思うからに決まってんじゃない。

後は、さくらが助けられると思…………。

無理だな。さくら笑ってるし、この状況楽しんでるな。

「じーーーーー」。

「さ、さくらさん、蒼影…………。」

ギブアップみたいだな。

さくらもそう思ったのか、助け舟をだす。

「にはは、こんばんは由夢ちゃん。」

「こんばんは。」

さくらに対して由夢が返事をする。

返事はいいんだけどさ、返事する時くらい視線外せばいいのに。

「この子が義之君だよ。この前にお話した子ね。」

「うん。」

「で、この子は蒼影君、少し事情があるから、一緒に連れてきたんだ♪」

「うん。」

やっぱり可愛いよなー。生きてた時弟しかいなかったから、妹とか

姉とか憧れだったからな。

「音姫ちゃんもこっちにおいで。」

さくらが扉の向こうに声をかける。

多分音姉がいるんだろうな。

「……………」

小さな息と共に扉の奥から女の子が出てくる。

「ほら、ゆめ。ちゃんとそとにで。」

「はい。」

そう言って二人が出てくる。

由夢は恥ずかしいのか顔が少し赤く可愛いけど、音姉はぶすつとしている。

結構心にグサツと来るかも。

どうすっかな。義之は困り果てて役に立ちそうにない。まあ頼ろうとは思わないけどさ。

「じゃあ、ボクはお兄ちゃんに話があるから、後は適当にやってね。」

さくらのヤツ放置しやがった。この空気なんとかするの面倒だな。

「ちゃんと仲良くするんだよ。義之君、蒼影君。」

さくらが家の中に入っていくと、あるのは由夢と音姉の視線だけ。

はあ……、しょうがない。まずは自己紹介といくか。

「自己紹介といこうか。」

俺は波柳 蒼影。よろしくな。（ニコッ）」

二人の顔が赤いんだけど……、まさかなあ……。

出会ってすぐ惚れる訳ないしな。寒いだけだよな。

「えと、さくらいよしゆきです。よろしく。」

俺の後に続いて、義之はぺこりと頭を下げ、そして顔を上げてから手を差し伸べた。

「……あはは。」

あははって。

その手に触れるものはなく。

あれは痛いな。手出して取られないのは嫌だよな。手出さなくて良かった。

「……………」

義之はゆっくりとその手を戻そうとする。

義之の小さな手を、これまた小さな手が包み込んだ。

「えっと。」

「ゆめ。」

「え?」

「あさくら ゆめ。」

由夢はにこーっと笑顔を浮かべる。やっぱりいい子だな。

「えっと、なまえ?」

「うん。」

名前以外にこの状況で何を言うんだよ。

「あさくら ゆめ。」

由夢は俺の方を向いて、もう一度言う。

律儀だな。

「よろしくな由夢。」

「……………うんっ。」

少し赤くなりながら答える。

「よろしくね。お……。」

「「お?」」

おにいちゃんかな?もしそうなら結構嬉しいな。

「そうえいおにいちゃん、よしゆきおにいちゃん。」

……………やっぱり嬉しいな。

しかも、頬を赤くしながらだし若干上目遣いになってるからな……………。

「(ムッ)おとめ。」

音姉はポツリと一言だけ言い家に入ろうとした。

その声は気を抜いたら聞き逃しそうだった。

「よろしくな。」

「もしかして、ぼくめいわくだった?」

ありやりや、義之がネガティブになっちまったよ。

「んー、そんなことないよ。」

「たけど…。」

「おねえちゃん、さいきんおこってばかりだから、きにしないでいいよ。」

由夢はにこつと義之にまたまた笑顔を向ける。

この、ラブルジョワめっ！

てかラブルジョアって意味わかんないんだよな。

使う場面とかはわかるし、予想は出来るけどさ。

「由夢がこう言ってたんだから、しんじてやれよ。」

「うん…。」

「それに、おじいちゃんもおかあさんもだいかんげいっていったもん。」

歓迎されるってのはやっぱり嬉しいな。

「それにわたしもいやじゃないし。」

「……おにいちゃんがにおにいちゃんになるの。」

嬉しい事言ってくれるな。

「ありがとうな。（ナデナデ）」

」／／／／「

また由夢が赤くなったな。

「そつ、それよりはやくなかにはいろう。」

「そうだな、寒いしな。」

由夢に引っ張られ玄関に入ると、家の中から暖かい空気を感じる。

「あ、えと、おじゃまします。」

「んじゃ、お邪魔しまーす。」

「ちがうよ。」

「え?」

「ただいまだよ。」

……ああ、そういう事か。

「ここはおにいちちゃんのいえになるの。」

「え?」

まだ分かってないみたいだな。

「だから、ただいまだって。」

「あつ。」

義之はようやく分かったみたいだな。んじゃ、俺もだな。

「「ただいま。」」

これから俺達はこの家族の一員となる。

トントントン

「無理だ……。ここから先が全く思いつかねえ。」

俺が何をしているかというと、生きていた時からの趣味である時計作りの設計図を作っている。

生きていた時に、なんかのテレビで見てから猛勉強した。

お蔭で学校の勉強はまったくだったな。

三年くらいでだいたいは覚えたから、空いてる時間はずっとやっていたな。

近くに、時計技師がいたから運がよかったんだよな。生きていた時は、部品作りの関係で簡単な物だけだったが、技能作成《スキルメイク》のお蔭で細かい部品を出せるからな。

生きていた時に作れなかった、複雑な時計を作りたいんだけど、全く思いつかないんだよな。

他にも友人や家族に贈るのも作りたいから、男女それぞれ作らないといけないしな。

力使って作ればいいって？

それじゃ面白くないし意味ないじゃん。部品も設備あれば一から作るんだけどな。

トントン

？誰か来たみたいだな。ちなみに俺は自分の部屋を持っている。原作より部屋数とか多くなってるみたいだな。

「入っていいぞ。」

「そうえいおにちゃん、いっしょにあそぼー。」

入ってきたのは、由夢だった。由夢の後ろには、音姉と義之もついてきていた。

「音姉と義之も？」

「うん。」

「ゆめだけだとあぶないから。」

音姉はやっぱりお姉さんなんだな。なんだかんだ言って、由夢を心配してるみたいだしな。

「やっぱり優しいんだな、音姉。／（ナデナデ）」

「そんなことない。／／／」

普段冷たいってかクールっぽいから、赤くなっているとギャップがあって可愛いよな。

「…………（ムツ）」

なんか由夢の機嫌が悪くなったか？

「で、由夢なにするんだ？（ナデナデ）」

頭を撫でながら由夢に聞く。こういう時は、頭を撫でたら機嫌直るからな。

「／／／…………かくれんぼがいい。」

かくれんぼか……。家の中だけたら大丈夫かな？

「なら、俺が鬼をするから隠れな。」

「「うんっ！」」

由夢と義之が元気に返事をして部屋を出て行く。

「音姉は行かないのか？」

音姉は出ていこうとせずに、俺の方をじっと見ていた。

「いいの？」

何がだ？

「鬼になって。」

ああ、何もせずに鬼をする事についてだろうな。

実際、隠れるより探す方が好きだしな。

「大丈夫だよ、だから音姉も行っているよ。」

「わかった。」

音姉も行ったか。まずは設計図を片付けてっと。

この家原作じゃ無いものまであるんだよな。

前なんか、暇つぶしに探索してたら押し入れみたいのあったから、中に入ってみたらいきなり閉まったからな。

しかも、外からは簡単に開く癖に、中からじゃ全く開かないから困るんだよな。

中は光が届かなくて真っ暗だし、閉じ込められた時はかなり怖かったな。

まあ、分かりにくい所だし隠れたりはいしないだろうけど……。

「つと、そろそろ探しに行くとしますかね。」

まずは、義之を探して音姉か由夢だな。

義之の事だから、リビングにでも居るんじゃないか？

リビングに行くと、義之が隠れてた。いや、隠れてるんだろうけどさ、足が丸見えなんだよな。

あれで隠れているつもりなんだろうか。

「よしゆーき。」

ビクッ

……足動いたよ。声に反応したら駄目だろう。特にかくれんぼで声に反応したら、すぐに見つかるに決まってるから。

「義之みーつけた。」

「もうみつかったの？なんでわかったの？」

これは、言わない方がいいよな……。

なんつーか、可哀想だし。

「勘だ、勘。」

「そっか、ねえふたりは？」

「まだ見つかってない。」

「なら、さがしにしようよ。」

「わかってるって。」

義之を見つけて、次は音姉を探すことにした。

「ねえ、どこにいるかな？」

「わかんねえ。まあ適当に探していくしかないだろ。」

「そうだね。」

音姉達は、義之と違ってちゃんと隠れるからな。

しかも、体が小さいからいろいろ隠れるし、面倒この上ないな。

家の中だからいいんだけど、外だったらかなり時間かかるって断言出来るな。

その後、家中を探して三十分。なんとか音姉を見つけて、残りは由夢だけとなった。

「ゆめ、みつからない。」

「どこにいったんだろう。」

大体は探したはずなんだけどな。探してない場所は一つだけなんだけど……、まさかなあ……。

残った探してない場所は、前に俺が入ってみて閉じ込められた場所だけだ。

「後は俺が探すから、二人は休んでな。」

「でも……。」

「大丈夫だって。すぐに見つけてくるから。」

「わかった……。」

「うん……。」

二人は疲れている筈だし、休ませないとな。

それに、もしあの場所なら音姉や義之が行かないためにも、行き方教えない方がいいしな。

俺は行くとしますか。その場所は周りに対した物は無く、押し入れが有るだけだから、余り目立たない。

確か原作には、こんな話なかったからこの世界だけなんだろうな。

「ひっく。」

……泣き声か？嫌な予感が当たったのかな。

由夢が隠れようとして、閉じ込められたのかもしれないな。

あれは、俺でも怖かったんだし、由夢みたいな小さな女の子だった
らもつと怖いよな……。

もし由夢のトラウマになったら可哀想だな。

「うえええん。」

開けるか……。

「由夢、大丈夫だったか？」

扉を開けると、涙を流して泣いている由夢がいた。

「そうえい、おにいちゃん…。

こわかったよお………！！」

由夢は俺の姿に気付くと、抱きついてきた。

「早く来れなくてゴメンな、由夢。」

涙を流しながら俺に抱きついてくる由夢の頭を撫でてやる。

少しでも恐怖が無くなればいいと思って。

由夢 side

きょうは、そうえいおにいちゃんとおねえちゃんたちといっしょによびにく。

へやにはいったあとに、そうえいおにいちゃんがおねえちゃんをなでなでしてたから、うらやましいとおもってたらそうえいおにいちゃんがわたしをなでしてくれた。

そのあと、みんなでかくれんぼをすることになって、わたしはかくれにいった。

「えつと……、まえそうえいおにいちゃんがいたところは……。」

まえ、そうえいおにいちゃんがかくれてたばしょにいてみると、とびらがあいてたからかくれてみた。

ツバタン

「え?。」

うしろをみると、あいていたとびらがしまっていた。

なかはまっくらだったけど、すぐにそうえいおにいちゃんがきてくれるとおもったら、こわくなかった。

でも、じかんがたってきたらこわくて、かなしくなって、なみだがでてきた。

「ひ、ひっく、ひっく。」

とひらはあかなくて、まっくらでだれもいなくて、こわかった。

「うええええええん。」

そうおもったら、なみだがでて、とまらなかった。

ずっとこのままなんだ……ておもってたら、

「由夢、大丈夫か？」

とびらがあいて、そうえいおにいちゃんがいた。

「そうえい、おにいちゃん…。」

こわかったよお………。」

きがついたら、そうえいおにいちゃんにだきついていた。

「早く来れなくてゴメンな、由夢。」

そういつてわたしのあたまをなでなでしてくれた。

そうえいおにいちゃんのおいをかいでいると、とってもあんしんしてねむくなった。

「そうえい、おにいちゃん……、だいすき……。」

蒼影 side

「そうえい、おにいちちゃん……、だいすき……。」

「寝たみたいだな。」

さっきまで泣いていた由夢は、いつの間にか寝ていた。

泣き疲れたんだろうな。由夢を背中に乗せて、音姉達の所に行く。

その後、音姉達を落ち着かせて今日は終わりとなった。

「今日はいろいろ大変だったな……。」

コンコン

誰だ？こんな時間に誰か来るか？

「そうえいおにいちちゃん、はいつていい?」

「由夢か? いいぞ」

こんな時間にどうしたんだろう。いつもなら寝てるんだけど……。

「そうえいおにいちちゃん、きょういつしよにねていい?」

「どうしてだ？」

一瞬驚いたが、由夢を驚かさないように何とか表面に出さずにすんだな……。

「こわいから……。」

なるほど、今日の事か……。あれは俺も悪かったし、少しくらいいか。

「いいぞ、こっちにおいで。」

「うんっ！」

由夢は笑顔を浮かべて、こっちにやってきた。

由夢は、ベッドに入ると抱きついてきた。だから、また頭を撫でやる。

「ありがとう、そうえいおにいちゃん。」

「どういたしまして。じゃあ、寝るぞ由夢。」

「おやすみ、そうえいおにいちゃん。」

「おやすみ、由夢。」

その後は、由夢が眠りにつくまで頭を撫で続けたから、腕が痛かったがたまにはこんなのも悪くない。

そう思いながら、俺も眠りについた。

次の日、朝起きたらさくらと音姉、特にさくらの機嫌が悪くて、直すのに時間がかかったのは余談だ。

音姉と秘密の共有（前書き）

四話目なんとか完成しました。

音姉と秘密の共有

俺は今、音姉を探している。

前みたいな遊びではなく、真面目にだ。

なんで音姉を探しているのかって言う则由姫さんが亡くなったからだ。

由姫さんには一度だけ会った事がある。その時は元気だったし、まだ時間があると思った。

だから、油断していた。

（回想）

俺はお見舞いに行った後、少ししてから初めて技能作成《スキルメイク》の力を使った。

まずは、力を使った時の代償を無くすために、代償軽減《オールワシ》、そして作った力を忘れないように、技能目録《スキルブック》を作った。

制限が有ることはわかってたけど、二つとも初めに必要だと思ったから一つずつではなく同時に作った。

作り終えたら、体中に激痛に襲れ、意識を手放した。

俺が目覚めた時、自分の部屋のベッドで寝ていた。起きて一番に不思議に思ったのが家の中の空気がおかしい事だった。

暗く、悲しみに包まれてた。俺は嫌な予感がして、部屋を出るためにベッドから起きようとした。

その時さくらが入ってきた。目は赤くなっていて、俺を見た途端涙を浮かべた。

「蒼影君っ！」

「つと。」

さくらが急に抱きついてきたから、体制を崩しそうだったけど、何とか持ちこたえた。

「良かったっ。蒼影君が……生きてて。」

生きてて？俺はどの位寝てたんだ？

「さくら、なにがあったか教えてくれないか？」

「うん……。実は音姫ちゃん達が蒼影君を見つけたんだ。蒼影君が倒れてるのを見つけて、ボクを呼んでくれたんだ。」

「音姉達が……。」

「うん……。だから部屋まで運んだんだよ。でも一週間も起きないし、それに……。」

「何かあったのか……？」

「音姫ちゃんと由夢ちゃんのお母さんが……。」

由姫さんが……。まさか……。

「由姫さんがどうしたんだ？」

「亡くなったんだ……。」

「由姫さんが……死んだ？」

信じれなかった……この前まで元気だったのに……。

「……………。ボク出しておくね。お兄ちゃんの手伝いしないといけないし。」

「ああ……。」

俺を気遣ってくれたんだろう。

俺の中にあるのは、悲しみ、無力感、罪悪感、そして自分に対する怒りだった。

色々な感情で押し潰されそうになった。

俺が一週間も眠ってる間に、由姫さんが死んだ事に対する悲しみ、貰った力を使いこなせなかった無力感、救えたかもしれないのに救えなかった事に対する罪悪感。

そして、大切な時に眠ってなんかいて、何も出来なかった事に対する怒り。

もし同時にしなかったらここまで眠らなかったかもしれないのに。

「ごめんなさい……………」

俺はいつの間にか、泣いてしまった。

泣きながら、俺は決心した。

由姫さんの分まで音姉、由夢を幸せにする。もう後悔しないように精一杯生きて行こうと。

前に進んで行こうと思った。

それからは大変だった。由夢はもちろん義之も悲しんでたし、慰めないといけなかった。

当たり前だけど、みんな悲しんでいた。それに、葬式の準備もあったからみんな忙しかったみたいだから、必然的に由夢、義之の相手は俺だった。

ただ音姉だけは泣いていなかった。

いや、俺達の前ではかもな……。

感情を溜め込んで壊れないかと思ったけど、見た感じは大丈夫そうだから安心してた。

葬式の時には感情も吐き出すだろう。そんな事を考えていた。

そして、葬式の日。

聞こえるのは、周りの人の声、由夢の泣き声だった。

音姉はまったく泣いていなかった。でも、それは表面上だけだ。俺は、音姉がかなり悲しんでるのがわかっていたから、音姉が心配だった。

そして心配していた事が起こった。

音姉が居なくなっていた。

（回想end）

「はあはあ、まったくどこにいるんだよ、音姉は。」

技能作成を使えば力を作れたけど、まだ使いこなせてないから、代償軽減がちゃんと発動するわからなかった。

だから、自然と探す方法は自力だった。

「ヤバいな。日も暮れてきたし、音姉が病気にでもなったら嫌だし。」

さっきから島中を走り、時間はどんどん過ぎていき辺りは少し暗くなっていた。

病気になったら由夢達も心配するしな。

公園に着くとベンチに見慣れた人影があった。

「はあはあ、こ……ここだったか……。」

「……………」

音姉は俯ていて、その姿は泣いているようにも見えた。

「はあはあ、よしっと。」

息を整えてから、音姉の座っているベンチに歩いていく。

「音姉、こんな所にいたのか。」

「……………」

無言。聞こえていないって事はないだろうし、放っておいて欲しいんだろう。

「おーい、音姉？聞こえてる？」

だとしても、放っておかないけどね。音姉が悲しんでるのはわかるから、慰めてあげたいし。

「……………聞こえてるよ。」

ぽつりと呟いた。

「聞こえてたようだな。なら、返事してくれよ。」

「……………」

まただんまりか。

「皆心配してたんだぞ。」

ベンチに座ってる音姉の隣に俺も座る。

「いいの……。…」

「いいわけない。誰とも会話をしてないし、ご飯も食べてない。

由夢や義之も心配してたし、このままじゃ病気になるぞ。」

「いいの。私病気になるの。」

「病気になったら、辛いし苦しいぞ。

純一さんやさくら、由夢や義之ももっと心配するぞ。」

「いいの！！みんな、わかってないんだよ！！みんな、お母さんが
いなくても平気なんだよ！！悲しくなんかないんだよ！！」

音姉が大きな声で叫ぶ。

「平気なわけっ、あるか！！悲しくないわけないだろ。」

つい大声を出して怒鳴ってしまう。

「…………っ。知らない……。このまま病気になってお母さんの所に行くの!!」

「音姉が病気になったら、死んでしまったら、皆どうしたらいいんだよ。」

「…………。」

「そんなの俺は嫌だぞ。」

「…………。」

「それにさ、そんな事になって由姫さんは喜ぶと思う?」

「っえ?」

「俺達がさ、このままずっと悲しんだままだったり、音姉が病気や死んでりしたら、由姫さんは悲しむと思うぞ。」

「…………うん。」

「音姉は由姫さんを悲しませたい?」

「いやだ……。おかあさんをかなしませたくたい。」

「……でも、ひとりはいやだよ……。」

「はあ、音姉は一人じゃないだろ。純一さんやさくら、由夢や義之もいる。」

俺だっている。」

「……………」

「ならさ……………」

俺は力の一つ空間箱《ボックス》を使い、一つの時計を出す。

これは、技能作成を使い気絶し、起きた時に合ったものだ。前世で生きていた時に、作った時計で自信作だった。

「っえ!？」

驚いてる驚いてる。まあ、何もない所から時計が出たら驚いて当然か。

「……………きれい。」

「今はこれしかないけど、他のを作るからその時は由夢達と一緒にあげるよ。」

「本当に?」

「ああ、それを楽しみにしててよ。楽しみがあったら、少しは楽になるだろうから。」

「うん。」

「後は、さっきの見ただろ?俺は魔法が使えるんだ。」

「魔法……………」

「だから人には黙っててな。約束だ。」

音姉の前に立って、音姉に言う。

「知ってるよ。」

「え？」

音姉は、急に笑顔になった。今までの暗さが嘘みたいだ。

てか、笑顔初めてじゃないか？

「あのね、それを、いっしんどうたっていうんだよ。」

「一心同体？」

なんか原作であつたような。

「うん！」

音姉は手から大福を出してきた。

なぜに大福？

「私はね、せいぎのまほうつかいなんだよ。」

子どもらしくて可愛いな。

「これ、きみにあげるよ。」

「あ、ああ、ありがとう。」

音姉に貰った大福を口に運ぶ。

「うまいな。」

「でしょ？」

うん、うまいんだけど運動したあとだから喉が渴くな。

なんか飲みたい。

「これ、どうやって出したんだ？」

「きみと同じ魔法だよ。」

音姉が笑顔を浮かべる。よく笑うようになってくれたな。嬉しい限りだ。

「魔法ね。」

「これもきみと同じで、いったらダメだよ。私の秘密何だから。」

「わかったよ。」

子どもだけど、しっかりしてるな。

「あのね、せいぎのまほうつかいはちからをかくすものなんだよ。」

前言撤回、理由は子どもだ。

正義の魔法使いは力を隠すもの……か。

俺は違うかな。

「俺は違うと思うぞ。」

「どうして？」

「正義の魔法使いなら、大切な人を助ける為なら力を使わないと。それに正義の魔法使いだって人間だからな、隠すだけじゃなく人を頼らないとダメだぜ。」

一人で抱えたら壊れてしまうしな。

その為なら時にはバラさないといけないと俺は思うけどな。」

俺だけかもしれないけどな。それに音姉が言ってるのとは違うと思うけど、さくらみたいに一人で抱え込まれてもいけないし。

「……。そうだね。ならみんなに教えるそのときまでは二人だけの秘密。」

「わかったよ。秘密の共有な。」

「えへへ、ならゆびきりしよっ。」

「わかったよ。」

「ゆーびきーりげーんまーん、うっそついたら、はりせんぼんのーます。

ゆびきった。」

音姉は笑顔を浮かべて、楽しそうに絡めた指を振りながら歌った。

そんな音姉を見ながら、必死に探して良かったと思った。

そして、俺も一緒に笑顔を浮かべた。

音姉 side

お母さんが死んで悲しかった。

お母さんに会えないなら、病気になってお母さんに会いに行きたかった。

だから、公園のベンチに一人で座ってた。なにかをするんじゃなく、ただ座るだけ。

ずっと座ってたら蒼影君が来た。

蒼影君はさくらさんが義之君と一緒に連れてきた子で、会ったときから嫌いではなかった。

蒼影君がなにか話し掛けてくる。だけど、もうどうでもよかったから無視してた。

でも、蒼影君に言われてから、気がついた。

おじいちゃんやさくらさん、由夢や義之君にまた私同じ気持ちにさせたくない。

もし、私が死んでしまってもお母さんは喜ばず悲しむだけだって。

でも一人は嫌だった。

「はあ、音姉は一人じゃないだろ。純一さんやさくら、由夢や義之もいる。

俺だっている。」

蒼影君に言われて嬉しかった。私を思ってくれてるってわかったから。

そして、蒼影君がまほうつかいだって知った。

だから、私も蒼影君に教えて、秘密の共有をした。

私はこれから、由夢ちゃんや義之君、蒼影君のお姉さんとして頑張って行こうって決めた。

でも、蒼影君にはお姉さんだけじゃ嫌だって思った。

何でかな？

蒼影 side

「じゃ、音姉帰ろうか。」

「うん。」

「そうそう。これから、ちゃんと俺の名前呼んでくれよ。」

「え？」

「今まで呼んでくれなかったからね。」

そう、音姉は俺の名前を呼んでくれてなかったから、この機会に呼んで貰おうと思った。

「んー。なら、弟くん。」

「ダメ、ちゃんと名前で。」

原作と同じは嫌だ。弟くんとか恥ずかしい。

「なら影くん。」

「まあ、それなら……。」「

「じゃ、帰ろう♪影くん。」

「ああ。」

音姉が元気になってよかった。なんだかこれから大変な気がするけど。

「っな！」

なにがあったかって言うと、止まってた俺の所に来た音姉が、腕に抱きついてきた。

「えへへ。」

そして、笑いながら俺を引っ張っていった。

本当に大変な事になりそうだが、面白くもなりそうだからいいか。

帰ってきた俺と音姉を待っていたのは、純一さん達だった。

皆こっちを見て安心してたみたいだけど、俺の腕に抱きつく音姉を見て、さくらと由夢が怖くなった。

だって、なんか見えるもん。オーラ？なんか黒い物が見え、寒気もしてきた。

音姉が腕から離れると大人達がやってきた。

「音姫（ちゃん）。」

純一さんとさくら、その後に由夢と義之がやってきて、音姉は皆に謝っていた。今まで心配かけたかららしい。

由夢や義之とも仲良くなってるみたいだな。

そんな事を考えてると純一さんがやってきた。

「蒼影君、ありがとうな。」

「なにがですか？」

「音姫の事だよ。君が音姫を助けてくれたんだろ。」

さくらの時もだが、本当にありがとう。」

「俺がやりたかったから、やっただけです。音姉やさくらには一人で抱え込まれたくなかったから。」

「どちらでもいいんだよ。ありがとうな。」

純一さんはお礼を言って、戻りいった。

お礼を言われるのは気持ちいいな。

「みんな、家に入ろうよ。」

さくらの声で、皆家に入っていた。そして、俺が入ろうとしたら桜が舞っていた。

さらに仲良くなった俺達を祝福するかのように綺麗だった。

音姉と秘密の共有（後書き）

なんか今回の話は書いててよく分からなくなった。

楽しんでもらえれば嬉しいですけどね。

街探索と新たな友人（前書き）

なんとか完成。

今回は別作品とオリキャラとの出会いです。

少し長め。

街探索と新たな友人

由姫さんが死んでから、しばらくがたった。音姉は、由夢や義之とも再び仲良くなり、よく笑うようになった。

だけど……。それ以降、音姉を初めとして、さくらや由夢が俺に対して、よく引っ付いてくるようになっていた。

しかも、たまに顔を赤くしながら抱きついてきたりする。

多分だけど、フラグが建ってるよな。

まさか、いきなりってか三人も俺を好きになってくれるなんて……。…。

今は、このままでも良いんだけど、大きくなったらハッキリしないといけないんだよな。

普通はありえないけど、出来る事ならみんなを幸せにしたいな……。

一人を選んで悲しませるなら、全員を選びたいんだけど……。世界的にも無理かもしれないな。

それに、そのためには三人……。このままだと増えそうだが……。まあ三人を説得しないといけない。

もしダメならどうするか……。一人を選ぶなんて出来そうもないかな。

……、まあ今は今を楽しむとするか。

「影君、どこにいくの？」

一人でゆつくりしようと思ったんだけどな……。

音姉一人来たら由夢も来るだろうし、説得したら一人で行っても文句言わないよな？

「少し、外に行こうと思って。」

「私も一緒に行って良い？」

予想通りだな。

「えっと、今日は俺一人で行こうかなって思ったんだけど……。」

「そっかあ、なら気をつけてね。」

思ったよりも簡単に許してくれたな。もう少し時間かかると思ったんだけどな。

まあいいや、まずどこに行くとしますかなっと。

「本屋とかいいかもな。」

本屋に行ったら、料理本もあるだろうから料理のレパートリーを増やすにもちょうどいいな。

今は、和食と簡単な洋食しか作れないし、中華系やフレンチもいい

な。

いろいろな種類を作れたら、料理もワンパターンにならなくていいし、作って楽しいしな。

そんなことを考えながら歩いていると、後ろから走る足音と声が聞こえてきた。

「……………なんだこの音。」

ハンパなく嫌な予感がするんだが……。

「どいてくれなのさー。」

嫌な予感がどんどん大きくなるんだけど。声は後ろから聞こえたよな……、ってことは……。

恐る恐る後ろを振り向くと、緑色の髪でカメラを持った女の子が走ってきた。

ヤバイ、ぶつかっ。

ッドン

「いっつつ。」

「いたいのさー。」

「悪い、大丈夫か？」

変な事を考えずに避けとけば良かったよ。

「うん、大丈夫なのさ。」

……、この声や話し方ってもしかして……。

「ああー！」

「うお、いきなりなんなんだよ。」

「特ダネがあ。」

特ダネ？それってこのオモチャか？

「オモチャが特ダネなのか？」

「えっ！？……あはは、本当なのさ。ただのオモチャだったのさ。」

「あーっと、一体何をしてたんだ？」

「見たことのない物が有ったから、追ってきたのさ！」

「そうなのか……、まあ頑張れよ。」

嫌な予感MAXだ。もし予想通りなら、好きなキャラだけどさ。絶対に振り回されるから、とっとと逃げますか。

「まつのさ！名前を教えて欲しいのさ！」

「波柳 蒼影だけど。」

なんで言ったんだよ!？言ったら絶対に巻き込まれるだろ。

これは多分、振り回されるな。

いや、面白いだろうし、いいんだけどさあ、疲れるじゃん？

疲れるのはちよつとなあ、自分からってんなら良いんだけどさ。

「ナツミは、ナツミ・キャメロンなのさ!よろしくなのさ、リュウツチ。」

「リ、リュウツチ?」

「そうなのさ、嫌だったのさ?」

「嫌っていうか、恥ずかしいんだけど。」

「大丈夫なのさ。すぐに慣れるのさ。」

「慣れるって……。いや、もういいや。」

やっぱり……。ていうより、おかしくないか!?

どうしてD・C・?の世界にばすてるチャイムのキャラが居るんだよ!?

たしかばすてるチャイムコンテニューだったか?

いや今はどうでもいい。まさか全員いるって事はないよなあ……。

「今度、ナツミの友達を紹介するのさ!」

「いやいや、俺達会ったばかりだからな!？」

「もう友達だから、大丈夫なのさ。ぼたんやフィルも多分大丈夫なのさ。」

「二人なんだ。」よかった。少ないようだな……。

「違うのさ! 遠いけどまだいるのさ! だから、会えたら紹介するのさ。」

違ったみたいだな。運が良かったら、ナツミを入れて三人か……。

「そんな事より、リュウツチも一緒に特ダネ探しにいくのさ!」

「いやいや、待てって。」

「えー、ノリが悪いのさー。」

なんかムカつくな。はあ、まあ暇だったしいいか……。

「分かったよ、一緒に行くって。」

「そうこなくっちゃなのさ! なら、早速いくのさ!」

「はあ、分かったから、落ち着け。」

一人でゆっくりって俺には、できないのか……。

まあ、好きなキャラに出会えた事に感謝しとくか。

その後は、ナツミに振り回されっぱなしだった。

たとえば、商店街に行ってカツラのずれてるおっさんを追いかけ、かなり怒られたり。

ナツミって、こんな事探してたっけ？もう少しまでも……、いや原作も変な想像が入ってたのばかりだしまともではないか。

やっぱりこの年じゃあ、こんなもんなのかな？

って事は学校に入ったら、原作みたいになるのか？

「どうかしたのさ？」

「いや、なんでもない。」

顔に出てたみたいだな。気をつけないといけないな。

「あ！？あれはフィルなのさ！」

ナツミに振り回されて、いろいろ歩き回っていると、ナツミが言い出した。

心の準備が出来てないんだけど！？

ただでさえ、原作キャラと会うのはなんか緊張するのに、好きなキヤラだからなあ。

「ヤッホーなのさ、フィル。」

ナツミのしている方を向くと、大量の荷物を持った女の子がいた。後ろ姿からも分かるけど、やっぱりぼすてるチャイムのフィルだった。

ていうより、あんなに荷物持って大丈夫か……って、ヤバイ！ ナツミが声かけたからか、バランスを崩してんだけど！

「…ってーな。今日で二回目だよ。」

本当は、転けないように支えようと思ったんだけど、荷物が重過ぎて下敷きになっちゃった。

「ねえ、大丈夫？」

「大丈夫だから、早く退いてくれ。」

「ご、ごめん。」

別に無理矢理退かせるんだけど、乱暴はしたくないしな。

しかも、重いつてよりも上に乗られるのは恥ずかしいな。

「フィルにリュウッチ、大丈夫なのさ？」

「ボクは大丈夫だけど……。この人は？」

「リュウッチの事なのさ？」

「うん。」

「いてて。ああ、俺は波柳 蒼影だ、よろしく。」

「うん、ボクはフィル。フィル・イハートだよ。」

それにしても多い荷物だな。

せっかくだし、家まで運ぶのを手伝うとするか？

「あのさ、今から帰る所？」

正直初対面の相手にこんな事聞くって、なんか変だな。

「う、うん。そうだよ。」

「ならさ、この荷物運ぶの手伝おうか？また転けても危ないしさ。」

「え？で、でも……………」

やっぱり初対面の相手には頼り辛いかな？

「また転げるかもしれないぞ。」

「うっ……………」

「リュウツチに任せておけばいいのさ！」

「じゃあ、お願いしてもいいかな？」

結構すんなりいったな。ナツミが居たからか？

「了解。」

フィル side

「はあー、重いなあ。」

今日、まとめて必要な物を買ったんだけど、つい買いすぎたちゃったなあ。

一人で持たないといけないけど、重くて少しよろけながらも運んでいく。

こんな時誰か、運ぶの手伝ってくれる人が居たらいいのになあ。

「ふう、疲れたなあ。」

運んでくれる人って言っても、仲の良い友達には男の子いないし、ナツミやぼたんは重くて持てないだろうし、こんな事頼めないもんなあ。

そんな事を考えながら、荷物を持って歩き出そうとすると……。

「ヤッホーなのさ、フィル。」

聞いたことのある声が後ろから聞こえ、後ろを振り向こうとすると、持っていた荷物の重さでバランスを崩してしまった。

倒れそうになった時、ナツミの隣にいた人がこっちに走ってくる姿だった。

そして、倒れた時に来る衝撃に備えてたんだけど、いつまでたっても衝撃が来なかった。

その代わり……。

「…ってーな。今日で二回目かよ。」

ボクの下からそんな事が聞こえた。

さっきこっちに走ってきた人だった。手にはボクの荷物を持ってるし、ボクを支えようとしてくれたのかな？

「ねえ、大丈夫？」

「大丈夫だから、早く退いてくれ。」

「ご、ごめん。」

声をかけたら、そんな事を言われた。で、その時まだボクが上に乗ったままだって気づいた。

「フィルにリュウツチ、大丈夫なのさ？」

「ボクは大丈夫だけど……。この人は？」

「リュウツチの事なのさ？」

「うん。」

「いてて。ああ、俺は波柳 蒼影だ、よろしく。」

「うん、ボクはフィル。フィル・イハートだよ。」

ボクを助けてくれた人は、蒼影って言うみたい。

でも、ナツミのあだ名の付け方はよく分かんないな。

「あのさ、今から帰る所？」

蒼影は、ボクの荷物を持ったまま聞いてきた。

普通なら素直に答えないと思うけど、蒼影からは別に変な事は感じないし答えることにした。

「う、うん。そうだよ。」

「ならさ、この荷物運ぶの手伝おうか？ また転けても危ないしさ。」

「え？ で、でも…………。」

さっきまでは、確かに重いなんて思ってたし、誰か手伝ってくれたらって思ったけど、さすがに初対面の人に頼るのは悪いなって思ったから、断ろうとすると…………。

「また転けるかもしれないぞ。」

「うつ……。」

「リュウツチに任せておけばいいのさ！」

「じゃあ、お願いしてもいいかな？」

確かにまた転けても嫌だし、悪い人じゃなさそうだしお願いする事にした。

「そいえば、ナツミ達はここの学校に通ってるのか？」

「んー、今は違うけど、もしかしたらそうなるかも知れないのさ！」

蒼影に荷物を運んでもらいながら、蒼影を見てみる。

蒼影って、会ってまだあまり経ってないけど、優しくてかっこいいし、一緒に学校行ったら楽しそうだなー。

さっきも助けてもらったし……。

／／／／

「フィルどうかしたのか？」

「え？」

「顔が赤くなってるからさ。」

「だ、大丈夫だよ。」

「なら、いいけど。」

ううー、さっきの事を思い出したら恥ずかしくなってきた。

顔も赤いみたいだし、鼓動も速いし、変に思われてないかな？

蒼影 side

なんかフィルの顔が赤くなってるけど、大丈夫なのか？

原作とかナツミやぼたんを先にやって、恋人ルートはほとんどスルーしてたから、こんなフィル見たことないな。

というより、ナツミやぼたんがヒロインじゃなかったのは嫌だったな。

て、そんな事よりなんでこの世界に居るんだろう？

この世界には冒険者とかないから、性格や容姿が同じだけなんだとさあ。

でも、ナツミにフィル、ぼたんだろ？

結構個性的なキャラばかりじゃねえか？

今ところは、風見学園には来ないっぽいんだけど、なんとなく来

そんな予感がするんだよな。

具体的には原作前、何となくだけどき、多分当たるんじゃないか？

「ここだよ。」

ん、考え事してる間に着いたみたいだな。じゃあ、荷物を置いてつと。

「じゃあ、ここに置いとくから。」

「うん、ありがとう蒼影。」

「じゃあ、次にいくのさー。またなのさ、フィル。」

ナツミがいきなり腕を引っ張ってくる。さっきまで静かだったのにな。

「じゃあな、フィル。」

「うん、また会おうね、蒼影。」

「てか、引っ張るなってナツミ。」

「いいからはやく次に行くのさ！」

「わかったから。」

なんか怒ってねえか？途中で中断されたからってのは、ナツミからフィルに声をかけたわけだし、ありえないと思うんだけど。

「次はどこにいくのさ？リュウッチは行きたい所どこかあるのさ？」

「そいえば本屋行きたいな。ナツミのオススメとかどっかあるか？」

「んー、そうなのさ、いい場所があったのさ。きっとリュウッチも気に入るのさ。」

「なら、案内お願いしてもいいか？」

「わかったのさ！」

いつの間にか機嫌が良くなってるな。一体何だったんだ？

「あら、ナツミじゃない、こんな所でどうしたの？」

この声って……。まさかなあ、さすがに一日で三人はねえ？

「ぼたんなのさ、ぼたんこそどうしたのさ？」

「私？私はペンとかを買いにね。それより、その人はだれかしら？」

「紹介するのさ、リュウッチなのさ。」

「ナツミ……、あだ名で言っても紹介にならないと思うぞ。」

俺は、波柳 蒼影だ。よろしく、えっと。」

「ぼたんよ。よろしく波柳。」

「上の名前は？」

わかるんだけど、やっぱり聞いてみたいよな。

「……よ。」

「なんて？」

「鈴木って言ったの。」

原作でも思ったんだけど、やっぱり嫌いなんだろうか？

「なんか、名前の割に普通だよな。」

「しょうがないでしょ。名前なんて選びようがないもの。」

確かにその通りだよな。俺は自分で考えてた名前だからまだいい方だな。

「それもそうだな。よろしく、鈴木。」

「ぼたんでもいいわよ。」

「なら、俺も下の名前でいいから。」

「わかったわ。」

「ナツミ達は行くのさ、ぼたん。」

「ええ、またね。」

「リュウツチ早速次に行くのさ！」

「わかったから。少し落ち着け。」

フィルに比べたら短くすんだな。いいのか、悪いのかよくわかんねえな。

そして、ナツミに連れて行かれた場所は、少し人通りの少ない場所だった。

「人通りが少ないけど、ここに何かあるのか？」

「もちろんあるのさ、さっき言った本屋があるのさ！」

「へー、こんな場所にあるんだな。」

その会話の後少し歩いていくと、

「あれなのさ。」

ナツミが指差した場所には、結構大きめの本屋があった。

へー、結構大きな本屋なんだな。期待出来そうだな。

「あそこなら、いろいろあるのさ。場所が場所だから人は少ないけど、品揃えはいいのさ。」

「なら俺は入るけど、ナツミはどうする。」

「んー、ナツミは次に行くのさ。」

「そっか、ここ教えてくれてありがとな。」

「どういたしましてなのさ。また一緒に特ダネ探しにいくのさ。」

「暇があつたらな。」

「じゃ、またなのさ。」

それだけ言うと、ナツミは走っていった。

始めっから最後まで元気だったな。さて、せっかく教えてくれたんだし、早く入るか。

中に入ると、ナツミの言うとおりにかなりな本があつた。

「へー、結構古い本があるんだ。これって！もう発売してないやつじゃん。欲しかったんだよな。」

「本好きなんっすか？」

「まあ、結構読むな。」

「そうなんっすか。」

「で、あなた誰？」

なんか流れで会話してたけど、いったいだれだ？

後ろを向くと、ショートヘアの女の子がいた。容姿は結構良くて、

親しみやすそうな子だった。

「あたしっすか？あたしは深倉 鈴花っす。父親が店長なんで、ここで手伝ってるんっす。」

「そうですか。なら、料理の本どこにありますか？」

「もちろんっす。付いて来るっす。」

なんか個性的な人だな。

「ここっすよ。えっと。」

「まだ名前いってなかったですね。波柳 蒼影です。」

「蒼影っすね。後、あたしと年齢同じそうだし、タメ口でいいっすよ。」

「ああ、わかった。」

「鈴花ー、どうかしたのか？」

「あ、姉さん。お客様っすよ。」

「客？久しぶりだな。」

やってきたのは、どこか鈴花に似た顔の女の人だった。

口調とかは、転生の時に会った神様に似てるな。

容姿は一言で言えばボーイッシュだな。

「お前が客？ 本好きなのか？」

「まあ。」

なんか見た目からしたら、読書とかしそうにないな。

「へー。俺も本は好きなんだ。なんか面白いのあったら教えてくれてよ。俺も教えてやるから。」

あ、そうだ。俺の名前は深倉 恋花だ。よろしくな。タメ口でいいから。」

「あ、波柳 蒼影です…じゃない、まあよろしく。」

「おう。」

見た目と違って、読書好きみたいだな。趣味合えばいいな。

「それより、蒼影。それ買うっすか？」

「うん。」

「なら、こっちっす。」

結構買ったけど安いな。次からは、ここに来て買うとするか。

「また来てくれっす。」

「また近い内に来いよ。なんか面白い本用意しておいてやるからよ。」

「わかった。またな、鈴花、恋花さん。」

結構楽しかったな。教えてくれたナツミにも感謝だな。

街探索と新たな友人（後書き）

感想があるとやっぱりやる気ですな。

次はオリキャラ紹介になります。

オリキャラ紹介（前書き）

少しだけ訂正しました。

オリキャラ紹介

名字 波柳（はりゅう）

名前 蒼影（そうえい）

年齢 義之達と同じ

趣味 手作りの時計作り

料理、読書、イタズラ、絡繰り作り

特技

自作の時計作り、絡繰りなどの仕掛け作り、料理

性格

自分から何かをして疲れるのはいいけど、巻き込まれるのは面倒と思っている。

時計作りや絡繰り作りが好きで、結構凝っている。絡繰りはロボットと変わらない動きをしたりする。

人の好意にはある程度気付く。が、相手が本気で自分も仲が良かったりすると、断りたくない。

自分が複数から好意を持たれると思ってはいないが、もしそうになったら一人を選ぶくらいなら平等に愛したいと思っている。

普通は無理って分かってるが、神様がこっそり付けたオマケのおかげ？で、相手から平等に愛するならハーレムに関してはしようがないと思われる。

能力

技能作成《スキルメイク》

自分がこんな力欲しいと思った力などを作る事が出来る。

名字 深倉（みくら）

名前 恋花（れんか）

年齢 音姫と同じ

趣味 読書、裁縫、料理

特技 裁縫、料理

性格

性格はボーイッシュで口調が男っぽく、俺と呼ぶ。

趣味は見た目に反して読書や裁縫、料理とインドア派で結構家庭的。親のやっている本屋を妹と四人でしている。親のスペックがおかしい事と客がすくないから、仕事はあまりない。

名字 深倉（みくら）

名前 鈴花（りんか）

年齢 蒼影と同じ

趣味

読書、料理、小説書き、運動

特技 料理、掃除、

性格

姉に似てインドア派の部分や家庭的な部分もあるが、運動も好き。

語尾にゝっすをつけているなど、個性的。

姉と同じく親のやっている本屋を妹と四人でしている。親のスペックがおかしい事と客がすくないから、仕事はあまりない。

ただ整理などをして暇をつぶしてる。

学園では男子は蒼影以外名字で呼んでいる。

蒼影のイタズラによく協力している。

朝の風景（前書き）

なんとか完成。予告なんてするもんじゃないですね。

朝の風景

「蒼影君、おっはよ～～。」

「ぐふっ。」

いってえ……。人が眠ってるのになんなんだよ……。

「誰だ……？」

「おはよう、蒼影君。今日気持ちいい朝だよ。」

俺の上に馬乗りに座ってたのはさくらだった。

さくらは、笑顔を浮かべ言ってきた。可愛い笑顔だが、いきなり起こされ少しムカついたから、いじめてやる。

「いふあい、いふあいよ、そうへいふん。」

いじめてやるっていつても、頬を抓るだけだな。

まだ外が暗いけど、今何時なんだ？

「おい、さくら。今何時なんだ？」

「えっほ。」

あ、まだ頬抓ったままだったな。

話してやるか。

「えっと、4時30分だよ。」

「……………」

「……………」

「…はあ、まあいい。で、何で起こしたんだ？」

「早く目が覚めちゃって。」

「……………。まあいいか。」

時間はあるし、二度寝しようにも余り眠くないし、

「今日は朝飯作るとするか。」

「ほんとっ!？」

「ああ。さくらは後で良いから、義之とアイシアを起こしてくれ。」

「わかったよ。朝ご飯楽しみにしてるからね。」

「了解。」

ちなみに、今芳野家に住んでいるのは、俺、さくら、義之にアイシアだ。

なんでアイシアが居るのかっていうと、実は少し前に桜のバグを直

したんだ。

技能作成《スキルメイク》を使って新しく、介入《かいにゆう》を作り出し、桜の木の内部から操作したんだ。バグを取りいた後に、桜に学習能力を付けて、善悪の区別が出来るようにした。

その時に、アイシアと出会った。

アイシアはさくらが桜の木を使った事に対して、怒っていたが俺が説明をして何とか冷静になった。

その後にアイシアに対して、認識変更《にんしきへんこう》を使い、普通の人にも分かるようにした。

桜の木のバグを取り除くだけじゃダメだったしな。

そして、アイシアはさくらの手伝いとして学園で働いている。

その時の事を詳しく？

面倒だし、また今度って言うことで。

さてと、回想が長かったし、そろそろ作り始めるか。

いつもは音姉や義之が朝飯を作ってるし、朝飯はだいたい和食になってるし、今日は洋食でいくか？

ちょうど、作ってたパンとヨーグルト、ジャムがあるしな。

料理は趣味だし、昨日さくら達に内緒で作ってたんだよな

まあ、手作り自体は前からやってたんだけど、人に食べさせるには見た目がおかしかったから出さなかったんだよな。

パンは焼いて、ヨーグルトにはジャムを落とすだけでいいかな？

パンはトースターにセットしたし、何を作るか……。

「そいえば、パンとか作るとき卵や野菜買ったし、オムレツとサラダ……、後スープ作るか。」

ジュウウツ。

手元のフライパンに油を引き、ミルクとといった卵の生地を流し入れる。

そのまま手早くかき混ぜ、ある程度膜のようになったら、ハム、チーズやらの具を入れて、包むように形を整える。

「っうし。」

外見はこんがり、中身はトロトロ、美味しいオムレツを作るには基本だよな。

「スープもそろそろか。」

オムレツやパン、ヨーグルトの準備をしているときに、スープをだいたい完成させたから、後は味付けだけだ。

「んー。良い匂いがするねー。」

「さくらか。」

そいえば、今何時なんだ？

「6時!？」

いつの間にこんな時間になったんだ？

音姉や由夢がもう少しで来るな。

「義之君達そろそろ起こしたほうがいいかな？」

「ああ、二人とも起こしてくれ。」

「わかったよ。」

さてと、料理を持って行つてと。

スープの量は個人に合わせるとして……、料理と皿が合っていない気がするようになるか。

「おはよう、蒼影……。」

「起きてきたか、今日は俺が朝飯作つといたから、とつとと座つとけ。」

「はあ!?! お前が朝ご飯をか!?!」

「そこまで驚く事かよ。てか、朝飯が洋食なんて俺くらいしか作らないか？」

音姉やお前は和食多いし。」

「確かにそうだな。でも、蒼影のご飯って美味しいから楽しみだよ。」

「そう言ってもらうと、ありがたい。」

あ、これ置いといてくれ。」

「了解……って、これは多すぎだろ。」

机と台所を見ると、俺、義之、さくら、アイシア、音姉、由夢。六人分あればいいのに、八人分はある。

「確かに……。どうするかな……。」

「お弁当に出来ないの？」

ん？ 今のは……。

「あ、アイシアさん、さくらさん、おはようございます。」

やっぱりアイシアだったか。

「アイシアにさくらか。おはよう。」

「おはよう、義之君、蒼影君。」

「おはよう、蒼影君気合い入れたね。」

誰のせいで目が覚めたと思ってんだ。目が覚めなければ、今日は朝飯を作るなんてしなかったのに。

「誰かさんのお陰で目が覚めたからな。時間が有ったんだよ。」

「にやはは。ゴメンね蒼影君。」

「もういいよ。で、アイシアの弁当にするってのだけど。」

「そうだよ。パンとかサラダなら出来るんじゃないかな？」

弁当か……。実はもう作ったからな。

「それなんだけど、もう作ったんだよな。しかも六人分。もし、音姉が作ってたら、さらに一人分弁当が余るんだよ。」

「蒼影、俺もあるのか？」

「ああ、だから後で渡すよ。もちろんさくらとアイシアにもな。」

「「ありがとう。」」

朝飯か……。アイツらに分ける分として持っていくか。

「じゃあ、余ったのどうしよう？」

「俺が弁当として持っていくよ。」

「え？でも……。」

「他のヤツに分ければなんとかなるし、杉並か涉なら学食だろうか。大丈夫だろう。」

ピンポーン

「音姉達も来たみたいだな。」

「さくら、二人を呼んできて。」

「わかった。」

「義之とアイシアは運んだり手伝ってくれ。あと少しだからすぐに終わる。」

「ああ。」

「うん。」

少し張り切り過ぎたな。パンとヨーグルトなんか無くなったし。

今度食べようと思ってたんだけど、また作らないといけないな。

しかも作り過ぎたから、音姉や由夢がなんて言うか。

「おまたせ、これで最後だから。」

「おはよう、影君。今日は影君が作ってくれたんだね。」

「おはようございます、影兄。影兄、これは作り過ぎだと思うんだけど。」

「悪かったな。ああ、音姉今日弁当作った？」

「ううん、今日は作ってないよ。」

良かった。朝飯の残りを弁当にするし、三人分の弁当を持って行くのは面倒だからな。

「今日俺が弁当作ったからさ、持って行ってよ。由夢のも作ったから。」

「影兄の弁当……。影兄が作るなんて珍しいね。明日は雨でも降るんじゃないの？」

少しムカついた。確かに俺は普段料理しないけどさ、その言い方はねーと思う。

「わかった、由夢は弁当無しな。」

「や、嘘ですから！」

「ったく。」

「影君、ありがとうね。」

「早く目が覚めたからついでだよ。」

ちなみに、音姉は俺を影君、義之を義之君と呼び、由夢は俺を影兄、義之を義兄と呼んでいる。

「そろそろ食べようよ。」

さくらの言葉で、食事を始める。

「「「「いただきます。」」「」」「」」

「このパン美味しー♪蒼影君、どこで買ったの？」

「確かにおいしい……、影兄、パンなんていつ買ってたの？」

やっぱり聞かれたか。自分でも市販よりはおいしいと思ってんたけど、やっぱり褒められると嬉しいな。

「手作りだよ。ちなみに、ヨーグルト、ジャムも手作りだから。」

「いつの間に作ったの？」

「俺も見ただことないんだけど。」

あー、アイシアやさくら、義之が居ないときに作ったし、いてもこっさり作ったからなー。

「アイシア達が見てない時？」

「なんで疑問系なの？」

「気にするな、アイシア。」

「そいえば、そろそろ文化祭だね。」

「あー、そいやあそうだったな。」

……？原作に文化祭ってあったっけな？

まあ、世界観が違うんだし、学園ならあるか。

どっちにしろ原作とか忘れたんだよな……。キャラくらいなら覚えてるけど、意味ないな。

「影君達のクラスはなにをするの？」

「……まだ、決まってなくね。」

「決まってないな。」

クラスの出し物が決まってないから、委員長がキレてたような。

これは、原作のクリパに似た流れになりそうだな。

「どうでもいいけど、お姉ちゃん達を困らせないようにしてよ。」

「困らせるのは義之達三バカだし、俺は関係ないから。」

「っな。杉並達と一緒にするなよ。」

っていつても、俺は杉並達に隠れてやってるから、バレてないはずだ。

……大丈夫だよな？ たまに生徒会に追われるのはバレてるから……？

「確かに、義之君は杉並君達と一緒にするからね。杉並君はまゆきが当たるから、義之君は私かな……?」

「蒼影は!?!」

だから、俺は関係

「影君は、ブラックリストの最重要人物だから、なにかあったら私とまゆきで当たる事になってるんだよ。」

な……い……。

「はあ!?!何だよブラックリスト最重要って!?!」

「影兄、なにをしたの?」

「いやいや、俺は杉並に隠れて行動した……し……。

あつ。」

「蒼影君ダメだよ音姫ちゃん達に迷惑掛けたら。」

アイシアにまでいわれたし。

「さくらとアイシアは学園の仕事大丈夫なのか?」

()()(ごまかした。)()()

「そうだよ、さくらさん、アイシアさん。」

「大丈夫だよ、さくら？」

「うん、今日はみんなより少し早いくらいだから。」

それより、蒼影君がブラックリスト最重要って？」

うぐっ。話を戻しやがった。

「えっと、今までは知らなかったんですけど、影君が杉並君達の影でいろいろしているって分かったんです。」

今まで分からなかったから、まゆきと相談して杉並君達より厄介だという事になったんです。」

「ちょっと待ってくれ。それ誰が…」杉並君からだよ。一応調べたら、本当みたいだったよ。……杉並の野郎……。」

バレないようにも楽しんでたのに、まゆき先輩や音姉が来たら面倒じゃねえか。

「蒼影、お前なにしてんだよ……。」

「義之、お前には言われたくない。」

「何でだよ!？」

「三バカじゃん。てか、そんな事より音姉、証拠なんて残ってた？」

「杉並君追ってたなら、まゆきが見つけたの。それに、今の反応で決定だよ。」

「影兄もなんだ。」

由夢や音姉の視線が痛い。まあ、止めはしないけどな。

暇つぶしにもいいし、楽しいからな。

「「「「「ごちそうさま。」「」「」「」

そんな事考えたら食い終わったな。

余った料理を弁当用にするために手を加えるか。

「じゃ、ボク達は行ってくるよ。蒼影君、お弁当ありがとね♪」

「行ってくるね、蒼影君。」

「さくらもアイシアも気をつけてな。」

音姉達はゆっくりしてて。余ったのに手を加えるから。」

「影君、手伝おうか？」

「大丈夫だから、ゆっくりしてて。」

いつも音姉には世話になってるからな。

そいやあ、由夢のヤツ今では人並みには出来るけど、昔はやバかったな。

「……、少しイタズラするか……。カラシ、ワサビ、唐辛子どれがいいか。」

でも、杉並や渉ならいいが、杏や茜が食ったらヤバいな。

どうするべきか……。。」

「何を悩んでるんでの、影兄。」

「杉並や渉に分ける弁当に何を入れるかだよ。」

あれ？誰と話してんだ？

「なにやってるんですか……。。」

由夢が呆れてた。そりゃ自分でも馬鹿みただけどさ。

「いいじゃねえか。由夢はどうしたんだ？」

「影兄の手伝いをしようかなって。」

音姉にゆっくりしててって言ったばかりなんだけどな。

「もう終わるから大丈夫だよ。」

「そうですか……。。」

なんか落ち込んでるな。こういう時は、確か……

「（ナデナデ）」

「い、いきなり何を!?／／／」

「別に？」

「そうですか……。♪♪」

機嫌良くなったみたいだな。

「あ、これ弁当な。音姉と義之に渡してきてくれ。」

「あ、はい。」

あー、時計もほとんど完成したからそろそろ渡さないと。

近い内にでも能力作っておかないと、能力付加出来ないと渡す意味ないしな。

俺ってせっかくの力無駄遣いじゃないか……？

「蒼影、そろそろ行くってよ。」

「わかった。」

学校についたら、まずは杉並に対する対応だろ、文化祭の計画練り直しも必要だし、生徒会……特にまゆき先輩と音姉が大変だよな……。

音姉の話が本当なら、まゆき先輩も杉並より俺優先だろ？

逃げ切れなくね？

「影君、もう行くよー。」

「今行くって。」

さて、弁当も持ったし、行くとするか。

弁当に仕掛けた、ロシアンルーレットのイタズラの反応が楽しみだ。

当たったヤツには、まともな物を今度作ってやるか。

朝の風景（後書き）

正直終わり方が思いつかない。

まあ当分終わりそうにないからいいけど。

オリジナルで文化祭やるつもりだけど、なんか文章とかおかしいよ
うな気がする。

面倒で忙しい登校（前書き）

タイトルがまったく思いつかない。

面倒で忙しい登校

「だる……。」

「影君、しっかりしないと。」

音姉が俺に向かって言うけどな……。久しぶりに早起きして朝飯作ったし眠くて眠くて。

「慣れない事するからだよ、影兄。」

「うっさい、由夢。俺だってわかってるから。」

毎回こうなんだよ……。特に朝は何かしたすぐ後はいいんだけど、時間が経つと何かやる気なくなるんだよな。

時計作った後なんか二、三日くらいやる気出なかったからな……。

「音姉、由夢ほっというて大丈夫だよ。蒼影は短いときは一時間くらいで元に戻るし、朝飯作っただけだからそろそろなおるんじゃない。」

「そうだね、影君だもんね。」

「影兄、大丈夫？」

義之と音姉全く心配してないな。特に義之。由夢は原作より優しくなったかな。俺の事心配してくれてるし。

「おっはよく、蒼影。」

「うおっ。」

誰かが後ろから抱きついてきたみたいだけど、多分フィルだな。だ
って抱きついてくるなんて、フィルくらいしかない……って！

「フィル！？なんでここにいの！？しかもその服装って。」

「簡単よ。今日から私達も風見学園に通うことになったのよ。」

ぼたん……って事はナツミも居るんだろうな。てか、こんな時期に
転校っておかしいだろ。

「時期がおかしいだろ。もう少し早くは無理だったのか？」

「気にしなくてもいいのさ、リュウツチ。」

「そうそう、一緒に通えるんだしさ♪」

「まあ、いいや。これからよろしくな。フィル、ナツミ、ぼたん。」

なんか一気に騒がしくなりそうだな。

……なんか後ろから黒い気みたいの感じるんだけど、後ろって…
……。

音姉と由夢からかなり黒いモンがでてる。怖いんだけど。

「影兄、そちらの方は、誰ですか？」

「お姉ちゃんも知りたいなー、影君。」

「えっと、ファイル、ナツミ、ぼたん頼む。」

「わかった。ボクはファイル・イハートだよ。よろしくね。」

「私は鈴木ぼたんよ。ぼたんでいいわ。よろしく。」

ぼたんはやっぱり名字が嫌みたいだな。明らかに顔が嫌そうだったし。

「ナツミはナツミ・キャメロンなのさ！」

「あ、私は朝倉 音姫。よろしくね、ファイルさん、ぼたんさん、ナツミさん。」

「私は朝倉 由夢です。よろしくお願いしますね。」

良かった。自己紹介のおかげか、黒いモンが無くなってる。

「俺は桜内 義之だ。じゃあ、先行くな。」

ガシッ

「逃げるな。俺を独りにするつもりか。」

「やめろ！巻き込まれたくないんだ。」

義之の野郎自己紹介した後、すぐに逃げようとしやがった。絶対に

逃がさねー。

「ねえ、影兄。先輩達といつ知り合ったの？ 今日から学園に通うみたいだけど。」

「暇つぶしに街を歩き回ってたときにな。」

その後ちよくちよく遊んでたな。毎回ナツミに振り回されるし、フイルにはなんでかフラグ建ってたみたいで、会う度に抱きつかれてるんだよな。

「そうなのさ。おかげでいろいろと楽しかったのさ。」

「それより、そろそろ行かないと遅れるわよ。」

「そうだな。」

まさか朝から出会うなんてな。これ以上増えたら捌けくないか？ 嫌な予感するし、もっと増えそうだな。

「そうだ、ナツミ達は先に行くのさ。」

「どうしてだ？」

別に一緒に行っても大丈夫と思うんだけど。何人か空気になりそうだけどな……。

「転校の手続きがあるからよ。まあ、そんな難しくないみたいだけどね。」

「えー、まだ蒼影といたいな。」

「駄目よ。ナツミ行くわよ。」

「わかったのさ。」

ナツミとぼたんがフィルが引っ張っていく。

フィルには悪いけど人数減ってくれてありがたいな。只でさえ今は眠いんだし、人数多いのは面倒だ。

「なんか個性的な友人だったな。蒼影。」

「そうだね。でも、面白い人だったんじゃないかな。」

「影兄の友達って変わってる人ばかりだよね。」

「それは一番俺が分かってるから。」

D・C・キャラもともと個性的だし、ナツミ達に深倉姉妹も個性的だよな。

別に楽しいからいいんだけどな。生きてた時はつまらなかったからな。

「蒼影じゃないっすか。おはようっす。」

「蒼影に音姫もいるのか。おはよう。」

考えてたら早速来ちゃったよ。なんで今日に限って多いかなあ？

「恋花に鈴花さんおはよー。」

そいえば、恋花さんは音姉と同じ年で同じクラスだったな。

「おはよう、恋花さん、鈴花。」

「おはようございます。恋花先輩、鈴花先輩。」

あれ？義之どこに行ったんだ？さっきまでいたような気がするんだが。

「桜内（義兄）なら、先に行ったっすよ（行きましたよ）。」

「心読むんじゃねえ。」

答え貰ったのはいいんだけど、なんで鈴花と由夢心読めるんだよ。

「別に読んでないっすよ（ですよ）。」

「そうだ、蒼影。今日来ないか？面白いモン入ったしよ。」

「なら、今日行くよ。」

「なら今日蒼影のクラス行くからよ。」

「なら、あたしも一緒に帰るっす。」

「影君どこか行くの？」

「少し本屋に行くつもりだよ。出来るだけ早めに帰るから。」

音姉達には、教えてなかったけな。別に教えても大丈夫だろうけど、なんか自分だけ知ってるってのは嬉しいしな。

そうだな。鈴花にまゆき先輩にバレた事教えないとな。

鈴花はいろいろと協力してくれるしな。

「鈴花、実はさ生徒会にバレたみたいだ。」

後ろにいる音姉や由夢に聞こえないように、鈴花に囁く。鈴花は少し驚いていたが、表情には出していなかった。

「生徒会につすか？蒼影がバレるようなヘマをするとは思えないっすけど。」

「俺じゃなくて、杉並が言ったみたいなんだよ。」

そのせいで、生徒会にバレてしまっただけな。」

「確かに杉並なら気付いてもおかしくはないっすね。」

これからどうするっす？後、あたしの事がバレてるかで、対応が変わるんじゃないっすか？」

「音姉の反応では、分かってないみたいだ。後、面倒くさい事に杉並より上になったみたい。」

「もしかして、まゆき先輩に音姫先輩を初めとした生徒会っすか？」

俺の言葉に対して、鈴花は笑ってそう言った。

有り得ないって思ってるみたいだけど、その通りなんだよな……。

「え……、まさか……。」

俺が何も言わない事に気付いたみたいだな。

「生徒会総出だよ。」

「面倒っすね。蒼影はどうするっすか？」

文化祭はそろそろっす。いまさら計画は変えたら面倒っす。」

「変えないよ。まあある程度生徒会を視野に入れてたし、まゆき先輩と音姉をなんとかするだけだ。」

「了解っす。」

鈴花は後ろのメンバーの所に戻っていった。

やっぱり協力者を増やすべきかな。

「しかしまゆき先輩とは面倒だな。」

「誰が面倒なの？」

「そりゃまゆき先輩だって。」

「どうして？」

「杉並に集中してたのに、俺の対応だろ？運動も出来るし、敵になるとねえ。」

いろいろとやりにくくなるし。特に今回の文化祭とかさあ。」

「へえ、また何かする気なんだ。」

……、このパターン何時経験したような。そして、相手は決まって本人……。って事は……………」

「おはよう、蒼影。」

「ま、まゆき先輩……。いつの間に……………」

「さつき音姫に挨拶したところよ。そんな事より、いままで杉並に隠れていろいろやってたみたいね。」

「えっと、それは。」

なんか今日のまゆき先輩黒いぞ。やっぱり隠れてやってたのがバレたからか？

こういう時は『三十六計逃げるに如かず』ってね。

「先行くんで！」

「あ！待ちなさい！」

なんか言ってるけど、今は無視。学園に着いて時間が経てば元に戻るだろう。

そいえば、『三十六計逃げるに如かず』って言葉にある三十六計は、中世頃の中国の兵法書の事で、兵法における戦術を六段階の三十六通りのに分けてまとめたものらしい。

「三十六計逃げるに如かず」という故事が有名だけど、形勢が不利になったときは逃げて体勢を立て直すことを意味したもので、「逃げるが勝ち」という解釈は俗説らしいな。この故事自体も兵法三十六計とは関係ないみたいだし。

合ってるよな？暇つぶしに調べたんだよな。最近孫子とか調べてるな。

って、こんな事考えてたら大分離れたみたいだな。

「どうした、同士波柳。かなり疲れているようだが。」

出て来たよ、すべての元凶がよ。

「おまえが生徒会に情報流したせいだろうか。」

「ふむ、何の事やらわからんな。」

「ふーん。実は今日さあ、弁当多めに作ってしまったんだよな。

杉並は食べないみたいだな。」

「なぬっ。」

杉並には何度か俺の作った料理を食べさせた事があるからな。

その後は、なんでかたまに頼んで来たからな。でもなあ……。。

「なんだその反応は。」

「うむ、どうしたものかな。」

生徒会にバレたのもあって、杉並には少し協力して欲しいからな。

ただなあ、単純じゃないか？」

「何を言う波柳よ。あれは食わなければな。」

「心読むなよ。それと、俺の料理は麻薬か。」

食わなければって、中毒性があるわけでもあるまいし。

「口に出していたぞ。あの料理は一度食べたら忘れられないからな、
そう言う意味では麻薬とも言えるな。」

誉められてるのか、貶されてるのか。

「まあいい。食うなら貸し一でどうだ？」

「何をするつもりだ？波柳が俺に頼るとは。めずらしいな。」

「お前のせいで、生徒会総出なんだよ。まゆき先輩と音姉はこっちがなんとかする。」

「なるほど。やはりそうだったか。いいだろう、高坂まゆきと朝倉姉以外は簡単だからな。」

「なら、頼む。弁当に関しては、昼に他のやつもあつめてからな。」

「いいだろう。さらばっ！」

……、あいつ人間か？俺は見えるが、他の人は絶対見えないだろ。

さて、杉並の協力を得たし、生徒会相手は楽になったか。

「あー、蒼影君。おはよお。」

「あら、蒼影。今日は一人なのね。」

「蒼影、おはよう。」

次は雪月花ですか。なんで今日はこんなにも人と出会ったよ。まあいい、ついでだし三人にも弁当の事伝えとくか。

「今日弁当多めに作ってしまったから、一緒に食わないか？」

「蒼影が作ったの？蒼影の久しぶりだね。」

「蒼影、料理できたの？」

「うん、蒼影君出来なさそうだね。」

「失礼じゃね？そりゃ、あんまりやらないけどさ、家ではそれなりにやってるぞ。一応、音姉と義之に教えたしな。」

「そうだよー。蒼影の料理は一度食べたなら忘れられないほど、美味しいんだからね。」

「なら、お昼を楽しみにしてるわ。」

「そうだね、小恋がそこまで言うんだもん。」

「小恋ハードル上げてんじゃねえ。」

「え、え。月島は悪くないよー。」

「まあいい。ありがとうな。誉めてくれて。（ナデナデ）」

人に誉められるのは嬉しいからな。小恋の頭を軽く撫でる。

「あう。／＼／＼／」

「朝から熱いよねー、二人共。」

「なに言ってるの、茜。私はそんな。」

また二人の小恋弄りが始まったな。

俺は、気づかれない内に行くとするか。

しかし今日は登校だけでかなり疲れたな。この後は、多分文化祭の

話し合いに、イタズラの計画も微調整しないとな。

後、文化祭ってなにやるんだ？原作で言ってなかったような。言ってたとしても、深倉姉妹やフィル達がいるから、変わってるだろうしな。

まあいい、眠いしまずは寝るとするか。

面倒で忙しい登校（後書き）

新しく、FAIRYTAILの小説書こうと思ったんだけど、どうしよう？

書いたら、D・C・？のキャラも一緒に行くって事にするんで、D・C・？とかのキャラも出ます。

小説の感想とか欲しい。なんか心配になるんですね。面白いとか。

FAIRYTAILどうしよう。出来たらその事も意見ください。

文化祭の話し合い（前書き）

初音ミクの新作やってたら、執筆忘れてた。

今回はいろいろやりすぎたような……。

文化祭の話し合い

教室に着いたけど、まだ誰もいないな。おっ委員長がいるじゃん。義之達よりは親しいし、どうせ時計の設計図でも作っておくしかやる事ないし、話しかけるか。

「おっはよーさん、委員長。」

「おはよう、蒼影。今日は早いね。」

ちなみに、委員長は俺の事を下の名前で呼んでいる。俺は気分で委員長だったり、麻耶って呼んだりしている。

「まあな。そうだ、今日弁当多めに作ったから、一緒に食べないか？」

さっき気付いたんだけど、思ったより余りがかなり多いからな。多分寝ぼけてたんだと思い。確か五人分くらいあったからな。どうりで重いわけだよ。

「せっかくだけど、遠慮しておくわ。杉並達もいるんでしょ？」

「そうだけど。まだあいつら苦手なんだ。」

「別に、そんなのじゃないわ。」

「いいけどさ、友達が俺だけって可哀想じゃない？」

「別に……、ってどうして友達があなただけになるのよ!？」

「だってあんまり話してくないか？」

「そんな事ないわよ。」

「別にいいんだけど。」

「誘ってくれたのは、感謝するわ。」

やっぱり委員長は駄目だったな。まあ、雪月花や杉並達いるし、な
んとでもなるだろう。しかし、なんであんなに作った上に持って
くるまで気がつかなかったんだ？普通に考えたら、気がつくと思う
んだけど。

おっ、あれは義之達か？雪月花や渉も一緒に来てるな。見る限り相
変わらず杏と茜は小恋をいじってるな。義之は標的が自分にならな
いように、避難し見ているみたいだな。渉は……、いつも通りバカ
だな。

あ、渉が杏に殴られた。何をしたんだあいつ。

ん？義之の後ろはまゆき先輩に音姉、由夢、恋花さんだな。まゆき
先輩は大分落ち着いてるな。これなら俺も大丈夫か？

「何を見ているのだ？同士波柳よ。」

「見りゃわかるだろ。窓の外だ」

「それは分かるが何か見えるのか？」

「人が見える。」

まあ、他の人は見えないと思うけどな。

「ふむ、まったくわからんな。」

分かったら怖いから。

「そんな事より。急に、しかも後ろに現れるな。驚くだろうが。」

「その割には、驚いてないように見えるが。……まあ考えておこう。」

いくらなんでも急に後ろに立たれたら、驚くにきまつてるっての。
俺は分かってたら、そうでもなかったんだけど、分かってなかったら声出したかもな。

というより、あいつどこから入ったんだ？。って、もう消えてやがるよ。本当にあいつ人間なのか？

まあいい。あいつらが来るまで時計の設計図でも、書いておくとするか。クリパの日までには渡したいしな。実際は、今からでも渡せるけど、自分のコレクション用と一緒に魔法ってか力をつけておきたいからな。

自分用には、固定《ホールド》に自動調整《オートコントロール》、結界《けっかい》でいいか。他には、これ十迎撃用に何かつけるか。実際は結界だけで十分かもしれないから、つけなくてもいいか？

ちなみな、固定、自動調整、結界は名前の通り。

固定は物などをそのままの状態に出来るから、壊れないようにするには丁度良い。

自動調整は、物を最善の状態にするから、時計の時間合わせにはかなり役に立つ。

結界は持ち主の身を守る為だな。滅多に無いだろうけど傷ついて欲しくないからな。

「おっ、蒼影じゃん。おっはよー。」

もうみんなが来たみたいだな。

「おう、おはよう、渉（バカ）。」

「今バカって言わなかったか!？」

「言っていないから安心しな。」

「なら、いいか。そうだ、聞いたぞ。弁当作ってきてくれたんだろ?」

「余っただけだ。」

「やったぜ。くうー、楽しみだぜ!」

「板橋、うるさいっす。少し黙るっす。」

「ひどっ。」

「酷くないだろ。普通の対応だ。」

「そ、そんな……。うわーん、蒼影のばかやろおー。」

少し鈴花に合わせて言ったら、渉はどこかに走っていった。

そろそろHRはじまるんだが。まあ、いつもの事だし、少ししたら帰ってくるか。

「蒼影、まゆき先輩かなり怒ってたっすよ。今回ヤバいんじゃないっすか？」

「やっぱりか。でも、計画はやるぞ。折角考えたんだし、鈴花も止める気ないだろ？」

「当たり前っすよ。」

今回は、鈴花も一から関わったしこんな所で止める訳ないよな。

「でも、本当に高坂先輩怖かったんだから。」

そりゃ、小恋は怖いって思うだろうな。杏や茜は逆に楽しみそうだけど。

「大丈夫だって。なんとかなる。」

「蒼影は気楽だな。」

いまさらなんだけど、義之ってどこにいたんだ？逃げてたし、俺よ

り先に来ているとおもったんだが。どうでもいい事なんだけどな。

「席につけー。転校生三人紹介するから。」

ざわざわ

クラスがざわめく。そりゃそうだ。この時期に転校なんて珍しいからな。普通なのは……杉並と俺か。

義之はなんで驚いてんだよ。あれか？全員このクラスだからか？

「なあ、普通全員同じクラスにするか？」

「たまにはこんな事もあるだろ。」

「いやいや、普通ないだろ。」

「気にしなければ大丈夫だって。」

俺はなんとなく分かってたしなー。杉並が驚いてないのは杉並だからだな。それより杉並、涉がいつ戻って来たのが気になるな。

「ボクはフィル・イハートだよ。よろしくね。」

「……鈴木 ぼたんよ。」

「ナツミ・キャメロンなのさ！」

「なあなあ、あの子達可愛くない？」

「うむ。レベルは高いだろうな。」

「だよなっ、だよなっ。蒼影も義之もそう思うよな？」

「まあ、そうなんじゃないか？」

「……………」

義之は答えたみたいだけど、俺は答えない。理由はフィルに聞かれでもしたら、学校関係なく抱きついてくるからな。敵は増やしたくない。

「三人は後ろに座ってくれ。」

後ろって……、近っ！

「よろしくなのさ、リュウツチ。」

「よろしくね、蒼影。」

「よろしく。」

なんで今話しかけるかなあ。涉や雪月花がこっち見てるじゃん。後でいろいろ聞かれるだろうなあ。……昼に話すって事にするか。どうせ昼に三人を誘うつもりだったしな。

「じゃあ、HR終わるぞ。今日は文化祭も近いし、文化祭の話し合
いがあるからな。委員長頼むぞ。」

「わかりました。」

委員長も大変だよなあ。あ、そうそう委員長で思い出したけど、原作で壊された美秋なんだけど実は生きてるんだよな。天枷 美夏も眠りに今はついてなく、由夢と同じクラスで過ごしている。もちろん認識変更《にんしきへんこう》を使ってロボットって事はバレないようにしている。

後、美夏を起こしたのは俺だ。これは偶然だったがな。んで、美夏、美秋は俺の過去を知っている。美夏の間嫌いは少しは軽くなって、俺の事はかなり信用してくれてる。

話を戻すけど、美秋なんだけど、原作で覚えてる所で変えたかったから変えてしまった。実際対して影響はなく、委員長のロボット嫌いが無いくらいだ。今は、沢井家で暮らしてる。なんかフラグ建ったみたいだが。性格はお姉さんみたいな感じだな。原作には余り登場してないし、変わってるのかよく分からない。

ついでに思い出したが、茜のもう一つの人格？藍に関しては、この世界では生き返らせれないが、転生時に出来るようになってる。

まあ、これに関しては、茜には内緒にしてる。知ってるのは俺と藍だけだな。

まひるも転生時に生き返る事になって、今は別荘……貰ったダイオラマ魔法球で暮らしてる。今更なんだけど、かなり原作壊してるよな。他の二次でもここまではないぞ。

まあ、美秋が生きてて委員長も家ってか私生活では、原作より笑顔増えてるっぽいし、美秋も幸せそうだしいいか。

バンッ

「な、なんだ!？」

「桜内よ、委員長に目をつけられるぞ。」

いつの間にか原作っぽい展開になってるな。義之が寝てるのも似てるし。

「蒼影、なんかずっとぼーっとしてたね。」

「そんなにか？」

「うん、動いてはいたけど、ボク達がなに言っても反応してなかったよ?」

……、確かに時間たってるな。一、二時間か……。

「なんか悪いな。」

「別にいいよ。」

「提案があるっす。」

鈴花? ああ、計画の為に、クラス企画は生徒会に警戒して欲しいからな。ただでさえ警戒されてるから、少しは別に向いてもらわないと。

「深倉さん? 何?」

「あたしは喫茶店がいいっす。ただの喫茶店ではないっすけど。」

「どんなのがいいの？」

「そうっすね。ギャンブルってのはどうすっか？ギャンブルで勝てば安く負けたら高く、値段を決めるとかどうっす？もちろん、こっちが有利になるようにするっすけど。」

「あ、あのねえ。」

「「面白いわね。」」

「……雪村さん、鈴木さん？」

なんか、杏とぼたんって話し方とか似ているよな。

「ここの生徒会や先生がどんなのかはしらないけど、面白そうだわ。」

「そうね、書類上は普通の喫茶店にしておけば、大丈夫よ。」

「そんな事出来るわけないでしょ。」

「でも委員長、みんなは賛成みたいっすよ。」

確かに、クラスメイトは全員賛成っぽいな。これなら委員長でも却下出来ないだろうな。委員長には悪いが、おかげで楽になる。でも今回はあんまり計画無いんだよな。今立ててるのは、放送室を占拠していろいろ音楽流すのと、学校の至る所にリアルな化け物の置物置いたりして恐怖スポット作るだけなんだよなあ。

まあ恐怖スポットには、カメラを仕掛けるしリアクションとか楽しみだけ。

「わ、わかったわよ。なら喫茶店でいいのね。」

「そうね。書類は私が書くわ。」

「いいの？」

「ええ。」

へー、杏が自分からやるなんて言うとは。書類を杏が書くのはありがたいな。杏なら生徒会騙せるだろうし。

「なら、私も手伝うわ、雪村さん。」

「鈴木さんも？」

「ぼたんでいいわ。」

「そう、ならお願いするわ、ぼたん。」

杏とぼたんって話し方とか似てるし、似た者同士気が合うのか？

結構みんな乗り気だし、今回の計画は簡単だから生徒会もなんとかなるか。

まゆき先輩や音姉って生徒会の時怖いからな。捕まらない様にしないと。

「ギャンブルってなにをするのさ？」

「ポーカーやファイブカードとかのトランプ系はどうだ？」

トランプ系なら、俺とイカサマ出来るしな。ファイブカードはイカサマ出来ないか。

「賛成ー。あれなら、簡単に用意出来るもんねえ。」

「なら、そうするっす。いざという時も誤魔化せるっすし。」

「それで、メニューはどうするの？」

「軽くつまめる物が良いんじゃないかな？」

「そうだねー、それならボク達でも作れるもんね。」

話し合いは進んでるし、仕掛け作らないとな。これに関しては、力を使わないで技術でやりたいからな。絡繰りとか好きだし。

まあ、部品に関しては力を使うしかないんだけどな。

「うん、美味い。」

何食ってるか？実は暇つぶしにこの前非常食作っただけど、結構美味いんだよな。味はいろいろあるんだよ。苺やメロン、蜜柑とかのフルーツに、カツ丼、牛丼とか丼物も作った。ただハズレも有ってハズレは吐きそうなくらいまずかった。

「おい、蒼影。何食ってんだよ。」

「見りゃ分かるだろ。非常食だよ美味いぞ？いるか？」

「非常食って何作ってんだよ。しかも非常時じゃないし。」

「思ったより美味かったんだ。しょうがないだろ。ちなみに、杉並や鈴花、ナツミも食べてるぞ？」

「おお、桜内よ。お前もどうだ？」

「蒼影、これ美味いっすよ。桜内もどうっす？」

「美味しいのさ。」

実は他の人にも大好評なんだよな。杉並はいろいろしてるし、結構頼んできてる。鈴花は手伝ってもらう時に渡すし、ナツミも似たようなものだ。

「ふおい、ふぁんまあふいだ。」

「分からないよ。」

ングッ

「サンマ味だ。」

「サンマ味！？なにその非常食！？」

魚のエキスみたいので、魚味作ったけどこれが当たったんだよ。

「桜内！あんたも話し合いに参加しなさい！」

「俺！？」

怒られてやんの。ん？終わったみたいだな。

「明日からは、準備するから、ちゃんと協力してよね。」

「もちろんっす。」

「書類は今日中に出しておくわ。」

「ええ、よろしくね、雪村さん、鈴木さん。」

文化祭の話し合い（後書き）

原作かなり壊しました。書いてたらなぜか美秋生存に。

まあ、後悔はしてないんですけど、やっぱりやりすぎですかね？

昼の息抜き（前書き）

今回は少ないと思います。

昼の息抜き

ふぁー。もう昼だな。弁当を用意しとかないと。ただなあ、朝から思ってたんだけど、重いんだよ。自分で持ってくるのは面倒なんだよな。涉と杉並、義之に持たせるか？食う場所は外の方が気持ちいいし、移動するだろうしな。

「蒼影っ！早く昼飯食おうぜ。」

「板橋よ、落ち着け。弁当は逃げはしないのだからな。」

丁度いい所に来たな。

「悪いけど、弁当二人も持ってくれないか？」

「いいぜ。」

「まあいいだろう。」

「なら、これな。」

「これデカくないか？」

「二人で持つんだし、大丈夫だろ。」

二人に渡した料理は、約五人。実際持ってきたのすべてだから、俺は自分の分しか持たなくていい。

「蒼影、どこで食べるっすか？」

「外ならどこでも。雪月花はどこがいい？」

「私達は別にどこでもいいわ。」

「うんうん、小恋ちゃんは一？」

「わ、私もいいよ。」

「じゃあ、決定か。鈴花連れてっておいで。他の人連れてくるから。」

「了解っす。」

後は、ナツミ達だな。なんかナツミ特ダネとか言っでどこか行きそうなんだが。

「蒼影、どうしたのかしら？」

「昼飯だからな、誘いにきたんだ。場所も分からないだろうし。」

「ありがと、蒼影。」

「蒼影、早速行くのさ。案内するのさね。」

本当ナツミ達は元気だよな。俺だったら、転校したばかりなら絶対緊張するんだけど。

「行くから付いてきてくれ。」

「了解なのさ!」

鈴花に教えてもらった場所に行くと、全員集まっていた。

雪月花は弁当作ってるみたいだな。ナツミ達は今日作って無かったよな。

「おっせーぞ。」

「ん?そこにいるのは、転校生か?」

「ああ、知り合いだし、誘ったんだ。」

「そいえばー、蒼影君ってばいつの間にか仲良くなったのー?」

「そ、そうだよ。月島まったく知らなかったんだよ?」

「それは食べながらでいいだろう?」

俺的には、料理を食べてもらって料理の感想を聞きたいからな。やっぱり久しぶりに作ったから、腕が落ちてるかもしれないし、家族じゃない人の感想も聞きたいからな。

「そうね、蒼影の料理は初めてだから、楽しみね。」

「杏は初めてなの?」

「ええ、ぼたんは食べた事あるの?」

「あるわよ。とても美味しかったわね。」

そいえば、ぼたん達には一回作ったけな？あれは結構嬉しかったな。

「なあなあ、いいから早く食おうぜ。」

「そうだな。なら。」

「「「「「「「いただきます。」」「」「」「」「」」

さて俺は自分の食べるとするか。今日は、唐揚げ、焼きそば、おにぎり、肉団子、サラダ、厚焼き卵、オムソバに小さく切ったパンとジャムだ。パンとジャムは別に分けて入れてる。一部以外定番の物ばかりだな。

この年になっておにぎりはなんか恥ずかしかったな。

「なんだよ、コレ。美味すぎるって。」

「相変わらずの美味しさだな。」

「ありがとう。後、渉は少し落ち着け。」

渉は一口食べた後、どんどん食べていってる。これなら、全部なくなりそうだな。

「やっぱり蒼影の料理美味しいね。羨ましいなあ。」

「小恋も頑張ったら出来るって。なんなら教えてやるよ。」

「蒼影君、本当に料理上手なんだねー。」

「確かに蒼影にしてはやるわね。」

「杏、俺にしてはってなんだ。」

杏はたまに失礼な事いいな。俺にしてはって、誉められてるのかわからん。しかも何を基準に決めてるんだ？

「やっぱり美味しいっすね。」

「さすが蒼影だね。」

「何度食べても、やっぱり美味しいのさ。」

「美味しいわね。」

この四人は前と同じ反応だな。美味しいって言ってくれてるしいいんだけどな。というより、ナツミ一度しか食べた事無いだろ。あの非常食は別として。

ふと弁当を見ると、既に四分の一が無くなってた。食われるの早いな。

「なあなあ、このパンってどこのなんだ？」

「手作りだけど？」

「パンも作ったのかよ！？すごいな、蒼影。」

「まあ、趣味でもあるからな。いろいろと作ってるしな。今日は基

本的に手作りだぞ？」

「ええっ！本当にー？」

「あのなあ、茜。俺は人前ではあまりしないけど、結構料理やってみるし自分で創作してんだぞ？」

「そうだぞ、花咲よ。」

「なんで杉並が言うんだよ。」

「俺はよく食べてるからな。まあ、簡単な物ではあるがな。」

「本当なのか！？」

「確かに、杉並、鈴花はよく食べてるな。」

杉並や鈴花には世話になってるしな。まあ、杉並は迷惑もかけられているが、俺は味見役になってくれてるからお互い様だな。

「ずりーぞ。俺もこんなに美味しいなら、もっと食いたいっての。」

「私達も食べたいわね。」

「うんうん、もっと食べたいよねー。」

「ナツミもまた食べたいのさ。」

「ボクもー。」

「わかったって。気が向いたらまた作ってやるから。」

はあ、約束した事だし、また作らないとな。次は新作作って味見役にしてやるか。

「蒼影ー!!」

この声はまゆき先輩？

「ねえ、あれ高坂先輩だよね。」

「そうね。」

「なんであんなに怒ってるんだろ。」

「蒼影、あなた何かしたのかしら？」

「なんで俺なんだよ、ぼたん。」

「あなたの名前呼んでるじゃない。」

「うぐっ。」

「その反応は何かしたのさ。」

何かしたかな？朝以外記憶に無いんだけど。

「影くーん。」

音姉も？しかも声怒ってるし。本当に俺何をしたんだ？

「蒼影、音姉まで怒ってるって何したんだよ。」

「分かったら苦勞せん。てか、逃げるわ!」

「ふむ。高坂まゆきに朝倉姉か。逃げ切れよ、波柳よ。」

「頑張れー、蒼影。骨は拾うから。」

「見つけたわよ、蒼影。よくもやってくれたわね。」

「影君? どういう事なのかな?」

「……、本当になんでなんだ。何かしたか?」

その時目に入ったのは、空になった弁当箱。そして普通の状態のみ
んな。

あれ? 確か弁当にはイタズラとして、ま大量のワサビやカラシして
……いた……は……ず?

たしか全員の弁当に、手を加えたよな。空きもあったし、余ったの
入れたよな?

まさか、もしかして、音姉に渡した弁当に入れた料理にワサビ、カ
ラシ入りを入れたのか?

そしてそれをまゆき先輩が食べたとか? 朝の事もあるし、余計に怒
ったとか?

……ありえるな。

「音姉、まゆき先輩何があったか知らないけど、まずは落ち着いて話してくれない？」

「何があったか知らないねえ。」

「ふーん。影君はそんな事言うんだ。」

「蒼影、とぼけてると、ぬっころすわよ。」

これはマジだ。さっき考えてた線があたりかもな。

「えっと、人もいる「蒼影借りていい？」……し。」

「「「「「「はい。(うむ)」「」「」「」「」」

「あー、頑張るっすよ、蒼影。」

全員俺を売りやがった。同じ立場なら、俺もすると思うけどな。

「聞きたいんですけど、もしかしてワサビとかカ راشが「入ってたよ。影君はお姉ちゃんが嫌いなのかな？」……。」

どうするべきか。

「どうしたら許してもらえます？」

「そうね……。」

「一つ言う事聞くってのとかは……。」

「……まあいいわ。あたしはそれでいいわ。音姫は？」

「まゆきがいいなら私もいいよ。」

良かった……。一つ言う事聞くってのは心配だが……。あれに問い詰められるよりはマシだ。

なんか、義之、杉並、涉、鈴花以外の視線が怖いが。

鈴花は今度計画ついでに、買い物行くからか？

「なら蒼影。忘れたらぬところすから。」

「影君は忘れたりしないから、大丈夫だよ、まゆき。」

「なら、俺は教室に戻るんで……。」

周りの視線が痛いし、とっとと逃げる。

「弁当は義之頼むな。」

「まったく自分で持って帰れよな……。」

義之が何か言ってるけど知るか。

教室には、委員長が本を読んでいた。

「何の本読んでんの？」

「お姉ちゃんに進められたのよ。」

「美秋さんか……、元気なの？」

「ええ、そいえばお姉ちゃんが『蒼影君に遊びに来てねって伝えておいてね。』だって。勇斗も言ってたわよ。」

「マジか……。なら近い内行っていいか？」

「ええ。来るときは教えてくれたらいいわ。」

「了解。じゃあ邪魔するのも悪いし戻るわ。」

「ええ。」

委員長の家行かないとなあ。美秋さんもそうだし、勇斗とも遊ばないとな。委員長も結構歓迎してくれてるしな。

てか約束多いしこれから疲れそうだな。

昼の息抜き（後書き）

文化祭やるから、その間の話をオリジナルで作らないといけないんだけど、最近ネタが思いつかない。なんかいいのないですかね？

あと、皆さんお気に入りや感想ありがとうございます。

本と打ち明け（前書き）

最近二日に一回のペースをキープしてるけど、いつまで出来るか。

本と打ち明け

ふうー、授業終わったみたいだな。授業中にずっと時計の設計図書いてたから、なんとか完成したな。後は作るだけなんだけど……、これ作ってたらクリパまでに他の時計渡せないから、先に渡す時計に力付与しとくか。

実際力自体は作ってるし、付与も直ぐに終わるからな。

音姉、由夢、さくら、アイシア、義之は家で渡せるし今日渡せばいいか。後、鈴花と恋花さんにも渡せるかな？

そいえば時計渡すの何人になるんだ？今結構親しい人は……

女の人は朝倉姉妹に深倉姉妹、沢井姉妹。後、雪月花に美夏にさくら、アイシア、まゆき先輩、フィルにナツミ、ぼたんか。後、藍とまひるはこの世界では無理だろうから、渡すとしたら次の世界に行く時か。まあついて来るかは分からないんだけどな。

ん？そいえば美秋は麻耶と姉妹でいいんだよな？

んで、男は三バカに勇斗かな？

って事は……女十八人、男四人か？

後、原作キャラでななかにエリカがいるから一応十二人か。まあ、仲良くなるかは分からないんだけどな。

結構多いな。今完成してるのは、男用四つに女用が十八だから、一

応あと二つか。

今の所はなんとかかなりそうだな。

ん？付与も終わったな。これで今日は深倉姉妹、朝倉姉妹、さくら、アイシア、義之の七人に渡せるな。

ちなみに時計は基本的にデザインは同じだ。男女ではデザインは違って、時計にはそれぞれ名前を彫っている。本当は一人一人にデザインを考えたらいいんだけど、俺には思いつかなかったからな。

「おーい、蒼影。来たぞー。準備したら行くぞ。」

「姉さん、少し落ち着くつすよ。周りが見てるつすから。」

「別にいいだろ。すぐに帰るんだしよ。」

「そういう問題じゃないんつすよ。」

恋花さんが来たみたいだな。てか鈴花も言ってたけど、落ち着いて欲しいよ。周りの視線が痛いんだけど。

「恋花先輩、鈴花先輩の言うとおりですよ。影兄は逃げませんから。」

「由夢の言うとおりだぞ。蒼影は約束を破ったりしないからな。」
この声って由夢と美夏だよな？もしかして由夢と美夏も一緒に行くのか？

「蒼影、行くっすよ。」

「ああ。」

いつの間にか鈴花来てたんだ？さっきまで向こうで話してたのに。

「蒼影、遅いぞ。」

「悪い、それより何で由夢と美夏が？」

「美夏と由夢も一緒に行くんだぞ。」

「そうなんだ。なら、行こうぜ。」

「うむ、時間も無いからな。鈴花先輩、恋花先輩早く行くぞ。由夢も行くぞ。」

「美夏、まってくださいよ。影兄、早く行きましょう。」

「ああ。鈴花行くぞ。」

「了解っす。」

美夏は由夢を引っ張りながら恋花さんと先に行った。美夏は人間嫌いが少し無くなってるとし、俺の信用してる人には仲良くしてくれる。

そのおかげか原作とは違って由夢も天枷さんではなく美夏と呼び捨てにしている。

「こっちなんですか？」

由夢が隣を歩きながら心配そうに聞いてくる。まあ、確かに人通り少ない所を通るし、初めてなら心配になるのはわかる。

「そうだぜ。まあ、心配しなくても大丈夫だから安心しな。」

「わかりました……。」

「そいえばさ、手には入った物って何なんだ？」

「あー、まだ言ってなかったすね。」

「孫子の兵法書だよな、鈴花。」

「そうっすよ。孫子の兵法書と曹操が注釈した本みたいっす。」

孫子に曹操の注釈ねえ。曹操はともかく兵法書は普通に手に入ると思うんだけどな。

「それが珍しいか？」

「実は元の本をそのまま写してるみたいっす。普通は翻訳したり書き直しが入るっすから。」

確かに元そのままなら写しても珍しいかな？ 実際に昔の本は書き直しとかあるしな。

「兵法書？ 孫子？ なあ、蒼影一体どんな本なんだ？」

「あ、影兄、私も知らないです。」

「美夏と由夢は知らないのか？」

「蒼影、普通は兵法書なんか知らないっすよ。」

そんなもんか？まあ、確かに知らなくても困らないしな。

「孫子の兵法書ってのは確か。中国・春秋時代に呉という国の王、闔閭に仕えた名将・孫武が著した兵法書の名で、中国の代表的兵法書『七書』のひとつで、三国志の諸葛孔明や曹操などが活用したらしいな。戦略論としての評価は非常に高く、中国人はこれを「孫子以前に兵書無く、孫子以降に兵書無し」とまで評してるぞ。」

ちなみに、世に「孫子」と呼ばれる兵法書はもう一つあって、孫武の子孫で戦国時代の斉の人、孫賓の著した「孫濱兵法」と言う書も「孫子」と呼ばれているみたいだな。後は、この書は以前は史書に名前が見られるだけだし、実在が疑われていたんだけど、確か漢時代の墓からその竹簡が発見されてから、実在が立証されたみたいだぞ。

そうそう、中国には古来多くの兵法書が伝えられて、中でも、孫子、呉子、六韜、三略、尉繚子、司馬法、李衛公問对を七大兵書って言らしいぞ。多分これがさっき言った『七書』だろ。その筆頭に掲げられ、非常に高く評価されているのが、孫武が著した孫子の兵法なんだよ。」

「蒼影はやけに詳しいのだな。どうしてそんなに詳しいのだ？」

「そうですね。流石にひきますよ。」

酷くね？確かに自分でも異常だとは思っただけだよ。

「少し三国志に興味が有ってな。そんな時孫子を知ったから調べたんだよ。まあ、三国志はまだあまり知らないんだけどな。」

そうなんだよ。一部しか知らないけど、三国志の呂蒙と孫策、張遼が好きになって本格的に三国志見てみようと思ったら、孫子があったからついでに調べたんだよ。

「でも、俺も蒼影くらいは知ってるぞ。」

「あたしもっすよ。」

「鈴花先輩に恋花先輩ですか？」

「凄いのだな。」

由夢はなんか呆れてるけど、美夏はそうでもないみたいだな。

「お！着いたぞ。」

ここに来るのは久しぶり……じゃないな。確か二週間くらい前に来てたわ。

「大きな、ここが恋花先輩達の家なのだな？」

「そうっすよ。まあ、店もあるので家はそこまで大きくないっすよ。」

由夢は驚いているみたいだな。もしかしてこんなに大きいと思わな

かったか？

「由夢、正直こんな所にあるから小さいと思ってただろ？」

「ま、まあ。しょうがないでしょ、影兄。」

「わかったわかった。素が出てるぞ。（ナデナデ）」

「は、はやく行きましょう。／＼／＼／」

「蒼影、こっちだ！」

「今、行くよ！」

さて、早速見せてもらいますか。曹操の注釈とか楽しみだな。

「おお！本が多いのだな。由夢、これが普通なのか？」

「一般的には多すぎる部類ですよ。これなら影兄も満足するはずですね。」

「なにそれ？俺を中毒みたいに。」

「だって影兄かなり読むじゃないですか。」

「まあまあ、そこまでにするっすよ。蒼影、これっす。由夢に美夏も一緒にみるっす。」

「うむ！」

「わかりました。」

その後は、いろいろ見て回り少し休むことにした。

「ここっす。飲み物持ってくるっすから、姉さんも待っててくれっす。」

案内されたのはリビングだった。結構広いが置いてる物はかなりシンプルだった。

そいえば、家に入るのは初めてかもな。

「おまたせっす。」

「あ、ありがとうございます。」

「感謝するぞ。」

「気にしないでっす。」

「さて、休憩ついでだけど、蒼影に聞きたいことがある。」

……、なんか真剣な空気だな。

「あの、私もいいんですか？」

「いいっすよ。由夢も聞いておくっす。」

由夢もって事は……、俺の事か……？。

「率直に聞くと蒼影、お前何者だ？」

「恋花先輩？」

「由夢も思い当たるんじゃないっすか？ 蒼影のおかしな所。」

「…………。」

由夢にも気付かれてたのか。美夏は秘密を知ってたから、何となく分かったみたいだ。今も、俺の方を心配そうに見てくれてる。やっぱり優しいな。

「どう言う事だ？」

「蒼影は異常に身体能力が高いっす。しかも普段は押さえてるような気がするっす。」

「しかも、一度時計直してもらったろ？ あの時蒼影は何もなかったのに直していた。あれは道具ないと無理なくらいだったのにだ。」

……見られていたのか。周りには注意していたし、鈴花や恋花さんはいなかったと思っていたのだけだな。

「さらに言えば、この前蒼影が作った飾り。こんなの設備無しに作れないはずっす。」

鈴花が出したのは、この店に付けるために俺が作った飾り。

ここから誤魔化すのは俺では無理だな。ただ、俺の事をバラすとして受け入れてもらえるだろうか。それに美夏の事も言わなければいけない……。

「影兄、影兄が何者でも私の兄です。だから教えてください。」

「由夢の言う通りっす。だから教えてくれないっすか？」

……、今まで過ごしてきたから分かる。二人……いや、三人か。何も言っていないが恋花さんも同じ様だしな。この三人が嘘でこんな事を言うはずがない。ならば……話すか。

転生の事、技能作成《スキルメイク》について。場合によっては美夏の事も話した方がいいかもな。

「わかった。今から話す事は有り得ないと思うだろうが、すべて真実だ。」

「蒼影、いいのだな？」

「ああ、美夏。」

「俺は……。」

そして俺は三人に話した。一度死んで転生した事、神様にもらった技能作成の事も。

やはりと言うか、三人共驚いていた。

「影兄、それ本当なんですか……?」

「ああ、確かに俺は転生した。ただ今俺がここに生きている。それは変わらない。」

「……そうっすね。確かに蒼影が転生したってのは驚いたっすけど、蒼影は蒼影で今を生きてるんっすよね。」

「なら、わざわざ対応を変える必要は無いよな。これからよろしくな。蒼影。」

「……そうっすね。影兄は影兄で私の兄ですから、別に今まで通りでいいんですよ。」

「……由夢、鈴花、恋花さん。」

ありがたい。それだけだな。今までは、さくらにアイシア、美夏に美秋。受け入れてくれる人ばかりだったからこそ、否定されるのが怖かった。でも、三人は受け入れてくれた。まあ、少しすんなり受け入れすぎとも思うけどな。

「ありがとうな、由夢、鈴花、恋花さん。」

「礼を言われることはしてねえよ。」

「そうっすね。なら聞きたい事も聞いたっしし、そろそろ解散っすね。」

「……軽くない? まあ、シリアス苦手だしいいんだけど。」

「あの、何で美夏は驚いてないんですか？」

「美夏は知っていたからな。」

「美夏は知ってたんだな。でも、どうしてだ？」

「それは美夏がロボットだ」「ば、馬鹿！」あ……。」

おいおい、何でそれを言うかな？確かに美夏は若干抜けてる所あるけど、何もこんな所で……………」

「へー、美夏はロボットだったのか。」

「正直人間と変わらないですね。」

「ただ、学園にはバレないようにしないといけないっすね。」

「どうしてだ？」

「あたし達がどうしても、ロボットが通うのはマズいっすから。」

「そうですね。私達の秘密と言う事ですな鈴花先輩。」

「そうっすね。」

……………何でだ？何で普通に対応してるんだ？

「由夢達は美夏が怖くないのか？」

「別に。感情もある、見た目だって人間その物なんだ。怖がる必要はないだろ。」

「それに、影兄の事で耐性が付いたというか……。」

「その通りっすね。」

「美夏は受け入れられて喜べばよいのだろうか？」

「そうなんじゃないか？まあ、なんかゴメン。」

「じゃあ、美夏の事は秘密でバレないようにするって事でいいな？」

「はい。」

「了解っす、なら今日は解散っすね。」

はあ、何かいろいろ考えてたのが馬鹿らしいな。

ん？なんか忘れてるような気が……。

「あ！ちよつと待ってくれないか？」

そうだ、時計を渡すのを忘れてたよ。

「なんっす？」

「三人に渡す物があってな。由夢には家で渡すから。」

空間箱《ボックス》から時計を取り出しながら言う。四人にはバレ

てるから、普通に使えるから楽でいい。

えっと、美夏、鈴花、恋花さんのはっと。

「渡す物？一体なんなのだ、蒼影。」

「これだよ。」

「これは時計か。でもこれって……。」

「手作りっぽいっすね。何度本で読んだのに似てるっす。」

「その通り手作りだよ。それぞれ時計に名前彫ってるだろ？」

「本当だな。蒼影、大事にするぞ。」

「俺もだ。」

「ありがとうっすよ。」

嫌がられては無いみたいだな。喜ばれてるみたいだし良かった。

「影兄、あれって力で作ったんですか？」

「部品はな。流石に部品は作れる設備ないし。ただ、他は自分で作ったぞ。」

「あの……、私にも？」

「ああ、もちろんあるから安心しな。」

「心配なんか……。」

「じゃあ、俺達は帰るからな。美夏、鈴花、恋花さんまた明日。」

「また明日っす。」

「美夏も途中までは一緒に帰るだろ？」

「うむ、もちろんだ。」

「なら、帰るぞ。」

結局帰るの結構遅くなってしまったな。まあ、いいか。

本と打ち明け（後書き）

今回は三人にバレてしまいました。

「バラすのじゃなくてバレたのかよ。てか、何で俺が？」

おお、蒼影。他の作者さんの作品見ててやりたくなったんだ。

「だからって。文才ないくせに無茶するなよ。」

うっさい。趣味だからいいだろ。

「まあな。てか、俺の力いるわけ？」

一応、他の世界にも行くんだからな。

「ちゃんと完結してからだよな？」

いや、多分途中で。ちなみに設定なら二作品考えてるからな。一作品は結構マイナーだけどな。

「出来るのか？」

更新は遅くなるだろうけどな。

「ちゃんと完結するのかよ？」

当たり前だ。少しでも楽しみにしてくれてる人がいるからな。完結は目指すさ。

「でさ、この会話これからも続けるわけ？」

多分な。他の人を呼んだりして続けるさ。

「ふーん、まあいい。いつも読んでくれてる人、ありがとな。」

ありがとうございます。

「じゃ、俺は帰るから。執筆頑張れよ。」

わかってるさ。

夕食は会話の場（前書き）

タイトルの付け方変えようかな……。

最近一話が短くなってきてる。

夕食は会話の場

「美夏、まだ見てるのかよ。」

美夏はさつき渡した時計を何度も見ていた。

「むっ、いいだろう。」

「まあ、確かにいいんだけどさ。」

やっぱりあそこまで喜ばれると嬉しいよな。

「美夏はこっちだからな、由夢また明日だな。」

「はい。」

美夏と別れた後、由夢と俺はお互い無言だった。なんか由夢が不機嫌ぽかったからだ。

何でなんだ？

「どうかしたのか？」

「別にどうもしてませんけど。」

「でも何か機嫌悪くないか？」

「別に普通です。」

やっぱり時計かなあ？自分だけ渡されなかったからか？

今から渡してもいいんだけど、どうするかなあ？

せっかく一緒に帰ってるのに、この空気は嫌だし渡すか。今更じや逆効果かもしれないけど。

「なあ、由夢。」

「なんですか？」

「これ先に由夢に渡しておくよ。」

「えっ？」

空間箱《ボックス》から由夢の名前を彫り込んだ時計を取り出して由夢に渡す。

分かりにくいけど、なんか喜んでる……か？

「家で渡すんじゃないかったですか？」

「先に由夢に渡そうかなって思ったんだよ。悪いだよ。」

「悪くはないですよ。」

そう言いながら受け取る由夢は笑みを隠しきれていなかった。なんだかんだ言って嬉しいみたいだな。

「そいえば影兄、この事お姉ちゃん達は知ってるんですか？」

時計の事か？知るわけ無いだろ内緒にして作っただしさ。だから由夢達も知らなかったんだし。

「転生の事ですから。」

「わかってるから。」

「嘘ですね。明らかに他の事考えてたでしょ。どうせ時計の事じゃないですか？」

「何でわかった!？」

「影兄はわかりやすいんですよ。」

そんなにわかりやすいのかよ。確かにいろいろな人に言われてるけどさ。

「マジか……。」

「で、どうなの？」

「さくら、アイシアは知ってるよ。音姉に義之は知らない。」

「そうなんだ。どうしてさくらさんとアイシアさんは知ってるの？」

これは言っているのか？今は何ともないとはいえ、義之やさくらに関わる事だ。俺が勝手に言っている事じゃないような気がする。

なら、やっぱり由夢には悪いけど、適当に誤魔化しておくか。

「いろいろあってな。今日みたいにバラしてたんだよ。」

「ふーん。」

納得はしてないみたいだけど、これ以上は聞いてこないみたいだな。

「お姉ちゃんと義兄には話すの？」

「そうだな。いずれは話さないといけないな。」

「そうなんだ。」

「そうだ、これやるよ。今度一緒に料理作らないか？」

「や、遠慮します。義兄達からしたら下手ですし、かったるいからです。」

「大丈夫だから。俺も教えるし、もっと上手く出来るって。」

由夢の料理は正直人並みだからな。義之達と比べたら嫌になるんだろう。なら少しでも腕を上げてもらって、たまには由夢の料理食べたいからな。

「や、いいですから。」

「由夢と料理したかったんだがな。由夢は料理しないし、新しく教えるついでに出来たら楽しいと思ったんだけどな。」

これは結構本心だ。音姉とはたまにしているけど、由夢とは一緒に

何かする事なんて今まで無かったしな。

「……少しなら一緒にしても……。」

「本当か？」

「そこまで言うならしょうがないですから。」

「なら、今度一緒にしような」

「はい。」

なにか今の由夢でも出来る本格的な料理探すか考えないとな。まあ、人並みになるまで結構上達早かったし、才能が無い訳じゃないんだろうけど。

まあ、かったるい星人の所はあるから、進んではしないかもしれないけど。

「あ、そうだ。弁当どうだった？」

「おいしかったよ。美夏も気に入ってたし。」

「美夏も食べたのか？」

「はい、気になってたみたいだし。」

美夏が気に入ってたんなら、大丈夫だろうな。結構ハッキリ言うし。それに由夢も美味しいと思ってくれてたみたいだし。

ん、家が見えてきたな。

「着いたな。」

「そうですね、私は一度家に帰ってきます。」

「なら後でな。」

今日は晩ご飯も作るとするか。どうせ暇だし、最近晩は作ってなかったし。

「義之、晩ご飯作るから音姉達来たら教えてくれ。後今日はさくら達早いから、さくら達帰って来た時も教えてくれ。」

「晩ご飯か！？お前本当にどうかしたのか？」

「どういう事だよ。」

「いや、蒼影基本作っても一日一回じゃないか。それ以上やる時は、なんか特別な日しかないだろ。」

そうだったか？

………確かにそうかも。誕生日とかなら作ってたけど、普通は一日

一回だな。どうして晩作ろうと思ったんだ？

「確かにそうだな。」

「だろ？何かいい事でもあったのか？」

いい事か……。確かにあったな。今日は俺の事を由夢や鈴花、恋花さんに受け入れてもらえたし、美夏の事もそうだ。

だから作ろうと思ったんだろうな。結構俺って単純だな。

「そうだな……。確かにいい事はあったな。」

「そうなのか、何があったんだ？」

「内緒だ。」

「なんだそれ。まあいいや。音姉達来たら教えたらいいんだな。」

「ああ。」

さて初めるか。まあ、そんなに時間は使わないつもりだが。そうだな、カレーがなんか丼物が食いたいな。

「材料はっと。肉に玉ねぎはあるけど、ジャガイモとニンジン無いし、カレーは無理だな。」

となると丼物だけど、カツ丼はカツにする肉ないから牛丼にするか。他におかずでサラダだな。サラダにする野菜は前買いすぎたから余

ってるしな。

さて、作り始めますか。

「「おじゃまします。」」

「「ただいまー。」」

さくら達が帰ってきたみたいだな。音姉達も一緒みたいだし。そろそろ時計取り出しておくか。義之と音姉は知らないしな。

「影兄。」

「どうした由夢？」

「お姉ちゃん本当に知らないの？」

「いきなりどうした？」

「お姉ちゃん影兄の事知ってたよ。偶然独り言聞かれて、『由夢ちゃんも教えてもらったんだね』って。」

あれ？音姉には教えてたか？

ああ、忘れてた。そいえば転生の事話したな。

魔法の事は話した記憶あったんだけどな。確か、何で魔法使えるか聞かれた時に話してたな。

「あー、悪い。すっかり忘れてたよ。」

「はあ、影兄結構重要な事なんだから、忘れないでよ。自分の事なのに。」

「悪い。」

「もういいよ。」

「なら、盛るのと運ぶの手伝って。」

「や、かったるいですから。」

……。真面目になったと思ったらかったるい星人になったよ。

「なら、今日はいいや。向こうで待っててくれ。もう持って行くから。」

「はーい。」

俺の事を一応心配してくれてるみたいだし、今日はあまり強く言えないな。

そうだ、時計取り出さないと。音姉にさくら、アイシア、義之のは
つと。

「よし、時計はOK、料理も大丈夫だな。持って行くか。」

「影君、手伝うよ。」

「ありがとう、音姉。」

「どういたしまして。そうだ、影君由夢ちゃんに教えたんだね。」

「ああ、鈴花と恋花さんに問い詰められてな。由夢も思ってたみたいだし。」

「ゴメンな。秘密じゃなくなって。」

「影君を受け入れてくれたんだよね?」

「ああ。」

「なら、いいよ。少し残念だけど、また二人の思い出作ればいいんだから。」

「そうだな。」

俺だったらそこまで前向きには生きられないかもな。

「お待たせー。」

「あ、由夢ちゃん。私も手伝うよ。」

「ありがとうございます、アイシアさん。」

「今日は牛丼かー。相変わらず美味しそうだね、蒼影君。」

「ありがとう、さくら。んじゃ、食べようぜ。」

「そうだね♪」

「「「「いただきます。」」「」「」」

「んー、やっぱり蒼影君の料理は美味しいね。」

「だよね、あたし蒼影君の料理ならいくらでも食べられるよ。」

さくらにアイシアが言う。ありがたいけどアイシア、いくらでもは無理だろ。絶対いつか飽きるから。やっぱりたまに食べたり、いろいろな人の食べるからいいんだし。

「やっぱり蒼影には勝てないな。」

「別に料理に勝ち負け無いだろ義之。」

「影君、あまり作らないのに何でこんなに上手なんだろ？」

「影兄だからじゃないですか？」

「おい、由夢。それはないだろ。」

「事実だから。影兄は影兄だもん。」

「あ、そうだ。蒼影君、弁当美味しかったよ。ね、さくら。」

「うん、ありがとね。」

「どういたしまして。」

さくら達も喜んでくれたみたいだな。って事は、音姉だけか。悪い事したな。

「そうだ、聞いてよ由夢ちゃん。影君ったら酷いんだよ。」

「影兄が何かしたの？お姉ちゃん。」

まさか昼の事言うつもりじゃ。……でも止めるねえ。俺が悪かったわけだしな。

「影君ったら、私のお弁当にワサビやカラシ入れてたんだよ。」

「影兄、もしかして朝の間違ったんじゃ。」

「うっ、その通りだ。」

「蒼影君、イタズラは駄目だよ。」

「蒼影君、あたしにはしないでね。」

「わかってます……。」

由夢、さくら、アイシアの言葉が刺さる。あんなミスするとは思わ

なかったしな。

「まあ、そこまでいいよ。影君も謝ってくれたし。」

その後は、普通の会話をしながら晩ご飯を食べた。

たださ、音姉。止めるなら初めから言わないでくれよ。

「「「「「ごちそうさま。」「」「」」」」

みんなが晩ご飯食べ終わったし、時計渡すには丁度いいな。

「ちょっと渡す物あるから待ってくれ。」

「蒼影が？」

「これだよ。後ろに名前が彫ってるから、すぐに分かると思うよ。」

「綺麗だねー、でも蒼影君これ高かったんじゃないの？」

「そんなにしないよ。一応自作だし。」

実際に使った金は材料に使った金属の代金くらいだからな。

「さすが影君だね。」

「だよね、蒼影君ありがとね。」

さくら、音姉はあまり驚いてないみたいだな。

「音姉、さくらさん何でそんなに普通なの!？」

「そうだよ、さくら。この時計自作っておかしいでしょ!？」
残りは驚いてるな。普通は、この二人の反応が普通なんだけどな。
そいえば、鈴花達も驚いていなかったな。

「だって蒼影君だもん。普通だよ。」

「そうそう。でも由夢ちゃんのは？」

「私はさっきもらいましたから。」

「俺がおかしいのか？」

義之は普通だと思うな。むしろ驚いてなかったり、俺だからで納得する方がおかしいと思う。

「大丈夫だって、義之。多分慣れるさ。」

「慣れたくねえよ! しかもまた何かするつもりか!」

「何でだよ。」

「慣れるって事は何か起こらないと無理だろ。」

「確かな。でも安心しろ何もないから。」

「本当か？」

「ああ。」

今はだけどな。文化祭になったらいろいろやるつもりだし。

「んじゃ、俺は部屋に戻るから、後片付けは義之頼むな。」

「お、おい。」

義之が何か言ってるけど無視だ無視。部屋に戻ってやらないといけない事あるしな。

夕食は会話の場（後書き）

今回は朝倉由夢に来てもらいました。

「えっと、こんばんはでいいのかな？」

いんじゃないね。じゃ、早速実は音姉にも転生バレてました。

「バレてる人多くないですか？」

いんじゃないね？ どうせ最後にはヒロイン全員バラさないといけないんだしさ。

それに由夢だって蒼影の秘密知って嬉しかっただろ？

「ま、まあ。少しは嬉しかったけど……。」

ならいいだろ。この際言うが俺はシリアス苦手だしさ。

嫌いではないんだけど、読んだ又は見た後のあの気持ちかなあ……。なんかこう……。気分沈むじゃん。

「わかりますけど、少しは入れるべきと思うんだけど。」

まあなあ。ただシリアスは考えつかないから、少なくなるな。

「才能の差ですね。」

つぐ。この話は終わりだ終わり。

「逃げましたね。」

でさ、これからなんだけど、原作の話少なくなりそうなんだよな。

「オリジナル書くの？」

まあな。正直原作の話ならやれば分かるし、どうせなら違う話したいじゃん。まあ、好きな話は入れるけど。

「まあ、変にしないようにね。」

出来る限りな。俺の小説は自分で読むつもりだしな。

「それ、恥ずかしくないんですか？」

別の人とを考えて読むからな。それでも少し恥ずかしいが。

「なんですかそれ。」

今回はこれくらいかな？他の事話すとなんか長くなりそうだしさ。

「なら、私はもう帰りますね。最後に読者さん、いつもありがとうございます。ございます。」

お気に入りもあと少しで100だしな。欲を言えば、いろいろな人から感想欲しいが。

「今でももらってるでしょ。」

まあ確かにありがたい。

いつも感謝しっぱなしだな。

「まあ、これからも頑張ったら見てくれる人は見てくれるでしょ。」

だな、じゃ次の更新で会いましょう。

「さようなら。」

文化祭準備 メニュー決めとカードゲーム（前書き）

今回は少し早めに投稿

文化祭準備 メニュー決めとカードゲーム

「おっはよー、音姫。」

「おはよう、まゆき。」

昨日と同じくまゆき先輩がやってきた。結構朝はまゆき先輩と行く事多いよな。音姉がいるから当然なんだけどさ。

「蒼影に義之君もおはようさん。」

「おはようございます、まゆき先輩。」

今更なんだけどなんで俺は呼び捨てで、義之は君なんだ？

まあいいんだけどさ。まゆき先輩に時計渡さないとな。後は、雪月花に委員長、フィル、ナツミ、ぼたん後渉に杉並には今日渡せるから、残りは美秋に勇斗か。

美秋と勇斗は近い内に家に行かないとな。

「おはよう、蒼影ー、無視は無いんじゃないの？」

「無視じゃないっすよ、考え事してただけですから。おはようございます。」

「はい、おはよう。」

「あ、まゆき先輩、これ渡します。」

「ん？時計だね、どうしてあたしに？音姫達にあげればいいのに。」

「音姉達には渡しましたから。」

「へー、蒼影って金持ちなんだねえ。」

「なんでみんなそうなるんですか。手作りだから金はかかってません。」

「いや、普通そう思うでしょ。これいかにも高そうだしさ。ね、音姫。」

「うん、私も初めもらった時は驚いたんだよ。」

「だよね。まあ、作れるのも凄いなと思うけど。」

「別にそうでもないですよ。それに名前彫ってるから受け取ってもらわないと困るんですけど。」

「なら、もうね。ありがと、蒼影。」

受け取ってもらえてよかった。今更だけど。受け取ってもらえない可能性あるんだよね。

結構凝ったの作ったし。他のは一から作ってもここまでじゃないし。今度作る時計も、体験で作れる時計より少し凝ったくらいだし。

まあ、雪月花は小恋以外はもらってくれそうだけど。委員長は微妙だけど、押しに弱いしな。美秋やフィル、ナツミは普通に受け取っ

てくれるな。

「高坂先輩、お姉ちゃんから聞いたんですけど、影兄が迷惑かけてすみません。」

「あー、いいよ。蒼影にはちゃんとお詫びしてもらおうしね。」

「そうですか。」

「そいえばさ、蒼影。これ作るのどれくらい時間かかったの。」

「一つ三日位だったような。普通よりパーツ多かったし。普段作るのは、三時間くらいだし時間かかった方かも。」

「実際時計のパーツが多いから、バラバラにならないように一日でキリがいい所までやらないといけないから、大変だったな。」

「本職の人がどうなのかはほとんど分からないけどな。実際本職の人は、どのくらいで作るんだろ。パーツ多かったら、一度にやらないと無理なような気がするし。」

「まあ、本職にするつもりないからい。」

「よくやるわね。」

「まあ、趣味の部分が多いですから。じゃあ、俺達はこっちだから行くぞ義之。」

「話してる内に学園に着いたな。やっぱり誰かと話していると、時間が早く過ぎる気がするな。」

「ああ。」

「今日はみんな早いな、蒼影。」

「昨日俺達が早かっただけじゃないか？」

先に委員長に渡すとするか。

「俺、委員長に用があるから。」

「そいえば蒼影は委員長と親しかったな。小恋達にはいつ渡すんだ？」

「あいつらなら、後でも時間はあるだろ。鞆はお前持っておいて。」

「確かにな。てか何で俺が!？」

「よろしく。」

「ちょ、ちょっと待ってっ。」

こういう時はやっぱり無視に限る。

「よう、委員長。」

「蒼影、今日はいつも通りなのね。」

「当たり前だ。いつも早起きなんて俺には出来ないからな。」

「まったく、威張る事じゃないわよ。」

「はは、悪いな。そうそうこれもらってくれないか？」

「これって時計？高そうだけど、もしかして蒼影が作ったとか言わないわよね？」

「おおっ！初めて分かった人がいたよ。まあ、半信半疑みたいだけど初めてだから嬉しいな。」

「いや……分かるのがおかしいか？」

「委員長正解。俺が作ったんだけど、何で分かったんだ？」

「蒼影、たまに有り得ない事してるから何となくは分かるわ。」

「有り得ない事って……。」

「後は、何か隠してたみたいだね。これとは別に隠してる事もあるみたいけど。」

結構鋭いな。しかも転生とかの事も気付いてるみたいだな。流石に内容までは分からないだろうけど。

俺って隠し事出来ないのか？鈴花達にもバレてたみたいだし。

「それはだな……。」

「別に聞いただしたりはしないわよ。」

もういいかな。バレてるし、今度委員長の家行く時に話すとするか。

「あー、なんだ。今度委員長の家に行った時に話すよ。」

「そう、わかったわ。後、時計ありがとう。大事にするわ。」

「ああ。じゃ、この後の文化祭準備頑張れよ。」

「ええ、蒼影にも働いてもらうわよ。」

「分かってるって。んじゃな。」

「ええ。」

ギャンブルが堂々出来るし、文化祭はもちろん働くつもりだ。

今の所決まってるのは、ギャンブルで勝てば割引、負けたら割増のメニューだな。一応普通のも作るが、量はギャンブルメニューの方が多いし、客も面白半分で頼みそうだな。

俺だったら絶対頼む。イカサマ出来るしな。

「おい、蒼影！」

「なんだ涉？」

「蒼影がプレゼントくれるって本当か！？」

いや渡すけどさ、なんか違うくない？

「なんか悪い。言ってしまった。」

「どうせ、渉に見られたとかだろ？」

「まあな。」

渉の性格なら騒ぐだろうしな。

「ねえ、蒼影。私達にもあるの？」

「ああ、小恋達にも用意してるよ。杉並にもあるんだけど……」波柳よ、俺ならここにいるぞ。」丁度いいな。」

「杉並、いつ来たんだよ!？」」

凄いな、二人共息ぴったりだ。

「板橋、桜内よ、気にするな。」

「いや、普通気になるだろ!？」

「あ、これな。杏に茜、小恋のつと。そいえば、ナツミ達は？」

「あ、ありがとう、蒼影大事にするね。」

「ありがとう、フィルちゃん達ならまだだよ。」

「綺麗ね、大事にするわ。あとぼたん達なら遅刻だと思うわ。朝ナツミと居たから、連れ回されてるんじゃないかしら？」

ナツミか……。学園に来て二日目なのに遅刻ってフィルとぼたんが
可哀想だな。

「杉並はこれな。」

「ふむ……。凄いな。有り難く使わせてもらおうでしょう。」

「なあ、俺のは!？」

「あるから、落ち着け。ほらよ。」

「おー、すっげー!サンキューな!」

「あ、ああ。」

はあ……。渉のせいで結局疲れたな。

「おくれたのさー。」

「「すいません。」」

ナツミ達が来たみたいだな。今は文化祭の話し合い中だし、先生は

いないから怒られはしない。

来週にはもう本格的に準備が始まるからな。

「今、メニュー決めてるから、鈴木さん達も参加してちょうだい。」

「わかったのさ！」

「わかりましたー。」

「わかったわ、ならサンドイッチにクッキーや菓子パンとかでいいんじゃないかしら？」

「サンドイッチにクッキーはいいけど、菓子パンなんて誰が作れるのよ。」

「多分蒼影なら作れるっす。」

「本当？蒼影。」

「一応な、ただ何個も作るには人手は必要だからな。長持ちするやつも作れるから、文化祭前に少し作れば大丈夫かもな。」

まあ、どっちにしろ量は作れないな。」

「なら、サンドイッチにクッキー、菓子パンは決定ね。他には？」

「まったく、面倒な事任せてくれる。」

「おはよう、蒼影。」

「ああ、おはよう。これはフィル、ナツミ、ぼたんにもな。」

「ボクに？ なになに？」

「ナツミにもさ？」

「これは時計ね。」

「っそ、他のメンバーにも渡しててな。」

「そう、ありがとう。」

「ありがとうなのさ！」

ナツミとぼたんはやっぱりすんなり受け取ったな。

フィルはどうしたんだ？

「ありがとー、蒼影大好きー。」

「うおっ。」

さっきまで俯いてたたフィルの顔を覗き込もうとしたら、いきなり抱きついてきた。危ねえ、あやうく転けるところだったよ。

まあ、大好き言われるのは嬉しいんだけどさ……、今学園だし恥ずかしいな……。

「そこっ、話し合いに参加しなさい！」

やっぱり委員長に怒られたよ。まあしょうがないんだけどさ。

「はい。」

「了解。そうそうギャンブルだけど、ポーカー、ファイブカード、ブラックジャックはやっぱりいるよな。」

「それは、あなた達が決めていいわ。私はあまり分からないし、蒼影が何とかして。」

「うーす。そっちも決まったら教えてくれ。」

「わかったわ。」

トランプでギャンブルってなにがあったけな？

「じゃ、決めますか。」

「そうっすね。まずは蒼影の言った三つつすね。」

「でも他に何かあったのさ？」

「無いんじゃないかな？ボクは知らないよ？」

確かにこれ以外にトランプのギャンブルは無いよな……。面倒だしこれでいいか。後はなんかのサイトで見たセブンポーカー入れて四つでいいや。

「なら今の三つにセブンポーカーだな。」

「蒼影、セブンポーカーってなに？私分らないよ……。」

「そっか、小恋以外には誰がいるか？」

分らないのは小恋、杏、茜、フィル、ぼたん、義之、涉か……。

「なら、ナツミ、鈴花、杉並、俺でやってみようぜ。」

「別にあたしはいっすよ。」

「ナツミもなのさ！」

「俺もいいだろう、」

「んじゃ、知らないやつには説明するから。」

セブンポーカーは、ポーカーと似ていて初めに五枚でなく七枚引いて、出すときに五枚選んで役を作る。

役はポーカーと同じだ。

「って事だ。まずは俺と杉並、鈴花とナツミでやるか。」

「いいだろう。」

「なら杏シャッフル頼むな。」

「わかったわ。」

さて、手持ちは……なるほどね。

ダイヤが6、9ハートが6、8クロバーが6、9後はjoker
か。なら、6、joker以外を変えて。

「へー、なんか面白そうじゃなか。」

「渉も後で義之とやったら？」

「いいな！やろうぜ！」

「なんで俺なんだよ。まあいいけど。」

「じゃあ、小恋ちゃんは私とねえ。」

「ええつ、月島はいいよお。」

「いいからいいから。」

おつ、6四枚、joker二枚、A一枚。完璧だな。

「俺はいいぜ。」

「ふむ、こちらもいいだろう。こちらはストレートフラッシュ。ハ
ートの9、10、J、Q、Kだな。」

ストレートフラッシュか。ロイヤル近いじゃん。まあ、ファイブカ
ードはロイヤルの上だから問題ないが。

「蒼影、大丈夫？」

「フィル大丈夫だから。俺は6四枚、jokerでファイブカード

な。」

「なぬつ、負けか。」

杉並に勝つのはやっぱり嬉しいな。

「ナツミあたし達もやるっすよ。」

「もちろんなのさ！」

そいえば、ナツミ達仲良くなるの早くない？もうお互い名前じゃん。女子は凄いな。

あ、そうだ。

「委員長少しいいか？」

「何かしら？」

「明日か明後日委員長の家言っていいか？」

「……明日なら大丈夫よ。来る道の途中で待ってるわ。」

「了解。」

これで二人にも渡す事が出来るな。

今日は特にやること無いし、暇だろうからその分明日が楽しみだ。

文化祭準備 メニュー決めとカードゲーム（後書き）

なんか話がワンパターンになりそうだ。

「考え無しに書くからっすよ。原作までが大変っすね。」

「だよな、原作まであと何話かかるんだよ。」

わからん。ただ書いてる時は楽しいから、オリジナル増やしてしま
うんだよ。前言わなかったか？

「さあな。てか俺二度目だけど、何でなんだ？」

言いたい事が有ってな。

「なんだ？」

なんで技能作成《スキルメイク》使わないんだよ！意味ないだろ！

他の世界にも行くのに、いきなり使いこなせると思ってたのか！

「それ、お前のせいだろうが！てか、思い付かねえよ。お前考えろ
よ。」

無理だ！！特に攻撃や防御用とかな。大きくでなく、使用法に分け
るなんて思いつかないんだよ！！

「俺もだよ！」

「まあ、落ち着くつす。」

悪い鈴花。

「でも確かに勿体ないつすよね。」

だよな？

「でも、どうすんだよ。まさか読者さんに考えてもらうつもりか？」

……………。

「凶星みたいっすね。」

「あのな、感想やアイデア求めすぎたろ。」

だってさ、感想は嬉しいしアイデア思いつかないんだよ。

「まあ、それは読者次第って事っすね。」

「だな。」

じゃ次な。

「まだあるのかよ。」

単純な事だ。今度から後書きに二人くらい呼ぶから。

「さばけるんっすか？」

なんとかな。まあ今回はそれだけだ。お疲れ様。

「分かったっす。じゃ蒼影、t o u m a y u uちゃんてアイデア考えるっすよ。」

……、読者さん頼む。

「結局読者に協力頼むのかよ。」

まあな。本当は止めた方がいいんだろうがな。

「はあ、読者さんまた次の更新で。」

休日、委員長の家での息抜き（前書き）

前回の後書きの事ですが、期限はないので協力お願いします。

休日、委員長の家での息抜き

「蒼影君、今日は早いんだね。」

朝起きると音姉と由夢、さくらがいた。義之とアイシアはいないみたいだな。

「まあ、用事あるしな。義之とアイシアは？」

「二人共まだ寝てるみたいだよ。」

「あれ？影君、どこかに行くの？」

「ああ、少しな。」

「あ、影兄。帰りに何か買ってきてね。」

「気が向いたらな。」

何度も買ったら、金が無くなるっての。この前も買ったしさ。実際金を作るのはやりたくないし、あまり金無いんだよ。

実際金の収入源は小遣いとたまにやるバイトだからな。

「んじゃ、そろそろ俺は行くから。」

「うん。ボクもそろそろ行こうかな。」

「さくささんも何かあるんですか？」

「うん、ボクは学園で仕事があるから。」

「えっ!?! さくらさん大丈夫なんですか?」

「大丈夫だよ。そろそろ行かないといけないけどね。じゃあ、ボクは行くね。」

「気をつけてください。さくらさん。」

「じゃ、私も美夏と約束ありますから。」

なるほど、だから私服なのか。いつもはジャージだし、おかしいとおもった。

「由夢ちゃんも?」

「うん。」

「そうなんだ。行ってらっしゃい、由夢ちゃん、影君。」

「ああ。」

さて麻耶も待ってるだろうし早く行くか。

……? なんで麻耶かだって? 私生活だし、そんな気分だからだ。

麻耶は来てるかなっと。

……おっ、あれだな。勇斗一緒見たいだな。

「あ、お兄ちゃん！」

勇斗が気付いたみたいだな。麻耶も気付いたし、行くか。

「よう、勇斗、麻耶。」

「おはよう、蒼影。」

「おはよう、お兄ちゃん！」

「おう、相変わらず元気だな、勇斗。（ナデナデ）」

「えへへ。」

やっぱ弟とかはいいな。俺は由夢がいるけど、年の離れた兄弟はいないからな。

「蒼影、勇斗行きましょう。」

「はい。」

「そいえばさ、綾子さん元気か？」

「ええ、元気よ。前まで体調崩してたのが嘘みたいよ。」

「そうなんだ。」

麻耶と勇斗のお母さんの綾子さんは体調崩してたんだけど、今は大丈夫みたいだ。ちなみに、力を使っただけだね。

名前は病原崩壊《ウイルスダウン》って言って回復用の力なんだけど、病気専用。

これとは別に傷口修復《ヒール》ってのは作ってる。これは、病原崩壊とは別で身体的な傷などを即死で無い限りは治すせる。

なんで両方治せる様にしなかったかと言うと、せっかく作れるんだし、使う方法によって分けたかったただけだ。

「ねえ、美秋お姉ちゃんがお兄ちゃんが来るの楽しみにしてたよ。」

「そうなのか？」

「うん。」

「何度か蒼影の家に行こうとしてたわよ。」

「あー、そうなんだ。」

最近まったく会ってなかったからか？まあ、会いに来るくらい別にいいんだけどな。

「そうよ、いいお姉ちゃんなんだけどね…。」

「まあ、いんじゃないね？」

「はあ。」

「どうしたの？お姉ちゃん。」

「何もないわよ。」

やっぱり麻耶達は仲がいいんだな。勇斗はまだ小さいのに麻耶の事心配しているし、麻耶は心配かけないようにしてるし。

美秋も二人の事大事にしているしな。やっぱり仲のいい兄弟、姉妹ってのはいいな。

てか俺の周りって結構そういうの多いよな。音姉達もだし、鈴花達もそうだしな。

「お兄ちゃん、早く行こうよ。」

「ああ、ゴメンな。」

いつの間にか足が止まってたみたいだな。

「そいえばさ、麻耶後で美秋と三人で話せる？」

「ええ、勇斗をお母さんをお願いしたら出来るけど……。」

「なら、後で頼み。少し話があるしな。」

「……わかったわよ。」

「わりいな。」

今日は麻耶にも教えるつもりだしな。何か気付かれてるみたいだしな。

っと、アパート着いたみたいだな。いや、マンションか？

どうでもいいんだけど、アパートとマンションってどういう基準で分けてるんだろう。

「ただいまー。お母さーん、美秋お姉ちゃーん、お兄ちゃんが来たよー。」

「ただいま。」

「お邪魔しまーす。」

「蒼影君、久しぶりだね。」

「そうだな、美秋元気だった？」

「うん、でももう少し会いに来てくれてもいいのに。」

「ゴメンゴメン、いろいろあってな。」

「お姉ちゃん、蒼影が困ってるから。」

「麻耶ちゃんが言うなら……。」

「近い内にまた来るからさ。」

「約束だからね。」

「蒼影、まずは中に入って。何か用意するわ。」

「ああ。」

そいえば最近寒くなってきたよな。相変わらず桜は咲いたままだけど。

「いらっしやい、波柳君。」

中に入ったら、綾子さんが出迎えてくれた。麻耶の言った通り元気みたいだな、

「お邪魔します、綾子さん。」

「私は少し出るから、よろしくね。」

綾子さんどっか行くみたいだな。勇斗どうするか……、まあ美秋に任せたらいいかな？

「ねえ、お兄ちゃん。何して遊ぶ？」

「そうだな……。遊ぶ前にこれ渡すよ。こっちが勇斗でこっちが美秋のな。」

「時計？」

「ああ、大事にしてくれよ。」

「うん！」

実際勇斗はあまり分かってなさそうだな。まあ、勇斗なら雑には扱わなさそうだけどな。

「ありがとうね、蒼影君。大切に使うからね。」

「ああ、そうだ。麻耶に少し用事があるから、勇斗少し美秋と遊んでてくれないか？」

「えー。」

「すぐに行くから。」

「はい。」

「勇斗君、先に一緒に行こうか。」

美秋が勇斗を連れて行ってくれた。さてと、麻耶に話すとしますか。

そいえば、勇斗って五歳なんだよな。なのにしっかりしてるよな。

てか、俺五歳に時計あげたのかよ。

「で、蒼影話って何かしら？」

「麻耶さ、気付いてただろ？話そうかなって思ってたな。」

「別に無理に話さなくてもいいわよ。」

「いや、無理はしてないからさ。さてと、まずは今から話すのはさ、嘘っぽいけど本当だから。」

毎回同じような事言ってるような気がするな。

後は前と同じように麻耶に話した。これに関しては、美秋、美夏にかけた力についても教えておいた。

「……本当なの？」

「ああ、実際に美秋だって誰にもバレてないだろ。後は……。」

麻耶に実際に見せるために、空間箱《ボックス》を使って時計作りに使う金属を買う時に一緒に買った鉄を取り出した。

そして、その鉄を金属操作《メタルアート》で加工してブレスレットを作った。

「こんな感じだな。あ、これプレゼントな。」

「あ、ありがとう。本当だったのね。」

「当たり前だろ。こんな嘘つく意味なんかないからな。」

「確かにそうね。蒼影、ありがとう。」

「なんで礼言うんだ？」

礼を言うのは俺の方だろ。だって俺の言った事を信じてくれて、今も普通に接してくれてるんだしな。

「お姉ちゃんがロボットだってバレない為に、いろいろ協力してくれてたんでしょ？だからよ。」

「それは俺がやりたかったからだよ。それに礼を言うのは俺の方だよ。」

「そう。他に知ってる人はいるの？」

「結構いるな。さくらにアイシア、音姉、由夢、鈴花、恋花さん、美秋、美夏だな。」

よくもここまでバレたよな。しかも皆が普通に接してるんだから凄いいよな。

「あのねえ、重要な事なのに何でそんなに知られてるのよ。」

「大丈夫だって。麻耶を含めてみんな信用出来るしさ。」

「そういう事じゃないでしょ……。まあ、いいわ。勇斗が待ってるから行きましょ。」

「あ、ああ。」

しかし上手く行き過ぎだろう。全員が全員すんなり受け入れてるん

だから。

もう少しなんかこうねえ……。

「勇斗、お待たせ。」

「あ、お姉ちゃん、お兄ちゃん。あのね、美秋お姉ちゃんがお昼食
べに行こうって。」

「俺も？」

「そうよ、蒼影君も一緒に行こう？」

「俺はいいけど……。」

「私はいいわよ。」

「なら決まりね、勇斗君行こつか。」

「うん！」

「なら、いつもの喫茶店でいいわよね？」

「いいんじゃないか？」

「早く行こうよ！」

麻耶の家を出て街にある喫茶店に向かう。その間、勇斗は麻耶と美
秋と話していた。俺はたまに話すくらいだな。

そいえば由夢と美夏出掛けてるんだよな。もしかしたら出会うかもな。

休日、委員長の家での息抜き（後書き）

今回は生徒会の二人に来てもらったぞ。

「こんにちは、風見学園生徒会長、朝倉音姫です。」

「やつほ、生徒会副会長高坂まゆきだよ。」

「でも、何で今回は私達なの？」

今回は二人共ほとんど出番無かったからな。

「それはあんたのせいだよ。というより出番無い人ならまだ居るんじゃないの？」

まあな、正直誰出すか迷ったよ。だから気分で適当に決めた。

「そんな理由？」

ああ、それに音姉やまゆき先輩はまだ一度も出してないし、セッ
トで出しやすそうだからな。

「あんたねえ……。それよりも、また蒼影バレたじゃない。」

「でも今回はバラしただったよね。」

ああ、だってさロボットって事バレないのにも限界あるしさ、ずつとバレてなかったら怪しむでしょ。

「確かにね、でもあたしが出ていいの？」

ああ、まゆき先輩には近い内バレるからな。

「ネタバレしていいの？それに影君大変になりそうだね。」

ネタバレにはならないだろ。結果全員にバレらすって蒼影も決めるし、いつとかは言っていないんだから。

「そうかもね、音姫は心配しすぎなんだよ。」

「でもー。」

まあ、話を戻して今回はさ名前変えようと思うんだ。今の名前呼びにくいしさ。

「それは分かるけど、何でここで？」

一応読んでくれてる読者さんが困らないようにかな？

急に変わって分からない時俺もあったからな。

「そっか、私はいいと思うよ。」

サンキュ、まあ今回はそれだけだ。次回くらいから後書きは雑談メインだな。

「あたし達の出番ちゃんと増やしてよ。」

分かってる。じゃまた次の更新で。

人が増えると面倒だよな（前書き）

なんとか間に合った。

人が増えると面倒だよな

やっぱり街は人が多いよな。人多いのもって実は苦手なんだよな。

「あれ？影兄ですか？」

やっぱり、会ったな。休みだし、知り合いには会うと思ったけどさ。

声の方に振り返ると、そこには……予想通り由夢と美夏がいた。まあ、二人だけじゃないんだけどな。

「あれ？蒼影に沢井、どうしたの？」

「こんにちは、朝倉先輩、高坂先輩。」

「こんにちは！」

「少し遊んで、昼飯食ベに行くところですよ。」

「蒼影達も何だ。」

「まゆき先輩達もだったんですか？」

「まあね。」

「よかったら一緒にどうですか？麻耶ちゃんの前輩方なら歓迎しますよ。」

「でも、悪いんじゃない。」

「美秋が言ってるんだからいいだろ、音姉。」

「でも影君……。」

「あっちじゃもう仲よさそうだしさ。」

音姉と話していると、残りのメンバーが会話してた。麻耶と美夏、由夢、勇斗が話していて、まゆき先輩は美秋と話していた。

「なあ、沢井。沢井と蒼影は仲がよかったんだな。」

「私も知りませんでした。影兄は家でそういうの話しませんし。」

「蒼影とは昔知り合ったのよ。それから、たまに遊んだりはしてるわね。勇斗やお姉ちゃんもいるから。」

「お兄ちゃんはいつも優しいんだよ。」

「蒼影は確かに優しいよな。」

……仲良くなってるのはいいんだけどさ、話題の中心が俺ってなんなんだよ。

俺がいなかったらいいんだけど、目の前にいるんだから……。かなり恥ずかしいんだけど。

「まゆきちゃん、麻耶ちゃんは学園でどう？」

「沢井は真面目だし、特に問題ないから安心だよ。ただ、蒼影や杉

並達、雪村達がいるからね。そこは心配だね。」

「そっか……。麻耶ちゃんらしいね。蒼影君がいるなら大丈夫だよ、まゆきちゃん。」

……あの二人は仲良くなるの、早すぎだろ！？まゆき先輩はいつも通りに話しているし、美秋はまゆきちゃんって…

く、くくつ。ヤバい笑いが堪えないって……。まゆき先輩がまゆきちゃんって……。

「蒼影、今何か言ったかしら？（ニコツ）」

「い、いや。別に何も言っていないから。」

危なかった。まゆき先輩勘が鋭すぎだろ。しかも顔が笑ってるに目が笑わないとか……。何か黒いオーラも後ろから出てたし。

「あはは、なら一緒に行こうかな。」

「なら、行こうか。おーい、話は纏まったぞ。」

「そう、なら行こっか。」

「早く行こうよ、お兄ちゃん。」

「分かってるって。」

勇斗に引っ張られながらも、なんとか歩く。後ろからはみんな着いて来てるみたいだし、大丈夫か。

「いらっしやいませ。何名様ですか？」

えっと、俺に勇斗、麻耶、美秋に美夏、由夢に音姉、まゆき先輩だから……八人か。

「八人です。」

「こちらへどうぞ。」

「じゃ勇斗行こうか。」

「うん！」

音姉達も来たな。席順は奥から美秋、勇斗、麻耶、美夏でテーブルを挟んで奥から由夢、音姉、まゆき先輩、俺だ。

「俺は決めたけど、みんなは何頼む？」

俺はカツ丼にジンジャーエールだ。炭酸はジンジャーエールくらいしか飲めないんだよな。

「私は影兄と同じでいいです。どうせカツ丼でしょうですから。飲み物はオレンジジュースでいいです。」

「なら、あたしも由夢ちゃんと同じでいいよ。」

「美夏も同じだ。」

「なら私はナポリタンかな。飲み物は由夢ちゃんと同じで。」

「私も音姫ちゃんと同じにするわ。」

あれ？美秋いつの間に音姉と親しくなった訳？いや、いいけどさ。

「私もお姉ちゃんと同じにするわ。」

「僕はこれ。」

勇斗は子ども用のうどんだな。

「あ、すいません。注文いいですか？」

「はい、何でしょう。」

「カツ丼四つにナポリタン三つに子どもうどん。飲み物にジンジャーエール一つ、オレンジジュース六つで。」

「かしこまりました。」

「てかさ、いつの間にそんなに仲良くなってんの？」

「さつきよ。麻耶や美秋さんもいい人だしね。」

「それに麻耶ちゃんには蒼影君達の事を気をつけてもらわないといけないからね。」

「それはないんじゃないか、音姉。」

「お待たせしました。」

来たみたいだな。

「「「「「いただきます。」」「」「」「」」

「てかさ、どうして音姉とまゆき先輩は由夢達と一緒に？」

「あたしが音姫を誘ったのよ。で、街に行ったら由夢ちゃんと美夏がいたからね。」

「音姫先輩とまゆき先輩はいいやつだからな。」

「まあ、そんな事で仲良くなったから、一緒に街を回ってたってわけ。」

「そうなんだ。」

なんか原作に比べたら人と人の仲がかなり親しくなってるよな。

「勇斗、口周り汁付いてるぞ。」

勇斗の口に付いている汚れを取ってやる。勇斗はくすぐったそうにしているな。

「ありがとう、お兄ちゃん。」

「なんかこう見てると、昔の影君と由夢ちゃん、義之君見てるみたいだね。」

「へー、昔の蒼影達ってどんなだったの？」

「美夏も気になるぞ。」

昔の由夢達ねえ。音姉も覚えてるんだな。

「私も気になるわね。」

「私も気になるわ。」

麻耶に美秋も気になってるみたいだな。俺は別に話してもいいか。

「義之はそうでも無いけど、由夢はかなり変わったよな。」

「うん、そうだね。」

「そ、そんな事ないですよ。別に変わってません。」

「昔はお兄ちゃんって呼んでたのにね。」

「そうなのか、由夢？」

「由夢さんもそんな時期があったのね。」

「美夏、麻耶先輩。」

由夢も焦ってるみたいだな。まあ、お兄ちゃんなんて呼んでたのをバラされたら恥ずかしいか。

音姉も言ってみるか？面白くなりそうだし。

「でもさ、変わったのは音姉もだよな。」

「え、影君!」

「昔の音姫ちゃんはどんな子だったのかしら。」

「いまと違ってかなりクールだったよな。」

「影君……。なんで言っちゃうの……。」

「音姫が? あはは、今じゃまったく考えられないわね。」

「でも、蒼影はよく覚えてたわね。」

「まーな。」

結構小さい時は衝撃的な事多かったしな。

「蒼影って昔はしっかりしてたんだ。」

「まゆき先輩昔はって何ですか。」

「その通りの意味よ。」

「でもまゆき先輩、蒼影は頼りになるぞ? なあ、麻耶。」

「そうね。」

おお、美夏と麻耶は俺の味方みたいだな。

「まあ、そうなんだけどその分ねえ。」

「わかります、まゆき先輩。影兄ってば本当に困るんですから。」

おい、こら。由夢は絶対さっきの仕返しだろうが。

「ごちそうさま！」

ん？勇斗が食べ終わったみたいだな。財布の中身は……、ああー結構余裕あるし大丈夫か。

八人分で六千円か。結構安くすんだな。

他の人も食ってるし、そろそろ出ないとな。

「そろそろ出ようぜ。」

「あ、うん。」

「なら、私が払ってくるね。」

「美秋、俺が払うから大丈夫だよ。」

「え、でも。」

「いいからいいから。音姉達連れて先に出てていいよ。」

「なら、お願いするわ、蒼影君。」

んじゃ、とつとと払いますか。

支払いを終えて店の外に出ると、みんなが待っていた。

「いくらだった？」

「別に奢りますから大丈夫っすよ。まゆき先輩。」

「いや、悪いでしょ。」

「そうだよ、影君。私も払うよ。」

「いって。俺も男だしね。毎回は無理だけど、たまにはね。」

「なら、お願いしようかな。ねっ、音姫。」

「うん。」

よかったな、払った後に金もらうとか恥ずかしいしな。

「で、みんなこれからどうする？俺は帰ろうと思うけど。」

「私達も帰るわ。」

「またね、蒼影君。」

「あたしも帰るわ。」

「美夏も帰るとしよう。またな、由夢、音姫先輩、蒼影。」

みんな帰ったな。音姉達も帰るだろうし、一緒に帰るか。

「じゃ、私達も帰ろ、影君、由夢ちゃん。」

「はい。」

三人で帰るのって初めてじゃないか？いつもは義之がいるし、音姉は生徒会長だしな。

「ねえ、お姉ちゃん。私達が三人で帰るの初めてじゃない？」

「そうだね。たまにはこういうのもいいね。」

由夢も同じ事考えてたみたいだな。多分音姉もそうだろうな。

「そうだな。今度三人でどこに行くか？義之達には悪いけど。」

「それもいいね。」

「後が怖そうだね。」

これからもこんな日常が続いてくれるだろうし、頑張って生きていくか。

人が増えると面倒だよな（後書き）

さて、今回のゲストは。

「ナツミ・キャメロンなのさ！」

「ぼたんよ。」

「ボクはフィル・イハートだよ。」

って事で、ぼすてるチャイムメンバーに
来てもらったぞ。

「ねえ、ボク達出番少くない？」

「そうよ、私達も出番が欲しいわ。」

んー、正直さぼたんって杏と被ってるからな。

「確かに似てるのさ！」

「それを何とかするのが黎白の仕事でしょ。」

そうなんだけどさ……。まあ、何とかするさ。出来る限りみんなを
出したいしな。

「ボクは蒼影と一緒にだったらいいよ。」

分かってるから。ぼすてるチャイムメンバーは好きだから出したん

だしな。まだ出るかもしれないけどな。

「また出すの？大丈夫な訳？」

多分な、それに出すかは未定だし。

「そう。」

「そいえばさ、なんで名前黎白にしたの？」

なんとなくだよ。ぱっと思いついたんだよ。意味は全くない。

「思い付きね。まあいいわ。それより私達の出番はあるのかしら？」

もちろんだ。まあ気長に待ってくれ。

「早くするのさね。」

了解了解。

「また、次の更新で会うのさ！」

休み明けの学校はだるすぎる

「忘れ物ない？」

「ないよ。」

「俺もだ。」

「…………忘れ物あった。枕と布団…………。」

「なら、取ってこないと。って、枕と布団なんて何に使うの!？」

「てか枕と布団ってどうやって持ってくんだよ。」

おかしくないだろ。寒い日の朝、しかも休み明けほど眠い時はないだろ。日曜は特に何もなかったし、ずっと寝ていたから余計に眠たいんだよ。

「だるい、寝たい、サボりたい。」

「駄目だよ、影君。」

「まったく、影兄は。」

「蒼影は放っておいて早く行こうぜ。」

酷いな義之。音姉達もう行ってるし。でも本当に月曜日って面倒だよな。何でなんだろう？

「影兄、早く来てください。遅れますから。」

「はいはい。」

文化祭は来週だし、計画の方を急いで準備しないとな。

てかクラスの方よく二週間くらい前まで決めなかったな。準備とかは料理が出来るやつに料理で、俺と杉並はギャンブル専門かな。杉並ならイカサマ出来るだろうからな。普通にしたら損がでるからな、イカサマは必要だよな。度が過ぎたりしたらヤバいけど。

「おはよう、由夢、音姫先輩、蒼影。」

「おはよう、美夏ちゃん。」

「おはようございます、美夏。」

「おは、美夏。」

「えっと、誰だ？」

あー、義之は原作と違って面識ないんだったよな。

「美夏、こっちは義兄です。義兄、こっちは天枷美夏さんです。」

「よろしく、天枷。」

「よろしくな、桜内。蒼影どうかしたのか？」

「眠たいだけだ。」

寒さのせいで余計に眠くなる。

「たとえば、由夢ちゃんと美夏ちゃんは同じクラスなんだよね？」

「そうだぞ、いつも由夢には助けられてるな。」

「私も美夏には助けられますから。」

「そっか。」

由夢は美夏と話してるし、義之は無言、音姉は由夢達を見て笑ってる。

やっぱりこういうのは見てて嬉しいな。眠気は取れないけどさ。

「よう、蒼影。」

「恋花さんか。今日も相変わらず元気だな。」

「おい、蒼影。それって誉めてるのか？」

「当たり前だ。」

「なら、いいけどさ。」

「そいえばさ、いつも一緒に来てるのに、今日は鈴花と一緒にじゃないんだな。」

鈴花と恋花さんは基本的に一緒だったから、違和感あるな。

「ああ、鈴花なら今日は先に行ったぞ。」

「鈴花何かあったか？」

「準備って言ってたから、蒼影の計画関係なんじゃないか？ クラスなら蒼影も先に行くはずだしな。」

「なるほど、それならありえるな。」

鈴花にはいろいろ協力してもらってるし、何かお礼しないとな。

「てか、恋花さんも計画手伝ってくれない？ どうせ設置するだけだし。」

「面白そうだけど止めとくよ。まゆきのやつが怒るだろうからな。俺も怒ったあいつは苦手なんだからよ。」

「なるほど。」

よく考えたら、俺あの人相手しないといけないんだよな。音姉もいる訳だし、面倒だったらないな。

「蒼影もあんまり過ぎんなよ。一緒にいる俺に被害が来たら困るからな。」

「善処するさ。」

「絶対やり過ぎるな。」

「さあな、俺先に行くから、音姉達に言っといてくれ。」

「わかったよ。」

鈴花が先に行ってるなら下準備は終わってるだろうし、こっちも絡繰りは完成したから設置場所の近くに隠すだけだな。

ちなみに、今用意した絡繰りは妖怪の姿をした物だ。仕掛けは体に当たると動く仕掛けを組み込んで、それに連動した声が出るようにしている。

一度家で試してみたら、由夢が気絶した。由夢は昔のかくれんぼの事で、お化けや暗い所が原作より苦手になったからな。

有り難い事に、由夢は気絶していた理由とかは忘れていた。

あれなら、周りがうるさかったりする文化祭でも十分怖いと思う。一応忠告は作っておくか。

学園に着くと、ちょうど鈴花がやって来た。

「蒼影じゃないっすか。どうしたっすか？」

「鈴花が先に来てるって聞いてな。順調かなーってな。」

「もちろんっすよ。蒼影に任されたっすから、完璧にするっすから安心するっす。」

「ありがとな。そうだ文化祭前の土日のどっちか街行かねえか？」

「いいんっすか。」

「まあな。お礼も兼ねてな。」

「なら、日曜にするっす。絶対忘れないでくれっすよ!」

「ああ。」

「なら、確認に行くっすから。」

あそこまで喜んでもらえるとはな。ただ、かなりテンション上がったみたいだし、日曜は疲れるだろうな。

日曜か……。土曜日よりはいいな。土曜日なら日曜は家でゴロゴロするだろうから、また今日みたいになるからか。

「本当に枕持ってきて寝ようかな……。」

「何言ってるのよ。」

「ん? ああ、雪月花か。どした?」

「あなたがバカを言ってるから、呆れたのよ。」

「失礼な。」

結構真面目に言ったんだけど。学園の机とか固いから、体が痛くなるんだよな。だから、枕が有ったらよく眠れると思うんだけど。

「蒼影君、義之君は? 今日是一緒じゃないの?」

「当たり前だ。いつも一緒にいるわけないだろ。まあ、義之ならも

う少しで来るんじゃないか？」

「ふーん。なら先に行こっか。」

「う、うん。」

「そうね、準備もしないといけないから。そいえばナツミが探してたわよ。」

「わかった。教えてくれてありがとな。」

ナツミが俺に用？何かあったか？

「ねえ、蒼影。今回蒼影は料理するの？」

「絶対した方がいいよ。蒼影君の料理美味しかったしね。」

「そうね。」

料理か……。一応作るつもりだったけど、軽くだしな。自分でも一応は自信あるし、ギャンブル用で少し凝った料理作ってみるか？

まあ、今は気が向いたらって事でいいか。

教室着いたし、寝るか。

「気が向いたら考えてみる。少し寝るから後で起こしてくれ。」

「駄目だよ、ちゃんと授業受けないと。」

「大丈夫だ小恋。どうせ話し合いだから。」

ヤバいな。もう駄目だ。

「蒼影！起きなさい！」

「ん……、誰だ？」

「あのねえ……、いいから起きなさい！！」

「わかったよ……。」

この声は麻耶だな。さっきは寝ぼけて分からなかったけど、かなりキレてるな。多分話し合いが終わって準備に入るって所だな。

「蒼影！！」

「わ、悪い……。で、何だ？」

こんな事考えてる場合じゃなかったな。

「メニューが決まったから試しに作るのと、トランプの練習よ。ト

ランプは練習の意味ない気もするけど。」

「なるほど。んじゃ俺はトランプにするか。」

「そういうと思ったわ。なら、私達は行くわ。」

「頑張ってな。」

「杉並、涉今大丈夫か？麻耶いないし、金賭けてやらないか？」

「ふむ、俺はいいが板橋はどうする？」

「やるに決まってるだろ。蒼影から奪いまくってやる。」

「なら、なにやる？」

「無難にポーカーでよくね？一勝ごとに500円でどうだ？」

「涉金あるのか？」

「今日はな。」

「では決まりだな。桜内は頼むぞ。」

「なんで俺が……。」

そう言いながらもシャッフルをして配る義之。

女子は全員料理に行ったから、邪魔は入らない。今回はイカサマ無しで巻き上げてやる。

「来た来た!! 俺は交換無しでいいぜ。」

「うむ、俺もだ。」

二人共交換無しかよ。俺の手札はつと……………。

ストレートフラッシュだな。9を変えてAが来たらロイヤルか…………。

なら……………。

「交換だな。」

……………、来たな。

「なら、勝負だな。俺はハートでストレートフラッシュだ。」

「マジかよ!?! 俺は9三枚、8二枚でフルハウスだよ…………。蒼影は!?!」

「俺の勝ちだな。スペードのロイヤルだ。いただきだな。」

その後、十戦して俺は六勝、杉並、渉は二勝ずつで。俺は+400

0、杉並、渉は—2000。儲かったな。

「くっそー、次は負けないからなー。」

「おい、渉!？」

また渉が逃げていったよ。

「俺も鍛えておくか。」

……杉並も消えたな。

「何だったんだ。」

「さあな、それより儲かったな。」

「渉泣いてたな。まあ、自業自得っぽいんだけどな。」

「まあいつもの事だ。それより女子そろそろ帰ってくるんじゃないか? 作るのも軽い物だしさ。」

「かもな。蒼影も作るんだよな。」

「あ? そんな事言っていないけど。」

「でも委員長が言ってたぞ。」

……俺が寝ていたからか……。まあ、やろうかなとは思っていたけど……。

「ただいまー、ね、蒼影。ボクの料理食べてみて!」

「フィルか……、なら一つもらうな。っはぐ。美味しいと思うぞ。」

「本当!? やったー。」

なんかフィルを見るの久しぶりの様な気がするな。学園で会っても、登下校とかであまり会わなかったからかな?

「蒼影、私のもいいかしら?」

「ぼたんか? 別にいいけど……。」

ぼたんって料理出来たっけな?

……うん、不味くはないってか美味しい方だな。

「普通に美味しいぞ。」

「そう、よかったわ。」

「フィル達だけずるいのさー! ナツミのも食べるのさ!」

「分かってるから、落ち着け。」

「分かったのさ……。」

三人共結構料理出来るんだな。

簡単な料理だからかも知れないけど、どれも美味しいな。

「美味しいぞ、ナツミ。三人共ありがとうな。」

「よかったのさ！」

「ねえ、蒼影。蒼影は料理しなくてもいいの？」

「大丈夫だろ。大体なら作れるしな。てか雪月花や麻耶は？」

「みんななら、もう少し時間が掛かるって言ってたよ。」

「ふーん。そいえばナツミ俺に何か用あるんだって？」

「そうだったのさ！生徒会に行くのさ！」

「なんて……？」

頼む聞き間違いであってくれ。

「だーから、生徒会に行くのさ！」

……。今は一番会いたくなかったのに。私生活ならまだしも、学園で会ったら計画バレそうだしな。

しかも、今ちようど仕上げだし……。一応鈴花を連れて行くか。俺はバレてるけど鈴花はバレてないから、鈴花に頼んだらバレそうになっても誤魔化せそうだし。

「蒼影、あたしもついて行くっす。いいっすか、ナツミ？」

「もちろんなのさ！」

「じゃ、これ終わったら行くか。」

でも、ナツミが生徒会に何の用なんだ？

休み明けの学校はだるすぎる（後書き）

「天枷 美夏だ、よろしくな。」

「沢井 麻耶よ。」

「毎回思うのだが、初めの自己紹介はいるのだろうか。」

一応後書き初登場はしてもらおうかな。まあ、誰が出たか忘れてらまたさせるかもな。

「ちゃんと覚えておきなさいよ。」

「麻耶の言う通りだぞ。」

出来るだけな。それより、次からの更新は二日に一回じゃなくなるかもしれないから。

「どうしてたのだ？」

いろいろ忙しくなっただけな。出来るだけ同じペースにするけど、遅くなる事もある。

だから、この場で報告をな。

「そうか、黎白も大変なのだな。」

「サボってるだけじゃないの？」

……。他の人の小説面白いよな。

「はぁ……。」

「まったく黎白は。美夏は帰るぞ。」

「私も帰るわ。」

了解。また呼ぶから。

じゃあ、次の更新で。

風見学園の生徒会って多くね？ (前書き)

後書きで聞きたい事あります。

風見学園の生徒会って多くね？

コンコン

「どうぞ。」

まゆき先輩っぽいな。てことは音姉もいるんだろうな。

「こんにちはのさ！まゆき先輩、音姫先輩。」

「こんにちはっす。」

「……。」

「あれ？ナツミに鈴花、蒼影も？」

「あ、影君。どうかしたの？」

やっぱりというか中にはまゆき先輩と音姉がいた。なんか書類多そうだな。

やっぱり文化祭前だし、生徒会も仕事多いんだろうな。

「今日はナツミが用があるらしい。」

「ナツミ？どしたの？」

「実はナツミを生徒会に入れてほしいのさ！」

は？ナツミが生徒会……？むしろナツミは俺や杉並側じゃないか？

ナツミなら、スクープ狙って何か問題起こすパターンだろ。

「ナツミちゃんが？えっと、どうしてかな？」

「生徒会に入ったら、特ダネが手にはいるのさ！だから生徒会に入りたいのさ！」

「ナツミちゃん……。流石にそれはちよつと難しいかな。」

「当たり前っす。そんな理由で入れるわけないっすよ。」

だよな。もしナツミが生徒会に入ったら、こっちも更に大変になるしな。入ってもらったら困るって。

「ねえ、音姫。」

「何？まゆき。」

「ナツミさ、入れてみたらどうかな？」

「「「え？」」」

「本当なのさ！？」

ヤバい、どうにかして止めないと。

「おい鈴花……。ナツミが入るとヤバいだろ。」

「そうっすね。ナツミは特ダネの為にはいろいろするっすし、こっちの狙いとか気が付きそうっす。」

「だよな、まゆき先輩は任せた。」

「了解っす。」

鈴花とナツミが生徒会に入るのをどうするか、小声で話していると。

「どうして？」

「ナツミはさ、蒼影達とも親しいし、この前話して思ったんだけどいろいろ情報あるからね。」

それに、新しく蒼影も警戒しないといけないんだから、手は多い方がいいからね。」

「そっか、それもそうだよな。」

まゆき先輩が入れる理由も俺達が考えてた通りだな。このままじゃ本当にヤバイぞ。

「あの一、まゆき先輩。そんなに簡単に入れたらまずいと思うっすよ。」

「大丈夫よ、先生方には信用されてるから。」

それに文化祭あるから人手はいるからね。鈴花もどう？」

「遠慮するっす。蒼影すまないっす。」

やっぱり無理だな。これ以上何か言うと、鈴花が疑われそうだしな。
俺はもう警戒されてるし粘ってみるか？

「そうだ！さくら、学園長がいいって言うはず……」「いいよ♪ボクは問題が減るなら嬉しいし、生徒会が増えたら生徒の為にもいいしね。」……。」

なんでさくらが生徒会室に……？

「さくらさん、どうしたんですか？」

「ちょっと生徒会に用があつてね。そしたら、面白そうな事が聞こえたからね。はい、これ書類。」

「あ、ありがとうございます。ならナツミを入れてもいいんですか？学園長。」

「うん♪あ、蒼影君後で用があるから、一緒について来てくれない？」

「別にいいぞ……。」

「やったのさ！」

さくらの許可あったらどうしようもないって。はあ、タイミングが悪……い。

「あと、今度転校生がくるから。」

「転校生ですか、さくらさん？」

「男、女どっちなんですか？」

「女の子だよ。名前はアナ・グラムちゃんと大門カイナちゃんだったよ。」

「……はあ！？アナ・グラムっていったらΦブレインで出ていたキヤラでダ・ヴィンチの称号持ってたよな？しかも女！？アナは女っぽいけど、男だったろ。」

「しかも大門カイナってもしかして……、アナと一緒にだし大門って大門カイトのTSって事か？」

「もしそうならおかしいだろ！？まあ、今更なだけどき……。」

「そいえば……昔カイトに似たゴーグルと腕輪、Φブレインのオルフェウスだっけ？に似たのを付けた女の子助けた気がするんだよね……。」

「容姿は黒髪で短めでボーイッシュな感じだったよな。」

「なんで他作品からこんなに来るわけ？ぱすてるチャイムから三人、Φブレインから二人しかもTSしてるみたいだし……。」

「てか神のパズルだっけ？あれとかなないよな……？パズルは好きだけど、あんな命掛けのパズルやりたくないからな……。」

「そうそう、二人共蒼影君のクラスだから、蒼影君に鈴花ちゃん、

ナツミちゃん仲良くしてあげてね。」

「わかったのさ！」

「またっすか？これで転校生五人っすよ。」

「わかったよ……………」

もう諦めよう……。俺は多分巻き込まれる運命なんだ。

「話は戻すけど、これで人手も増えたね。ナツミにはどんどん働いてもらうから。」

「了解なのさ。これからよろしくさ、まゆき先輩、音姫先輩。」

「よろしくね、ナツミちゃん。」

はあ、結局敵が増えたな。しかしナツミが生徒会に入るとはな。

「なら、話も纏まったみたいだし、あたしは帰るっすね。」

「またね、鈴花。」

「ナツミも帰るのさ。」

「なら、俺はさくらさんについて行くから。」

「あ、蒼影は少し待って。あたし聞きたい事あるからさ。」

「まあ、いいけど。」

鈴花とナツミが帰り、この生徒会室には俺とまゆき先輩、音姉、さくらだけになった。

「えっと、影君に聞きたい事って？」

「蒼影さ、何か隠してない？」

「………何でそう思うんですか？」

「んー、何となく？で、そんなの聞くって事はあるんだ。」

なんか最近バレてばかりだな。なんか躊躇う気持ちが無くなってきたな。聞かれたら答えるみたいになってるし。

「まあ、あります。」

「教えてくれない？」

「理由は？」

「蒼影が好きだから？」

「ま、まゆき！？」

「まゆきちゃん！？」

「あはは、冗談だよ。でも知りたいのは本当に本当だよ。……まあ、最初のも結構本気なんだけどね。」

「なんか言いました？」

最後の方に何か言ったような気がするんだけど。

「別に、で教えてくれるの？」

「はあ、わかりました、教えます。」

「いいの？蒼影君。」

さくらがこっちを見て心配している。声には出していないが、音姉も同じだ。受け入れてもらえるか心配してくれてるのかな？

でも、なんか受け入れてもらえそうな気がするんだよな。みんな優しい人だから……。

「実は……。」

「蒼影がねえ……。音姫に学園長も知ってたの？」

「うん、ボクは結構前から知ってたよ♪」

「私も……。」

「そっか、本当は驚く所なんだろうけど、あまり驚かないね。他に知ってたる人はいるの？」

「えっと、音姉に由夢、さくら、鈴花に恋花さん、麻耶に美秋、美夏、アイシアの九人……。」

「恋花も知ってるんだ。もう秘密じゃなくなってるね。」

「まあ……。」

まゆき先輩の反応普通だな。あれか？俺だからですんでるわけ？

「なんか、まゆきちゃん普通だね。」

「まあ、蒼影ですから、そんなには……。」

「受け入れてもらえてよかったね、影君。」

「まあ……、ただ俺だからってのは……。」

なんかみんな俺だからって事ですんでるんだよな。

「じゃ行こっか蒼影君♪まゆきちゃん、音姫ちゃん、蒼影君借りてくね♪」

「どうぞどうぞ。」

「じゃあね、影君。」

「てかさ、さくら何があんの？」

「ん？ 蒼影君には転校生を先に紹介しようと思ってね。」

「俺に？」

「うん、そうだよ。蒼影君なら仲良くしてくれると思うんだ♪」

さくらが俺に向けて笑顔を浮かべる。その笑顔は何十年も生きてる
とは思えないほど、純粹で綺麗な笑顔だった。

「わかったよ。／（ナデナデ）」

なんてなくさくらの頭を撫でる。

「うにゃ！？ な、何するの、蒼影君！？ ／／／／／」

さくらが真っ赤になる。まったく、そろそろ慣れてもいいと思うんだ
けどな。音姉や由夢達もだし、他の人もまったく慣れないんだよな。

まゆき先輩とかも赤くなるしさ。

「なんとなくだよ。さくらも頑張ってるなって思ってたな。」

「うん。／＼それより、早く行こうよ。／＼」

この方向は学園長室か。って事は、学園長室に二人が居るのか？

しかし、まさか知ったその日に会う事になるとはな……。さくらに頼まれたし仲良くしないとな。いや、頼まれなくても仲良くはするつもりなだけどな。

ただ時計また作らないとな。今一つ完成してるし、仲良くなったら文化祭後くらいに渡すとするか。

「入るね、カイナちゃん、アナちゃん。」

「遅すぎだよ学園長。」

中にはやっぱりと言うか前助けた女の子とΦブレインの姿のままのアナ・グラムがいた。まあやっぱり原作と違って女の子みたいだけどな。

「にやはは、ゴメンね。あ、紹介するね。波柳 蒼影君、何かあったら相談するといいよ。」

「波柳 蒼影だ。よろしくな。後、久しぶり。」

「よろしくー。」

「もしかして蒼影？」

「ああ、あの時俺は名乗ってたな。」

「えっと、あの時はありがと……。／＼／」

「カイナ照れてるー。」

「おい、アナ!？」

結構仲良いんだな。

「じゃあ、少し出るから、仲良くしててね。」

「いってらっしゃーい。」

またさくらが出て行ったな。やっぱり学園長だし忙しいんだろうな。
仕事してる所は見た事ないけど。

「知らない顔もあるし、自己紹介しとくか。俺は波柳 蒼影。蒼影
でいいからさ。」

「あたしは大門 カイナ。こっちはアナ・グラムだ。よろしく、蒼
影。」

「よろしくー、蒼影。」

「ああ。さて、さくらが来るまでどうするか。」

「アナ、蒼影の話が聞きたい。なんか他の人と違う気がするから。」

「あたしもだ。前助けてもらった時言ってた事も聞きたいし。」

「…………俺、なんか言ったっけ？」

「言ったよ、『この世界に来て巻き込まれてばっか』って。」

「アナが思うにー、とっても不思議なの。」

前呟いたのが聞かれてたとはな。結構小さな声だったような気がするんだけど……。てかよく覚えてたな。

アナもなんで気が付いてるっぽいの？まあ、原作でも不思議なキャラではあったけどさ。

もう結構な人にバレてるし、正直聞かれたら答えてもいいんだけどさ。

この世界は平和そのものだし、この二人も会って少しだけ悪い人って訳じゃないしな。

「まあ、いいけど。他の人には内緒にしといてくれよ。」

「わかったー。」

「わかったよ。」

二人に説明した後の反応はって？相変わらずだよ。出会ったばかりのアナですらなんか納得してるし。

「大変だったんだな。」

「まあ、一応はな。」

「でも、アナ達に教えてよかったの？」

「他の人に言わないならな。ほぼ初対面だけど、二人は信用してるし。」

「あ、ありがと。／＼／＼」

「思うにアナ、嬉しいんだな。」

なんかカイナはかなり照れ屋みたいだな。アナは……、なんか少しズレてないか？

「あんあん！」

この鳴き声は……はりまおだな。

「わぁー、可愛いー。」

「犬なのか？」

「多分犬だよ。」

多分だけどな。でもはりまおって本当は何なんだろう？

「みんなー、仲良くしてる？」

「うん、蒼影とってもいい人だよ。ね、カイナ。」

「あ、ああ。」

「そっか、ならよかった。蒼影君、よかったら二人を送っていつてくれないかな？」

「俺が？まあいいけど。一回教室戻るから、二人共ついて来てくれ。」

なんで送らないといけないんだ？まあ、二人だけだと心配だからいいんだけど。

「わかったー。」

「なら、行くか。さくら頑張れよ。」

「うん♪待た、水曜日にね。」

「水曜日に転校してくるのか？」

「そだよー、アナもカイナも明日は準備なんだな。」

「アナが言った通りだよ、蒼影。」

「そうなんだ。まあ、いい行こうぜ。」

準備でも明日休みなのは羨ましいな。俺も休みたい。

「早く行こー。」

「わかったよ、アナ。」

風見学園の生徒会って多くね？（後書き）

「聞きたい事ってなんだよ。」

次の作品だ。

「はあ！？更新遅れるとか言いながら新しい作品！？」

「馬鹿だな。」

黙れ、蒼影、恋花。ちなみに二作品って、一つはD・C・？後でF
AIRYTAILの世界だ。二つ目は一つ目の後でGOD EAT
ERだ。

「なら、普通一つ目だろうが。」

最近GOD EATERにまたハマってな。だから先にやろうかと思
ったんだ。でももう一話は書いたから、修正面倒なんだ。

「計画性がないからだな。」

……。で、読者の意見をな。実際、前の世界の話とかはあまり出
さないから、どちらが先でも問題ないんだがな。

ちなみにGOD EATERは普通に原作のカップリング無視だ。

「どんだけ壊すんだよ。」

蒼影がな……………。

「俺!？」

「なるほど、蒼影ならありそうだ。」

「恋花さんまでかよ。」

まあ、読者には意見をお願いしたい。感想、メッセージどちらでもいいから。

「あとは感想が欲しいんだろ？蒼影が言っていたぞ。」

蒼影、お前な……。まあ、目に見えるし嬉しいな。特に七夜和さんには感謝だな。

「だが、他の人からも欲しいんだろ？前言ってたじゃないか。」

まあ……。そんな事より!! だいたい来週くらいを期限で意見を下さい。

まあ、どっちも更新は遅くなりそうですが。

「よろしくお願いします。」

アナとカイナの案内

「んじゃ、すぐ戻るから待っててくれ。」

「はい。」

「わかった。」

教室に着くとほとんどの人が帰っていた。まあ、今日やる事はだいたい終わったから生徒会に行ったんだし、当然か。

ん？あれは雪月花の三人だな。あいつらどうしてまだ残ってんだ？

「あら、蒼影じゃない。どうしたの？」

「さくらに頼み事されてな。だから荷物取りに来たんだよ。」

「頼み事ー？それって何？蒼影君。」

「もしかして、あそこに居る人に関係するの？」

「ああ、小恋の言う通りだよ。」

「なら、私達も行っているかしら？」

「あ？まあ、いいけど。何でだ？」

「だってえ、蒼影君があの人達襲った「しねえよ。」えー。」「あ、茜。蒼影はそんな事しないよ…。」

てか茜、後は杏か……。この二人の中で俺はどんな人間になってるんだよ。

「来るなら来い、待たせてるしもう行くから。」

なんか毎回人が多くなってる気がするな。

「あれ？その人は？」

「友人だよ。この二人は大門 カイナとアナ・グラムだ。」

「大門 カイナだ、よろしくな。」

「よろしくー。」

「雪村 杏よ。」

「私は、花咲 茜だよ。よろしくね、カイナちゃん、アナちゃん。」

「月島 小恋です。」

「んじゃ、行こうぜ。」

……暇だな。女子は女子で話してるからな、アナは話してないけど。

そいえば原作でもアナってあまり人と話してなかったよな。

「ねえ、蒼影。」

そんな事を考えてたらアナが話しかけてきた。アナって俺に対して

は、自分から話しかけてくるよな。なんで、俺に対しては話してくれるんだ？

「蒼影は寂しくはなかったの？」

「何が？」

「一人になって。今までいた人が急にいなくなってしまっただけ。」

……、アナはたまに真面目に話すんだよな……。

「まあ、寂しい時も有ったかもな。でもこっちでも家族と言える人や友人が居たからかな。」

「そっか……。蒼影は幸せなんだね。」

「まあな、ちなみにアナやカイナも友人に入ってるんだからな。」

「アナも？」

「ああ、嫌か？」

「ううん、ありがとね、蒼影。」

急にアナから礼を言われた。何故礼を言われたのかは分からないが、アナの笑顔が綺麗だったし、別にいいか。

「っ！？」

何か急に足に痛みが走ったんだけど……。なんでだ？

さっきまで話していた雪月花とカイナが足を蹴ったみたいだ。少し後ろにいたのに、今はすぐ後ろにいるんだから多分そうだ。

ただ、なんで蹴ったんだ？

「おい、お前ら怨みでもってあるのかよ…。」

「何もないわよ。」

「「なんでもない。」」

「そうそう。」

……アナの笑顔に少し見惚れてたからか？

小恋はなんとなく気が付いていたが、まさか杏や茜、カイナもなのか？

どうするか……。今は気付かない振りをしておくか……。一人を選ぶ事は出来そうもないし。

「蒼影だいじょーぶ？」

「大丈夫だ。ありがと……、アナ。」

「ねえ、蒼影君。カイナちゃんと知り合って本当なの？」

「まあな。」

「蒼影、結構知り合いのね。」

「だよー、月島も知らなかったもん。」

「まあ、カイナは一度しか会った事が無かったからな。紹介の仕様も無かったからな。」

「ぼたん達の時はどうなの？」

「ぼたんって誰だ？」

「ぼたんちゃん達は、少し前に転校してきた子だよ。蒼影君の知り合いなんだって。」

「三人もいたから、驚いたよね。」

「あれは俺もビックリだったよ。転校するってのも、その日の朝に聞いたんだからさ。」

「って事は、あたし達で五人って事か？あたし達も蒼影のクラスみたいだからな。」

「そうなんだ。カイナ達も私達のクラスだったんだ。」

「アナが思うに、学園長のおかげなの。」

「多分な。さくらならしそうだし。」

「それに、蒼影に会えて良かったの。ねえ、カイナ。」

「アナ!？」

なんかカイナをアナがからかってばかりだな。今日会ってから、二回目だぞ。カイナもあんなに反応しなかったらいいのに。

「で、蒼影。何でなのかしら？」

「何がだ？」

「とぼけても無駄よ。ぼたん達の事よ。」

っち、覚えていたか。話がそれていったから、忘れてくれてると思ったんだがな。

まあ、杏は雪村流暗記術があるしな。あれ？流っているっけな？

実際あれって瞬間記憶能力みたいな物だよな。

「あれは機会がなかったただだよ。学園に通ってた訳じゃないから、私生活以外じゃ会う事もなかったからな。」

「内緒にしてたんじゃ無いのお？」

「内緒にする事じゃないって。茜、ワザと言ってるだろ。」

「バレた？」

「まあ、いい。それよりさ、アナとカイナの家って近いのか？」

「ああ、アナとは隣同士だからな。」

「なら、いいけど。こっちでいいよな。」

「うん。」

フィル達もそうだったけど、他の作品のキャラって原作キャラ同士
近い場所にするでるよな。

偶然なのか？別に近いからって困る訳でもないんだけどな。

「ねえ、蒼影。」

「どうしかしたのか、小恋？」

「蒼影ってなんか顔が広いよね。」

「そうか？」

「そうだよ。でも、なんでみんな女の子なの？」

「いやいや、偶然だろ。しかもそんなに顔広くないから。カイナは
一度会ってたけど、アナとは会った事なかったしさ。」

「でも、仲良いよね。」

「まあ、友達なんだし、仲は良くないとおかしいだろ。」

「そういう事じゃないよ……。」

どういう意味だ？まあ、いいか。

「あ、アナ、カイナ、ここは俺のオススメのお店な。あまり人に言

うなよ。小恋、杏、茜も。」

そこは、俺の知り合いがやってる店だ。店員は二人だけど、二人共に女の人だ。

「お店？蒼影君、普通の家じゃないの？」

「よく見てみな。」

「あれ？深紅の…旗？」

カイナが言ったように、店の名前は『深紅の旗』だ。ちなみに、店長は美秋と仲いいみたいだ。

この店は、あまり人が入らないが腕は確か。

入らない理由は、周りからみたら普通の家みたいだからだな。さっき茜が言ったように、看板らしいのもかなり小さいからな。

「蒼影が勧めるほどそんなにいいのかしら？」

「ああ、俺もたまに働くしな。」

「蒼影、働いてるんだ。アナ一回行ってみようかな…。」

「暇な時ならアナ達も連れて行くよ。」

人は少ないけど、信用出来る人が来るなら、楽しくなりそうだしな。

「蒼影、私達も一緒に行っている？」

「当たり前だよ。小恋や杏、茜、他のメンバーも連れて行ってみるか。」

ただ友人といえるメンバー全員を一度に連れて行ったら、かなりの人数だから一度に連れて行くのはなあ。

「でも、蒼影何やってるんだ？」

「蒼影なら料理関係じゃないかな？」

「小恋の言った通りだ。料理やあとアクセサリーとか作ってるな。」

「アクセサリーなんて、売ってるのね。」

「ああ、『深紅の旗』では、基本的に喫茶店みたいな感じだけど、アクセサリーを買う事も出来るからな。たまに、俺が商品をつくってるんだ。」

「面白いわね。」

杏の言う通り結構面白いと思う。喫茶店でアクセサリーなんて売ってないしな。

「あ、蒼影、ここでいいよ。」

「あ？着いたのか？」

「そうだよ、ここがアナの家だよ。」

「結構でかいんだな。」

「蒼影ありがとな。」

「気にするな。じゃあな、アナ、カイナ。」

「うん、またね蒼影。」

「じゃ私達も帰るね。ばいばい、蒼影君。」

「またね、蒼影。」

「ああ、気をつけて帰れよ。」

アナ達は送ったし、雪月花はもう帰るみたいだから、俺も帰るとするか。

アナとカイナの案内（後書き）

疲れた…………。

「いきなりね。」

おお、杏か、茜と小恋はどうした？

「茜は知らないわ。小恋なら…………。」

「う、ごめん、杏。」

茜は居ないみたいだけど、まあいい。

「またオリキャラを出すの？」

「今回の話だと多分出るよね。」

ああ、二人な。今回は初めてから考えてたキャラだしな。だから、今回は出番少ない雪月花を出すのと、予告みたいな感じだな。

「でも、私達あまり出てなかったよね。」

「小恋の言う通りよ。」

まあ、文化祭終わったら日常編で少しは出すさ。

「ねえ、新作の小説どうなの？」

少しは出来てるさ。まあ、今週くらいに投稿するかもな。そうなたら、こっちの更新が少し遅くなる。

「別にいいわよ。黎白も都合はあるでしょうからね。」

サンキュー。今回はこのくらいにするか。

「今日は短いね。」

スマンな、小恋。まあ、また呼ぶし出番はあるさ。

んじゃ、また。

文化祭前日、最終調整

文化祭の準備は問題なく進んで、今は土曜日。明日からは文化祭だから、鈴花と最終調整をするつもりで早めに起きたんだけど、音姉も学園に行くみたいだ。

なんでも、音姉は俺、杉並対策と文化祭への調整みたいだ。俺が学園に行くのは、街で時間を潰してからだから会うか分からないが、出来るなら会いたくないな。最終調整でバレルなんて遠慮したくないからな。

「じゃあ、影君、行ってくるね。多分由夢ちゃんが後で来るから。」

「ああ。まあ、由夢が来たら俺も出るんだけど、朝飯は作っておくよ。由夢はかったるいとか言うだろうからな。」

「あはは、ならよろしくね。」

「気をつけてな。」

さて、音姉は行ったし由夢の朝飯は温めたらすぐ食べれるし、時計は今度作るしな。今回作る時計は簡単だから今からでもいいんだけど、ゆっくりやりたいしな。

さくらやアイシアも仕事でいないから暇だな。由夢が来たら暇は潰れるんだけど、まだ来ないだろうしな。

「お邪魔します。」

あれ？由夢もう来たみたいだな。いつもなら、もう少し遅く来るんだけど。まあ暇だったし丁度良いか。

「おはよう、由夢。」

「おはよう、影兄。ねえ、影兄お腹減ったんだけど。」

「来て一言目がそれかな。まあ、いい。作ってるから一緒に食おうぜ。」

「はい。」

「にしても、今日は由夢早いんだな。」

「や、私だって準備があるから。」

「そうなのか？」

「当たり前です。前日なんだから。影兄はどうなの？」

「俺も一応あるぞ。だから、もう少しで出かけるから。」

まあ、文化祭の事でもクラスとは関係ないんだけどね。

「なら、私も食べたら出ます。」

「分かった。怪我しないようにちゃんと気を付けていけよ。」

「子どもじゃないんだから、大丈夫だよ。」

「分かってるけど、一応な。由夢は大事な人なんだしさ。」

「っな!!／／／／／」

「もちろん音姉やさくら、アイシアもな。時計渡した奴は全員大事な奴だよ。」

「…………バカ。」

「あ?今、なんか言ったか?」

「何も言ってません!!」

あー、紛らわしい事言ったから、怒らしてしまったかな?

「悪いな、由夢。(ナデナデ)」

「別に怒ってませんから……。／／／」

俺に撫でられてる由夢の目は、トロンとしていて気持ちよさそうだ。あまり表で甘える事が無い由夢だけど、こんな時は少し甘えてくれるから嬉しいな。

「っあ。」

「また後でな。」

「何を。／＼／」

本当はもう少し撫でていたいけど、由夢も朝飯を食ったし、食器とか片付けないといけないからな。

食器洗うのって面倒だよな。夏は冷たくていいけど、冬は冷たすぎるよな。洗った後とか手がかなり痛いし。

しかも油物とか洗った時なんかベタベタするからな。あれなかなか取れないんだよな。

さて、後は鈴花が来るまで由夢と遊んでおくのでしょうか。

「ゆーめ!」

後ろから由夢を驚かす。そしてそのまま由夢の頭を撫でてやる。

キャラが違うって? たまにはこんな事もあるさ。

「い、いきなり何するんですか! ? / /」

「んー、撫でてるだけだぞ? 兄弟のスキンシップだよ。」

「影兄、性格違いすぎるって。」

「確かに、少し遊びすぎたな。」

何でかは知らないけど、急にやりたくなっただよな。確かに性格違いすぎるし止めとくか。撫でるのは止めないけどね。結構癒されるし。

「影兄、恥ずかしい。」

「嫌か？」

「嫌って訳じゃ無いけど……。／＼／＼／」

「なら、後少しな。さくら達もそうだけど、最近二人でいる事なかったしさ。たまにはこういうのもいいだろう？」

「うん……。／＼／＼／」

顔を赤くしながらも頷く由夢。やっぱり可愛いよな。

さて、そろそろ行かないとな。

「由夢、そろそろ出ようぜ。俺も行くから。」

「わかりました。」

「じゃあ、頑張れよ。」

「影兄もね。」

さて、鈴花迎えに行くか。本当は待っとくつもりだったけど、まだ

時間有るし暇だからな。

「蒼影、早いんっすね。まだ時間になってないっすよ？」

鈴花の家に行こうとしていたら、丁度鈴花がやってきた。

「早いつて鈴花も時間より早いじゃん。」

「まあ、そうっすね。時間はあって困らないし、早速行くっすよ。」

「わかってるって。まずは、商店街に行くんだったよな。」

「そうっす。最終調整に必要な物買って、その後に学習に行くっす。」

「何が必要なんだ？」

「あまり買うのはないっすから、余った時間で少し遊ぶっすよ。別に大丈夫っすよね？」

「ああ、いつも世話になってるしな。」

「なら、行くっすよ。」

鈴花に手を引っ張られながら歩く。多分鈴花は手を握ってるのに、気付いてないんだろうな。まあ、俺は別に嫌じゃないしいいか。

「なあ、何を買うつもりなんだ？」

「蒼影の絡繰りを隠すためのシートっすね。これは注文してるっす

から、大丈夫っすよ。」

「相変わらず手際がいいな。」

「じゃないと、蒼影の相方は出来ないっすから。いろいろと計画してくれるっすしね。」

「なんか酷いな。まあ、ありがとうな。」

「別にいいっす。あたしも楽しいっすから。」

本当に鈴花には感謝しっぱなしだな。もし俺だけだったらとっくに生徒会にバレてるだろうしな。

対生徒会に関しても鈴花の協力あってこそだしな。

「あ、ここっす。あたしが買ってくるっすから、待っててくれっす。」

「了解。早めになー。」

………暇だな。明日は文化祭なんだよな。そいえば由夢や美夏のクラス何やるのか聞いてないな。今日学園行くし、その時にでも聞いてみるか。音姉やまゆき先輩は生徒会関係で、クラスの出し物とか参加しないんだろうな。

って事は、もしかしてナツミも参加しないのか？ いや……、生徒会入ってなくても、特ダネがどうか言って何処かに行くんだろうな。

「そいえば、アナとカイナって結構馴染んでたよな……。」

火曜日転校してきたんだけど、二人共すぐに馴染んでたんだよな。その時の事？ フィル達が来た時と変わらなかったよ。

二人共美少女だし、男子の声が異常にうるさかった。しかも、何故かまた俺の近くの席だったから、周りの視線が痛かった。

なんで俺の周りあんなに空いてた訳？ アナはあまり他の人と話さなかったから、余計に周りってか男子の視線に殺気が混じってたな。

「蒼影、お待たせっす。買うのは買ったっすから、適当に回るっすよ。」

「ああ、鈴花どこに行きたい？」

「そうっすね……、ゲーセン行かないっすか？ 本当は服とか買ったいんっすけど、学園にも行くっすから。邪魔になるっすしね。」

「確かにな。なら、今度他のメンバーも誘って行くか？」

「それもいいっすね。文化祭が終わって時間がある時にでもいくっすか。」

「だな。なら、ゲーセン行くか。」

「金が…………。」

「あはは、悪いっすね。でも、負けた蒼影が駄目なんっすよ。」

何があったか？ゲーセンに行った後、ゲーセンで使う金を賭けて、シューティングのスコアで勝負したら負けたんだよ。

その後は、いろいろやったからかなり金使ってしまったんだよな。

久しぶりにゲーセン行っだし、楽しめたからいいとするか。鈴花も楽しそうだったからな。

「じゃ、学園行くっすよ。一応は隠してるっすけど、生徒会もいるしちゃんと隠しておくっす。」

「そうだな。今回からは俺達も警戒されてる事だしな。」

「正確には蒼影だけっすけどね。」

学園についたな。やっぱり文化祭前だけあって、普段より生徒の数が多いみたいだな。

「さてと、生徒会にバレないようにさっさと終わらせようぜ。」

「なら、あたしは下から行くっすから、これを渡しておくっす。あ、後、何かあったらちゃんと連絡入れて帰ってくれっすよ。」

「それくらいはわかってるから。何かがない方がいいんだけどな。」

さて、仕掛けは計八個だし俺は四つくらいで大丈夫か。

八個って少ない？少ない理由は、生徒会にバレた事もあって少なかったんだよ。多く仕掛けたらその分バレるだろうしな。

「確か……、こことここだよな……。」

一つは生徒会の近く、もう一つは逃げる時用に仕掛けている。分かるだろうけど、生徒会の足止めと逃走用だ。

ちなみに、これは一度使えばバラバラになる様に作ってるから、再利用される心配はない。

仕掛けはの一つは、一定の振動を感じると網が飛び出るという物だ。もう一つは、ボタンがあって押したら水が吹き出るようになってる。

一定の振動ってのは約十人くらいが走った程度の振動だ。だから、追いかけてる時くらいしか、作動しないはずだ。多分。

「さてと、隠し終わったな。」

♪

「ん？この音はメールだよな。」

『姉さんから連絡来て、家の手伝いしないといけなくなったっす。下の四つは終わったっすから、残りはお願いするっす。』

本当にすまないっす。』

……、鈴花には悪い事したな。俺の為に協力してくれたんだし。

こっちも終わった事だし、適当に見て回るとするか。

文化祭前日、最終調整（後書き）

「なあ、黎白。」

なんだ、カイナ。

「なんであたし達の転校飛ばしたんだ？」

「アナも気になるー。」

……………今回は文化祭前日の学園を回るって感じになったな。

「おい、答えろよ。」

別に忘れてた訳じゃないんだ。ただ、この話を書いてたから、話入れなかったんだ。

「アナ思うに、それが忘れてるの。」

「しかも出番少くないか？」

前にも言ってたけど、文化祭終わったら原作前くらいで日常編書くから、その時まで我慢で。

「出番あるの？」

一応は、一話に二、三人くらいしか出さないつもりだから、大丈夫だと思う。

「なら、今は我慢してやるよ。」

悪いな。

「ねえ、アナ達何で出したの？」

何で今更？

「んー、ネタが無くなったからだとアナ思うの。」

「黎白の実力不足だ。」

.....。

「で、どうなんだ？」

言ってなかったか？Φブレイン見ながら書いてたからだよ。

「単純だな。」

まあ、いんじゃないね。あ、後はちょうどパズルにハマってたからだ。

「パズルだすの？」

気が向いたら。じゃ、今日はここまでな。ネタないから。

「わかったよ。」

「じゃあね。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0262y/>

転生して異世界廻り～D.C.?編～

2011年11月30日20時05分発行